
黒鵲鴿

美紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒鶴鴿

【コード】

N0099V

【作者名】

美紅

【あらすじ】

現実から逃げ出したい主人公（女）は、今夜もまた自室でマジナイの言葉を紡ぎ続けていた。しかしその夜はいつもと違い、不思議な声が脳内に響いた。自分を救ってくれるという微かな望みに揺れて、彼女はその声にこえる。

吸い込まれた先がどんな場所であるかも知らずに。

序 囚われの夜 (前書き)

人名以外のルビが控えてあります。また、若干の時代劇要素を含んでいるため、言い回しが読み難い場合(人物・名称)があると思います。

何か疑問やお気づきの点があれば、気兼ねなく教えて下さると助かります。

序 囚われの夜

我を殺して浄化し給え

何度も何度も呟き、何度も何度も書き綴った。

しかし声は届かず、地に埋もれるばかり。

涙すら流れない。

血脈すら温もりを感じない。

目の前に広がるのは闇ばかり。

「誰か、私を殺して……」

何度と無く吐き続けた言葉を再び口にした。

今にも泣き出しそうなほど潤ませた目からは涙が零れることも無く、ただただ虚空を見詰め、何かに訴え続けている。そして膝を抱えて、小さな身体を丸めながら俯いた。

漆黒よりも深い闇を携えた瞳と、言い様の無い感情に歪められた林檎色の唇。月明かりに映える紅潮した白い肌と鴉の濡れ羽のごとき黒い髪。

少女というよりも大人びた、乙女というには幼さを感じさせる、曖昧で形容し難いその姿態と容貌は少なからず人目を引く。

陽が入り、夜の闇の中で月明かりだけに照らし出されたその躰は、太陽の下で目にするよりも数段と輝きを増している。しかしそんなことは、本人にとって何ら関心のあるものではなかった。

心を動かすものはただ一つ。

「……私を、殺して……」

掠れた、震える声でもう一度呟いた。

その声は変わらず冷えた闇の空気に溶け込む 筈だった。

『その願い、真に心の声ならば、汝が魂、我が貰い受けようぞ』

「え……？」

誰も居る筈の無い部屋に、自分以外の声が響いた。顔を上げて周囲を見回す。当然ながら目に映るのは無人の場所。見慣れた家具と部屋の様子だけだ。

ただ少し、息苦しさを覚えた。

大地から湧き上がってきたように低く、重たさを感じさせるその声に聞き覚えは勿論無い。

しかし優しさと親しみを感じ、冷静にも似た気持ちはその身を包んだ。

『その願いに、偽りは無いか？』

「……それは、あなたが私を殺してくれるということ？」

『今の汝を殺め、新しき汝を生む』

「私を生まれ変わらせようということ？」

『汝が望むのなら、それも良い』

「私は、生まれ変わることもなんて望みはしないっ」

強く芯のある声で言い放つと、息を吐くように空気が揺らいだ。

『では、何を望む』

「私という存在の、完全なる死」

淀みの無いはっきりとしたその言葉に、“声”は再び揺れる。

『何故、死を望む』

抑揚の無い“声”だけのそれがあまりにも優しく、包み込むように胸に響いた。

「……この世界は腐りきってる。けど私には成す術もなく見ていることしかできない。どんなに声を上げてても、聞き入れてくれる者も居ない。嘆くことしかできない身で、この世界に必要ともされない存在でありながら生き続けることなど無意味だわ。…だけど私は自分の手で死ぬことが出来なかった。理由は分からないけど、今もこうして生きているのはその所為。だから、私を殺してくれる存在を、この世界から排除してくれるその手を、ずっと望んでいる……望みはそれだけよ」

懺悔のような彼女の言葉に返事は無く、沈黙が拡がった。

(あの声は、ただの夢ね……バカみたい、惨めだわ……)
自嘲しながらこつりと壁に額を当てると、突然その場所が光り始めた。

丸く、月の影がそこに映し出された様に輝くその場所に、そつと手を伸ばす。

(温かい……?)

指先から感じたその温もりに眉を顰め、真つ直ぐに見詰めると、硬質である筈の壁が水面のように揺らいだ。

『汝が魂。我が貰い受ける。異存は無いか』

壁からあの“声”が聞こえた。

夢ではなかったのだと思うと、ゴクリと喉が鳴る。

「……この世界の、私の存在を消してくれるのなら……」

『心得た』

短く“声”が答えると、水中に引き込まれるようにして光る壁に吸い込まれる。

室内には、再び静寂が訪れる。何事もなかったかのように、変わらぬ宵闇が満たしている。

異なるのは、主を失くしたことだけ。

縛れた羽（一）

「死人かえ？」

沈黙を破るようにして、女性の声が耳を突いた。

「……いえ。息も脈もございませぬ」

別の女性の声。こちらは少し落ち着いた声。

もし。と体を軽く揺す振られて、初めて自分に声が掛けられているのだと気付いた。

重い瞼をゆつくりと押し上げると、見たことの無い顔が自分を覗き込んでいる。

僅かに瞳を巡らして周囲を見回せば、生い茂る木々と青く澄み渡った空。そして黒衣に身を包み、黒色の布で額の辺りを隠している人物が目に入った。

「もし。どうされたのです？」

肩口に手を置いた女性が目を合わせて尋ねる。

「ここは、どこ…？」

そう訊こうとして、自分の声が出ないことに気付いた。

改めて理解すると喉が灼けるように痛い。息をすることさえも苦痛に感じる。乾いた唇を動かそうとしたが、それも微かに震えるだけだった。

「口が利けぬのか？」

「いえ。声が出ない様でございます」

「……息があるのじゃ、連れて参れ」

黒衣の女性は軽く息を吐き、後ろに居た女達に言った。すると数人の影が動き、女性達が体の横に膝を着いたかと思うと、自分の体が宙に浮かぶ感覚におそわれた。人の手によるものよりも、雲にでも乗せられているかのような、そんな感じだ。

何が起きたのかと身動きする前に目の前の光景が流れます。

目で追おうとしたが、くらりと意識が遠のき始めた。

吸い込まれるように再び闇の中に、沈んで行く。

(また、夢……)

夢の中で、何度もあの声を聞いた。

闇の中で独り立っている自分を見下ろす自分が居る。

立っている自分も、見ている自分も微動だにしない。

何を言っているのか、何を伝えたがっているのかは解らなかったが、ただその声あまりにも哀しく、胸を締め付けるように響いていたことだけは覚えている。

次いで覚えているのは、鼻先を通り過ぎる風に甘い匂いが混じり、でもどこか荒々しさを含んでいた空気。

哀しい旋律。

何故かそう感じて、思った瞬間頬を熱いものが伝った。

「水を取り替えて参れ」

直ぐ側で声がした。先刻、自分を助け起こした女性と同じ声だ。

まだ重く閉じようとする瞼を抉じ開けるようにして押し上げ、瞳を巡らせる。

見たことの無い木造りの天井と、畳の匂いが鼻をついた。

「お気付きになられましたか。ご気分はいかがでございますか？」

柔らかく微笑まれ、返事をしようとしたが声が出なかった。相手はそれを察知したように頷き、また微笑む。

「今、あなたをお助けになられた御方をお連れ致します。少しお待ち下され」

言って、傍らに控えていた女官らしい少女に言付けた。

少女の大きく二つに結った髪が揺れて、甘い香が流れる。春の、花の香りに似ていた。

その少女と入れ替わるようにして、青い衣を身に纏った童女が入ってくる。

枕元に膝を付くと、手にしていた盥たらいを置いて入り口付近にちょこんと腰を下ろす。童女からも、甘い花の香りがした。

あまりに自然な動作で気付くのが遅れたが、皆、着ている物は和装に似た前合わせの着物を幾つか重ねている。それは古典の授業で見た平安絵巻に登場する女性たちを連想させるような、十二単の形に良く似ていた。

もっとも、資料と実際に目にするのでは感じるものが違ったが、少なくとも自分の住んでいた世界と同じ様相であることが、幾分か心を落ち着かせる。

「姫君が御着きになりました」

声が出た方に顔を向けると、先程出て行った少女が床に手を付き頭を下げている。部屋に居た女性たちも道を開けるように端に避けて、手を付き頭を垂れる。

床を滑る衣擦れの音と共に、一人の少女が室内にやって来た。

掲げられていた簾すだれを潜り側まで来た少女は、目元に黒い布を巻いて眼を覆っている。

自分を「死人か」と聞いたあの少女だ。

手も引かれずに一人で歩いて来た姿を見た後だけあって、その姿に驚く。

「声は、出るようになったかえ？」

笑みを含んだその声は、空気を突き破るように、そしてゆるやかに響く不思議な声だった。

「まだ、声は出ないようでございます。唇を動かすことも出来ませんし、こちらの言っていることも分かっているようでございますれば、原因は喉の方かと」

「どれ、妾が診よう」

少女には枕元に腰を下ろすと、右手を差し出した。その手は蠟のように白く、細い。

左手で袖を押さえ、首の付け根から喉元に手をかざす。触れられたわけではないのに、その部分にひんやりと冷たい気配が感じられ

動けなくなる。もとより痺れに似た感覚が全身を襲っていて動ける状態ではなかったが、針にでも押さえ付けられているようだ。

何度か首筋を往復し、少女は溜息混じりに言った。

「これは、妾には治せぬ。どうしたのか……」

手を戻しながら、白磁のような顔に思案の色を浮かべて、少女は小首を傾げる。

すると突然、廊下の外から元気な良く通る少年の声が届いた。

「キョウギミは居られますか？」

開け放たれていた障子戸の向こうを見ると、庭から小麦色の肌に金色の髪を風に揺らしながらこちらへ向かって来る少年の姿が目に入った。

袴着のような格好だが、やはりそれもどこか見慣れない着物である。

「あれ、新入りさんですか？」

「先日、山道で見つけましたの。して、そなたは何用じゃ？」

「兄上から文を預かって来ました」

「それだけではなからう？」

「あ、お分かりになりましたか。実はこの仔の様子がおかしくて、診て頂きたいのです」

少年は腰に下げていた筒と一緒に、抱え持っていた小鳥を一羽、手に乗せて差し出した。

“キョウギミ”と呼ばれた少女は縁側に歩み出ると、ゆるやかな動きで腕を伸ばし、その小鳥に手を差し出した。布からちよこんと顔を出した小鳥の頭に、先程まで横たわる首に触れていた手が触れる。

その様子を心配そうに少年は覗き込んでいた。

「どうですか？ 治りそうですか？」

「……うむ。この鳥、何処で手に入れられたのじゃ？」

「一昨日前に、西の山道で見つけました。ひどく弱っていたので連れ帰ったんですが、一向に泣き声を挙げないので心配になりました」

「西の、山道 ……」

「どうかされましたか？」

「いや。この鳥は強い瘴気に当たってしまったのじやろう。宮の泉を飲ませておやり。二日もすれば元通りに鳴くことができよう」

少女がそう言うのと、少年は顔をぱつと明るくし破顔する。本当に嬉しそうな表情だ。

小鳥に何か話し掛けている少年から、筒を受け取った少女は中から一枚の紙を取り出すと紙面に掌をかざす。

「うむ。クヌエ。妾は宮に参る」

「承知致しました。直ぐに車を用意させます」

応えたのは枕元に座っていた女性だ。

クヌエが立ち上がり部屋を後にしようとするのと、少年が不意に顔を上げて口を開く。

「宜しかったら、僕のを使って下さい。街に寄って帰るつもりなので、一人の方が楽ですから」

「左様か。では、お言葉に甘えるといったそう」

少年の申し出を受けたキョウギミは、来た時と同様に衣擦れの音と共に部屋を後にした。クヌエと他の女性たちもそれに続き出て行ってしまつと、この場には少年だけが残った。

少年はひとしきり小鳥を見終えると、縁側に身を乗り出して無造作に履物を脱ぎ、室内にやって来る。どうしたのだらうかと少年を見ていると、口の両端を上げて傍に腰を下ろす。

その時、金色に見えていた髪は明るい茶色だったのだと、見上げて知った。

「どうも、初めまして。あなたの名前は何と申すのですか？」

唐突に訊ねられ、困惑しながらも自分が声の出ないことを伝えようと手振りで表そうとする。

少年も一瞬戸惑っていたが、どうやら理解してくれたのか再び笑顔を見せた。

「早く、治ると良いですね。僕はシヨウウン。どうぞ宜しく」

右の掌に書かれた文字は、自分の知る漢字だった。

霄雲。字の形からすると、どちらか空の意味を持つのだろう。少年の持つ雰囲気にとても合っている気がする。青く、澄んだ空のような印象だ。

しかしそれは、悲しみを膨らませるものでもあった。

私は、また死に切れなかったのか

服装は見たことの無い物ではあるが、どうやら自分の居た世界と何ら変わりはないらしい。そう思うと、声が出ないままでも構わないという気になってきた。胸中は再び暗雲の立ち込める深い闇へと変わっていく。

「あなたは、綺麗な星を飼っているんですね」

突然言われて、思わず聞き返すような視線を向ける。霄雲は相変わらず笑んでいる。

自分の方こそ瞳に星を宿したようにキラキラと碧い目を輝かせているのと思う。時折、本当に夜空の星のごとく金色を帯びて、不思議な印象を与えている。

「黒くて、不思議な眼ですね」

「霄雲殿も、オリフミの瞳に魅せられましたか？」

廊下から柔らかな笑みを含んだクヌエの声が響いた。クヌエは二人の童女を連れて簾を潜る。

「オリフミと言うのですか？」

「はい。姫様がそう名付けられました」

「なんだ、本当の名ではないのですね」

残念そうに溜息混じりで返す霄雲に、クヌエは小さく笑いながら側に腰を下ろした。

そして持って来た急須のような器から陶器の茶碗に湯を注ぐ。湯気に紛れて甘い香が漂った。

「この娘は声が出ぬのですもの。この場だけでも名が無くては困りましょう。真名は声が出た折に聞けばよろしいのです」

「それもそうですね。で、どんな字を？」

「機織はたおりの“織”に史書の“史”と書いて織史でございます」

「あれ、香りの名ではないのですね。じゃあ、ここに置かれる気はないのですか？」

「さあ……。それは私ごときには量りかねます」

「置く気が無いのでしたら、僕の所で面倒を見ますよ。丁度三人ほど辞めて行かれまして、空気がありますから」

霄雲は織史と名付けられた娘に向き直り、微笑を浮かべる。

「あなたにその気があれば、僕の宮に来ませんか？」

どこに連れていかれようと、構わないわ

織史は少し眼を伏せた。

その隣でク又工は微かに笑い声を上げる。

「辞めたのではなく、辞めさせたのでございましょう。聞き及んでおります。霄雲殿の小鳥を一羽、殺めたそうでございますね、その女官は」

「そうそう。あまりに煩く鳴く上に全く懐かないし、上等の絹に爪を掛けて台無しにしたからって。でも幾らなんでも飲み水に毒を入れるなんて酷い話ですよ。あの者達に世話を任せた僕が間違っていました」

眉を顰めて顔を背けた霄雲に、ク又工は淹れたばかりの茶を差し出す。その顔には、小鳥に対し少なからず憐れみを覚えたのか、笑いを止めて曇った表情が浮かんでいる。

「その点、この方なら大丈夫そうだ。なにせ、僕以外には近寄ろうとさえしなかったこの仔が懐いているようだし」

霄雲に言われて横を見ると、織史の側で首を左右に動かし、大きな瑠璃色の眼でこちらを見ている小鳥が居た。

碧と翠に黄色の混じった鮮やかな羽と、先の丸まった長い尾のあ
る鳥だ。

小鳥は見詰め返しているとちよこちよここと飛び寄り、頭の羽を頬に摺り寄せた。

鳴き声を病んだ小鳥は華星かせいと名付けられ、その日の夕暮れ前に霄雲に連れられて帰って行ったが、翌日の昼前には再び織史のもとにやって来ていた。

今日は霄雲の手ではなく籐で造られた鳥籠の中から、織史を見詰めている。

クヌエ 薫衣の看病もあつて多少の体力が戻った織史も、今は上体を起こして華星を迎えていた。

指先に乗せて見ると、丸い瞳が何かを訴えているように見えるが、その意図を知ることができなかつた。

「昨夜からずつと羽ばたいていたものですから、きつとあなたに会いたいのだと思つて連れて来たんです」

華星を籠から出し、霄雲は織史の横に降り立たせる。ちよこちよこと跳びはね時には羽を広げて、華星は織史に近付いた。

「霄雲殿のお考えになられた通りのようでございますね」

薫衣は軽く笑みを浮かべながら茶を差し出す。湯気に満たされた香は、昨日と同じ花の香りをしている。

この屋敷、シングウ ? 宮の主である叶君つひぎは、大層薬品類に詳しく、また香りのするものが好きなのだそうだ。そのためか、ここに勤める女官や侍女は本名ではなく花や香料の名を持っているという。

そう、女官長である薫衣から昨夜侍女二人を紹介する折に、織史は教えてもらった。

茶以外にも薰物は勿論、食事や蠟燭の類に至るまで香りを放つものが揃えられている。しかし、開け放たれた屋敷であるのと、風通しの良い造りであることもあつて香りが籠もることは少なく、時折風に乗つて鼻先をくすぐる程度のもので不快に感じることはなかつた。

織史は平安時代にでも来てしまったようだと思ひながら、その話しを聞いていた。

以前、平安貴族の女性たちが着衣に香を焚き染めていたという話を聞いたことがある。そうした習慣を受け継いできた者達なのだろう。だとすれば、皆の服装や言葉遣いにも頷ける。そしてきっと、都会の喧騒から離れたこの場所で暮らし続けてきたのだろう。庭から吹き込む風も空気も、とても心地良いのはそのせいだろう。

そう思い始めると、不意に家のことが浮かび始めた。

今頃家族はどうしているのだろう。突然消えてしまった娘を、どうおもっているのだろうか。気の利いたことも言えず、女の子らしいことのできなかつた不器用な娘を。

けれども涙は出なかつた。母の顔も家族の顔も、友人の顔も全て浮かべることができなかつた。場所や雰囲気、漠然としたものは思ひ出すことができたが、何故か誰一人としてしつかりと顔を思い浮かべることができない。それと同時に、忘れてはならなかつた何かがある。否、忘れなくなかつた何かを失ってしまった想いに駆られた。

全て忘れてしまえば良かったのに

中途半端に残った感情を押し込めるように、織史は眼を閉じた。

「おや、お顔の色が優れませんね。 …… それでは僕らはこの辺で失礼させて頂きます。あまり無理をさせて、治りが遅くなってしまうとはいけませんから」

薫衣と談笑していた霄雲が織史の様子に気付く、鳥籠を引き寄せながら言った。そして華星を呼ぶが、華星は織史を挟んで反対側に飛んで行き、霄雲の手から離れてしまう。

やれやれと溜息を吐いて霄雲は華星を追ったが、なかなか捕らえることができない。その姿は微笑ましく見えたが、呆れ果てたように立ち尽くし眉を吊り上げ始めた霄雲の様子に、織史は代わって華星に右手の人差し指を差し出した。

指に飛び乗った華星を頬に引き寄せ、お別れするかのように瞳を閉じる。

華星もまた、織史に頭を摺り寄せてそれに応えた。涙こそ流れはしないが、華星は哀しげに瑠璃色の瞳を織史に向けた。

微かに和らいだ織史の表情と華星の様子に、霄雲を始め薫衣までもが魅せられていたことを、当のふたりは気付いていなかった。

そしてそのままおとなしく鳥籠に入った華星を連れて、霄雲は帰路についた。

「では、叶君のご様子も後で文に記して送らせて頂きますよ。それから織史殿、もし宜しければ、明日もまた華星を見ていただけませんか？」

相変わらずの笑顔を向けられ、織史は戸惑ったように薫衣に視線を送る。すると小さく笑った口許のまま、薫衣は頷きを返す。それを見て織史もまた、霄雲に向き直りゆつくりと頷いて見せた。

霄雲と華星が屋敷を後にすると、薫衣と青い衣の童女 名を桔梗ききょうと言う彼女も、自分達の仕事をするために部屋を後にした。

そして残ったのは臥せっている織史と、桃鈴とうりんという名の少女だけとなる。

桃鈴は先日叶君を呼びに出て行った少女で、紅色の着物に白地の衣を重ね、髪を耳の横に大きく結っている。織史の食事や香の支度など、身の回りのことはこの桃鈴が世話をしてくれていた。しかし、桃鈴も織史と同じように言葉を発することは一度も無かった。

何するでもなく、僅かに目を伏せて黙って座っているだけの桃鈴を、織史は人形のような子だと思っていたが、黙っていてくれることにありがたいとも感じていた。

話しかけられたとしても、こちらに返す言葉は無いからだ。それに、変に詮索されるのも嫌だった。

今の織史にとっては、沈黙である方が助かる。

しばらくして、ふと織史は目が覚めた。

することもなく、うとうととしていたのは憶えている。風に揺れる花燈籠の明かりを見ていたら、いつの間にか眠っていたらしい。

見れば桃鈴の姿も消え、灯りも消えている。部屋の障子戸は閉められていたが、月明かりが微かに室内にまで届いている。

瞳を巡らして部屋の中を見る。昨日気付いたのだが、どうやら自

分の眼は夜目が利くようになっていらい。この暗さでも物がはつきりと見えているし、距離感もある。

織史はごくりと喉を鳴らした。

声は失ったが、新たに視力を得た。自分の体に何が起こっているのだろうか。

けれど不思議と恐怖は感じられない。そのことに対しては、だが、もう一眠りしようと布団を引き上げて目を閉じると、ガタンと物音が響いた。

次いで風に揺れる木の葉の音と、何かに呼ばれているような音が聞こえた。あの夜に聞いた“声”にどこか似ている。

それが止み、一種の静けさが部屋を満たし始めると、織史の動悸が激しくなる。心音と自分の呼吸する音とがやけに耳奥で響く。胸が苦しくなり、無意識のうちに襟元を握り締めていた。

早く、早く、早く

織史は切にそれだけを呟いていた。

額を汗が伝い、強く瞑った瞼が微かに震えて指先が冷えていく。

これもまた、織史の 彼女自身の病であった。

突然音が消え始め、自分の心臓が高鳴り出す。荒い息遣いと共に脳に響くのは血脈の音だけ。次第に全身の感覚が無くなり、耳と頭だけが冴える。そして体中を駆け巡るのは決まって不快なもの。

原因が何であって、何故そうなるのか解らない。それがまた自身を追い込んで行き、ただ自分の周りを漂う空気の気配が嫌でたまらなくなる。しかし対処できない。そして吐き気にも似た嫌悪感を増幅させていく。

背中を冷たい汗が伝う。

そして心臓を直に、強く、握られていく …

翌日、薰衣の声によって織史は起こされた。

日は空高く昇り、部屋の中にその光が注がれている。

眠っていたのか気を失っていたのか、自分では分からなかった。目を開ければ霄雲と華星の姿が目に入った。ふたりとも心配そうに自分を覗き込んでいる。

織史は起き上がろうと腕に力を込めたが、痺れが走って崩れそうになる。桃鈴がそれを助けようと手を伸ばしたが、薰衣がそれを制した。

「無理はなさいますな。今日はどうぞお休みください」

強く、有無を言わさぬ語調で言い放たれ、織史は布団に戻る。まるで母にでも叱られているようだと思つた。

そして額や襟元を拭かれて、初めて自分がひどく汗をかいていたのに気付いた。

霄雲は織史に気を遣ったのか、早々に華星を連れて帰る仕度をした。

部屋を去る間際まで華星が羽をばたつかせて籠から出ようとしていたが、霄雲に諫められ、柵の間から自分を見つめ続けていた瑠璃色の瞳が目痛かった。

哀しげに濡れた瞳と姿があまりにも痛烈で、自分を捕らえて放さず、早く治して遊んであげようという気さえも起こった。

しかしその日の夜もまた、織史の目は覚めた。身に起こることは変わらず、昨夜同様意識を無くすように眠っていく。

それが三日三晩続き、外に出向いていた叶君が昼過ぎに織史の様子を見にやって来た。

初めて会った時と同じく、叶君は目元を黒い布で覆っていた。

背中に流れる漆黒の髪も、冷たい手も変わっていなかったが、その白い肌にはすこしだけ疲れが滲んで見えた。

診察が済むと、叶君は薰衣に何か伝えてまた直ぐに何処かへ向かってしまわれた。

声が出なくとも叶君ならば解ってくれるような気がして、織史は伝えたいと思うことがあったのだが、自分よりも年下に見える彼女

が疲れを隠している姿に、引きとめようとする気持ちを抑えざるを得なかった。

食後に出された薬湯を口にして、織史は伝えようとしていた想いを胸の奥に仕舞い込む。

忙しい中でも私に気を遣ってくれたんだ。こんな私に

そう思うと、どんなに苦い薬でも甘く感じられた。

深夜、再び目が覚めてあの不快感に襲われたが、翌朝の目覚めは以前よりもずっと楽だった。

きつと叶君の薬のお蔭だろう。

薫衣と桃鈴も、織史の顔色を見て安堵の息を吐いた。

それから食後には、薫衣に勧められて織史は久し振りにお風呂へ入ることになった。少し身体を動かしてみるのも良いだろうと叶君から云われたらしい。

それまでは桃鈴や桔梗に体を拭いてもらっていたのだが、ゆっくりと湯に浸かれるのはまた別だ。

心なしか廊下を歩く足取りも軽くなる。

案内された木戸を開けて中に入ると、花模様の衝立の後ろから、湯気が立ち昇り視界が白けていた。

衣服を脱いで籠に入れ、旅館の浴場か銭湯にでも来た気分になりながら奥へ進むと、シャワーや蛇口のような金具は見当たらず、石で組まれた小さな滝から湯が流れて来る光景が目に見え込んだ。

石畳を少し進むと、滝壺が少し広く造られており、中に簀が敷かれていた。湯は一度そこに溜まり、再び細い流れとなって出て行くようだ。風呂場というよりも露天風呂と言う方が的確で、囲んでいる塀の向こう側は鬱蒼と茂る森が広がっていた。近くに源泉でもあり、それを引いているのかもしれない。

いずれにしても、自分の土地に温泉が湧いているなんて、なんと贅沢な家なのだろう。屋敷も広いようだし、家具の調度も良いことから、とても裕福な家柄のようだ。

そこでふと、織史は不思議なことに気が付いた。

こちらに来てから一度も、薰衣以外の大人を見ていない。

叶君の親とも顔を合わせたことが無い。

二人とも多忙で家に居ないとしても、見るからに学生の身分である叶君や霄雲、桃鈴や桔梗たちが学校に行っている気配も無いというのは、どうもおかしい。毎日遊びに来てくれているのは正直嬉しいが、学校はどうしているのだろうか。

一度考え始めると没頭してしまい、他のことが頭に入らなくなる。そんな織史を現実に取り戻したのは、一羽の小鳥の鳴き声であった。

慌てて側に置いていた衣を引き寄せ、声のする方を振り返る。ピーツ、ピーツという高いが優しい響きを持った鳴き声と共に、引き戸の開く音がする。そして湯の流れる音に紛れて、誰かが入ってきた気配。それと同時に目の前に青い物体が飛び込んできた。

どこか興奮したように高々と囀っているそれは、鮮やかな翡翠色の羽を羽ばたかせて、織史の肩に飛来した。頬に擦り寄る愛らしい姿は、間違いなく華星のものだった。

「お召し物はこちらにご用意いたしました。どうぞごゆっくり、お寛ぎ下さい」

桃鈴の声を聞いたのは二度目だ。

叶君の到着を報せた時と、今の言葉。そのどちらも感情の無いアウンスのようで少女らしさを欠片も感じさせないものだった。

しかしどう返事をすればよいかと戸惑っている内に、再び戸の開く音がして桃鈴は立ち去ってしまったようだ。

織史は少しほっとしながら息を吐き、華星を見返す。瑠璃色の瞳を輝かせて、華星はもう一度だけ高く澄んだ声で鳴いてみせた。

声、出るようになって良かったね。ステキよ、あなたの声
左手の人差し指に乗せ、織史は華星と向き合った。すると華星は少し照れたように一声鳴き、湯煙の中を飛び立つ。

否、そう見えただけで、別のことを思っていたかもしれない。

華星は小鳥で、自分は声が出ないのだから。

織史は気を取り直して湯から出ると、石鹸に似たもので身体を洗い始める。

何だか不思議な気分だった。見ず知らずの家で、看病してもらい、その上お風呂にまで入れてもらっている。自分の神経も相当だと思っ

う。

甘えて、だらけて、なんて愚かな姿なんだろう

自分を疎みながらも、機械的に腕は動いていた。

風が吹くと少し肌寒かったが、蒸気もあつて快適な風呂場である。湯に浸かると、少し熱めの湯が徐々に身体を解きほぐしてくれる。久し振りだからこんなに良く感じるのか、それとも湯の成分なのかは分からなかったが、とにかく気持ち良かった。漂うことの心地良さを感じていると、一瞬でも、自分が生きている苦痛や感覚を忘れさせてくれるほどに。

『あまり浸かっていると、のぼせてしまうぞ』

大地を震わせ、胸の奥で波紋が広がるように響くこの声には、聞き覚えがあった。

弾かれたように顔を上げて、織史は迷わず声のした方を向く。

あなたはあの時の

視線の先には、先程指に乗せた華星の姿。

人の姿は、影は勿論、髪の一筋すらも見当たらない。しかし“声”は再び波紋を作る。

『いかにも。あの夜、そなたと言を交わしたは我ぞ』

あなた、まさか華星だったの？

『確かに今はこの者の身を借りてはいるが、我は鳥ではない』

“声”に少し慥然とした響きが混じった。

織史は、いまいちこの状況を飲み込めずに華星に向かって瞬きを繰り返してしまう。

そしてふと、湯気の中に浮かび上がった華星の瞳が、瑠璃色から

黒曜石の色に変わっていることに気付いた。

「人が、来たようだ……」

霧に消え入るように声が薄れて、戸を叩く音が響いた。

「突然済みません、織史殿。こちらに華星が来ていると聞きまして、その…お邪魔じゃないかと…」

焦りを帯び、口籠りながら声を掛けてくるのは霄雲である。

織史が華星を振り返ると、もう瞳の色は元に戻っている。一体何だったのかと思いつながら、織史は湯から上がると急いで着替えを始めた。

仕切り戸は障子ではなく格子の間に板のはまったものであったが、手を伸ばして桃鈴の用意してくれた籠を引き、衝立の内側で着替えを済ませる。途中で華星が鳴き声を上げ、霄雲は困ったように何か呟いていたが、戸を開けるような無礼は決してせず、中から開かれるのをじっと待っているようであった。

“声”の言った通り少しのぼせてしまったのか、頭がぼんやりとしてなかなか思うように急ぐことができず、長く待たせてしまった。織史がそろそろと戸を引くと、鳥籠を抱えて座り込んでいた霄雲は慌てて立ち上がる。しかし隙間から飛び出した華星を取り逃がし、しまい、呆れたように大きな溜息を吐いた。

「まったく……。本当に済みませんでした。ご迷惑をおかけして」
頭を下げてくる霄雲に、織史は首を振る。その顔には微笑が見て取れた。

ふたりで空の鳥籠を揺らしながら部屋に戻ると、華星は庭先でその歌声を披露していた。

とても優しく、美しい響きに、薫衣たちも和んでいる様子だ。

織史は心の中で華星に賛美の言葉を贈り、同じ様にその声に耳を傾ける。チラリと横を見ると、霄雲も満足げに目を細めていた。

午後になると、昼の天気とは打って変わって雲が空を覆い、雷鳴

が轟き始めて嵐が屋敷を襲った。

ひどくなる前に退出しようとした霄雲であったが、華星が織史の側を離れようとせず、籠に入れようともがいている内に風雨が強さを増し、今夜一晩は屋敷に留まることとなった。

華星は声と共に元気まで取り戻したようだと苦笑いを浮かべる霄雲の後ろで、桃鈴や桔梗たちが安心したような面持ちになっているのに、織史は気付いていた。

この屋敷は木造のようであるし、周囲は木々が立ち並んでいる。雷が鳴るとそれなりの心配があるのだろう。そうでなくとも、桔梗たちはまだ幼い。平静を装ってはいても、心細いのは確かな筈だ。夜になると一段と嵐は強まり、華星は織史の胸にうずくまってしまった。翼を固く閉じ、微かに震えている。

以前、鳥類は空気の波、簡単に言えば音や大気の変化に敏感であると聞いたことを思い出した。

鳥に限らず、自然の中に生きるものたちはその僅かな変化を見逃さぬように、常に耳を傾け視線を注ぎ、神経を鋭敏に保っている。愚鈍な人間には見えない世界を、捉えているのだ。

華星もまた、自分には分からない何かを感じ取っているのだろう。そしてその影響で、自分の身体も震えているのだと、織史は言い聞かせるた。冷えた指先を握り締め、打ち付ける雨と雷鳴に耳を澄ませながら、心がざわめくのは、華星を胸に抱いているからだ。

霄雲は桔梗たちと共に何処かへ行ってしまった。

かと言って華星を籠に押し込めてしまうのもしのびない。

そう思い身に着けていた薄手の帯を解き華星を包むことにした。雀ほどではないにしろ、華星は小さな身体をしているから、直に抱くのは少し危うい気がして、圧力が掛からないようにと織史なりの配慮だ。けれど華星はそれを嫌がり、結局両手で包むことにしたのだが、そのお蔭で華星の心が掌から伝わってくるようで、自分まで震えてしまっている。

しばらくして、花燈籠一つだけを残して部屋の明かりは消えてし

まい、織史は困り始めた。

時計がないために正確な時刻も分からないが、まだそれほど時間は経っていない筈だ。

手持ち無沙汰に、寝てしまおうかとも考えたが寝具がどこにあるのかも分からない。

廊下に出て人を呼ぼうかとも思ったが、声が出ないのでどうしようもない。

第一、どこへ行けば桃鈴や薫衣に会えるのかも分からないのに、勝手に他人の屋敷内を出歩く気などにはなれなかった。

仕方なく織史は華星を抱えて奥の壁にもたれ掛かって腰を下ろし、初めは室内を見たり華星を見詰めたりしていたのだが、その内にうとうとと眠気を覚えて、強くなる風と雨の音に包まれながら、結局織史は眠り始めていった。

…カタン…

ふと気が付くと、外の音が聞こえた。

雨は止んだようで風と木の葉のざわめきだけが響いている。それに紛れて物音が耳に入った。次に障子戸の開く音がして、誰かが入ってくる気配がした。

雷雲……？

雲の合間からのぞく月明かりが、室内に差し込む。

重い瞼を薄く開くと、すだれを上げて誰かがこちらを見ていた。

逆光で顔は判らないが、その人物は織史に何かを話し掛けてくる。しかし再び雷鳴が轟き、月は厚い雲に隠され、風が荒れ始めてその声は掻き消された。外の喧騒に紛れた声が睡魔で意識の朦朧とした織史に届く筈も無く、遠くにその人物を感じながら織史は呑み込まれるように寝入ってしまった。

「織史殿、申し訳ございません！」

ドタバタと慌しい足音が近付き、勢い良く障子戸の開く音と同時に

に霄雲の声が響き渡った。

「何だ、騒々しい……っ」

目を擦りながら身を起こそうとした織史の頭上から突然声が降り、一気に眠気を吹き飛ばした。

顔を上げると直ぐ目の前に、露骨に眉を顰めた顔がある。勿論初めて見る顔であったが、それよりも何よりも、自分がその人物の膝の上に頭を乗せていた事実には織史は絶句し、急ぎ身体を離す。

しかし当人は、織史よりも突然騒がしく起こされたことに対する不満からか、頭痛を宥めるような仕草で額に手を伸ばす。

天井では、どうして今まで気付かなかったのだろうかと思うほど、華星が室内を飛び回りながら騒いでいる。

「失礼　っ」

短く断りを入れて霄雲が障子戸を開けると、差し込んだ朝陽に照らし出され、目の前の人物の髪が輝く。

キラキラと、星屑を零すような飴色。その髪が織史の言葉を奪った。

端正な顔立ちを不機嫌に歪めてはいるが、石膏像のような額から鼻梁にかけて、長く繊細な指を這わせたその姿は、一枚の宗教絵画から抜け出したような神々しさを放っている。

「？公殿、何故こちらに！？」

霄雲はその人物を？公と呼び、室内の様子に驚いた表情を見せた。そんな霄雲の言葉よりも彼は織史の視線に気付き、髪を掻き揚げながらそちらを向く。

織史は開いたままの口許に手を当てて震える唇を押さえた。

誰、この人

正面から見ると、解かれた襟元から男性らしい体躯が覗いている。顔付きも、優美なだけではなく精悍さも兼ね備えていた。

霄雲が織史の様子に気付き慌てて何かを話しかけ、その後ろから薫衣たちの驚く声が上がっていたが、それすらも織史の耳には入らなかった。織史は？公の眼と髪に、釘付けになっていたのだ。

街を歩いた時や学校の中でも脱色によって髪の色を変えていた者を何人も見たことはある。茶や金だけで無く、赤や青といった色に染め上げていた人物も。けれど？公と呼ばれるその人物の髪は、見事なまでの黄金だ。陽光を返す流水のように煌めく髪の毛を目にしたのは、初めてだった。その上瞳は金を帯びる澄んだ青。心まで見透かされそうな瞳は、見る者を捕らえて放さない力が感じられる。恐ろしいまでの美しさ、という言葉が、正に合う姿態である。

それに加えて、何故この男性の膝で自分が眠っていたのか、その困惑で頭がいっぱいになる。

織史の混乱を見て取った薫衣は、織史に朝の湯浴みを勧めて桃鈴と一緒に部屋から退出させた。

相変わらず桃鈴は何も話はしなかったが、今の織史ではどんなことも素通りしてしまう様子で、そんなことは気にもならなかった。

途中、織史の後を追って飛んで来た華星が入り口の手前で霄雲に捕まり、戸が閉められると先程と同じように羽をばたつかせながら騒いでいる華星の声が聞こえたが、それも織史の耳を通り過ぎてしまった。

一浴びすると気持ちが冷静になったのか、湯の中で深呼吸をして脱衣所に向かう。

用意されていた衣に袖を通してると、戸の向こうから霄雲の慌てている声が聞こえた。身支度を整えながら耳にしたのは、件の？公と霄雲のものである。

「ですから、まだ織史殿が使用中なのです。いくら貴方でも此処をお通しするわけには参りませんっ」

「別に私は構わん」

「そういう問題じゃありませんっ！」

霄雲の怒りを帯びた声が響き渡るが、ホウコウの方には届いていない様子だ。

「昨夜の雨を流したいのだ、其処を退け」

「？公殿っ！」

諫めるように声を荒げる霄雲の後ろから、織史がゆつくりと戸を開く。するとすぐさま華星が肩に止まり、頬擦りをした。

「その鳥……」

華星の様子に口を開いたその言葉を遮るように、霄雲の声が重なる。

「さあ？公殿。ごゆつくりと湯殿をお使いください」

やけに明るく言って、さり気無く織史を背中に隠す。それを目にして何か口にした？公は、霄雲を鼻先であしらい、戸の奥へと消えて行く。

それを見送り、霄雲はホツとしたように息を吐き、織史の手を引くように歩き出した。

部屋に戻る廊下で、朝雲は思い出したように昨夜のことを話し始め、織史に何度目かの謝罪の言葉を口にした。軽く微笑み首を振って返すと、少年らしい明るい笑顔が浮かぶ。

そんな霄雲の髪も、金色に輝いている。

？公よりも静かな光だが、先ほどの話し振りからすると、ふたりは血縁関係があるのかもしれない。

もしかすると、昨夜の嵐が心配で様子を見に来たのではないだろうか。

霄雲と？公の親しげな様子に、小さく笑いが零れる。

それをまた、霄雲もやわらかく微笑んで返す。

言葉は無いのに、暖かな時間が流れる。

華星は相変わらず織史の肩に乗って、そんなふたりの様子を見ていた。

その日、織史にもう一つの転機が訪れた。

朝食後に霄雲が街への外出を切り出したのである。

街……。遂にこの時が来たか

織史は自分の心内を隠し、ゆつくりと頷きを返した。それを見て霄雲の顔がパツと晴れ、薰衣も頬をほころばせる。

連れてくるのではなく、連れて行くことにしたのね
少しかけ気分が沈む。

ずっとこの状態が続くなどとは思ってもしなかった。けれど現実に戻るのだと思うと、苦い想いが込み上げてくる。警察と、親の姿が脳裏に浮かぶ。

逃げようなんて、思うんじゃないかった

来る瞬間を予想して、両手を握り締める。

一度深く瞼を閉じて逃げ出したい気持ちを押し込めると、衣服を整えて霄雲と山を降りた。

そこで初めて織史は馬車に乗った。歩いて行くつもりだったのだが、織史の足に合う履物がなく、有り合わせで山道を歩くというのは危険であるからと、薰衣から止められたためだ。

中は雛壇飾りで見た牛車のように座敷風のものであったが、造りはとてもしっかりとしているようで、速度が上がっても振動をあまり感じなかった。もっと音も騒がしいものだと思像していたのだが、これなら車の乗り心地と大差ないかもしれないと思う。

道中、霄雲は？公の話をしたり街のことを聞かせてくれたりと織史に気を遣ってくれたが、その殆どが織史の耳を通り抜けてしまっていた。

そして、人々の話し声が耳に入り始め、織史はごくりと息を呑み込む。

覚悟を決めてこたえる言葉を何度も繰り返しながら、ゆっくりとゆっくりと瞳を押し開ける。

！？

霄雲が格子戸の布を上げ、街の様子を見せてくれている。

何度瞬きをしてみても、その光景が変わることはない。

高く昇った陽光を受け、人のざわめきに包まれているその街並み。行き交う人々。商いをする店々。全てが想像に反して目に飛び込んで来た。

「取り敢えず、履物を調達しましょうか」

霄雲の言葉に慌てて頷いて、織史は外の景色から目を放した。御者らしき男に何かを伝えている霄雲を横目に、織史は今見た風景を思い返す。

ここは一体……？

立ち並ぶ店には、電飾の付いた看板も、硝子扉も無い。建物も平屋作りがほとんどで、木造のものばかりだ。街灯も無ければネオンも無く、電線も無ければ電柱も見当たらない。人々の服装だって、着物のような前合わせのものが目立つ。？宮の人が特殊と言っわけではなかったようだ。

まるで時代劇のセットに入り込んでいるようで、時代を遡ってしまったのかとも思ったが、霄雲や？公の姿を考えるとそうとも思えない。

では自分は、一体どこに居るのだろうか。

織史が心の中で自問自答を繰り返していると、しわがれた老人の声が耳に入った。

「作るのは、どの足じゃ」

店の奥から暖簾をくぐって店主らしき老翁が歩いて来る。口許に白髭をたくわえた厳格そうな人物だ。

先に降りていた霄雲に呼ばれて織史がおずおずと簾を上げると、店主は眉を顰めた。

助手らしき青年が織史の前に箱と椅子を置くと、店主はそれに座り足を出すよう命じた。言われた通りに箱の上に足を乗せると、三つの定規が合わせられたような物差しで足の大きさを測り始める。気難しげな顔を動かし、角度を変えて目盛りを読んでいく。

「名前は？」

唐突に訊ねられ、織史は唇を動かした。けれど声が出ないので、店主には届かない。代わりに応えたのは霄雲であった。

「織史と申します。声が少し……」

「病か？」

店主は眼だけをギョロリと上げ、織史を見る。

「いえ、そうでは無いようです」

「ならばもつと歩け。この足は大地を知らな過ぎる」
叱るような口調で言われて、織史は身を固くした。

確かに自分の足は歩くことが少なかつた気がする。どこへ行くにも車を使っていたし、人混みを避けていたために家の中で過ごすことが多かった。けれどそれ以前に、自分の住んでいた街は“土”というものが少なかつた。片田舎ではあつたが、道はアスファルトに舗装され、コンクリートで固められていた。木などの自然はあつたが、手が汚れるのを嫌って直に触れることも少なく、まして裸足で“土”を感じた記憶も無い。幼い頃から、そういう環境だつた。

織史は言葉も無く、じつと店主の手を見詰めた。

指先に染料の付いた皺だらけの手。骨ばり節だつて、岩のようにも見えるがとても温かく見える。職人の手だとそう思う。

「おい。あの箱を持って来てくれ」

店主が言うと、助手の青年が店の奥に一度引つ込み、飾り気の全く無い木箱を持って来た。

蓋を開けると中から一足の履物が姿を現す。薄桃色と金糸で小花模様を織り込まれた結び紐と、濃紺の鼻緒。黒く艶のある台部分には鮮やかな色彩で蝶々が描かれている。

「これは昨夜仕上がつた、“人形沓”じゃ」

店主はそれを箱から出し、結び紐を解いて織史の前に差し出した。「お前さんと同じ、“土”を知らぬ。本来なら大地に触れることのない代物であるが、これも運命じゃろう」

履物に注ぐ店主の眼はとても優しく、愛しい我が子を眺めているようだ。

見れば、金色に光る紐留めや鼻緒、蝶の絵姿も細部に至るまで意匠が凝らされており、とても高価な物に思われる。

織史の思いを汲み取つたのか、霄雲が店主に尋ねた。

「失礼ですが、本当にお売り頂いても宜しいのですか？」

「構わぬ。この娘さんに合うものは、これ以外に無いじゃろうから

の

店主の顔は先刻までの厳しい表情に戻っていた。

言われて鼻緒に足を通すと、店主の言う通り織史の足がぴたりと嵌った。

「足は飾り物では無い。動いて台地を知り、初めて真価を見せるものじゃ。価値ある足は主を正しき道へと導くとされておる。くつもまた然り。互いに己の道を創り出すが良からう」

織史に、というよりも織史の“足”に語り掛けるように店主は言って立ち上がる。そして霄雲と共に店の奥に入って行った。

二人の背中を見送って、織史は足を地面に下ろし馬車から降り立ってみる。

底が厚めで草履よりも下駄に近い感触だ。

着物の裾を少し上げ、自分の足を見下ろすと胸が高鳴った。

可愛いクツ。下駄って言った方が良いかも

足を動かすと微かに鈴の音がする。本当に微かで、耳を敬てなければ気付かないような音だが、とても澄んだ愛らしい響きのする鈴だ。思わず頬が緩み、幼い子供のように飛び跳ねてみた。また音が鳴る。それがとても、楽しく、何度も鳴らしてみたくなる。

「喜んでくださるのは嬉しいですが、あまり無理はしないでください」

手元から零れた着物の裾につまずき、転びそうになった織史を支えて霄雲が優しい声で窘める。

織史は立ち直し、霄雲に向き直ると深く頭を下げた。

どうもありがとうございます

声は出ずとも唇を動かし、心から礼を述べる。

戸惑ったように顔の前で手を振る霄雲の言葉で面を上げた織史は、それまでに見せていた微笑とは違う、すっきりとした笑顔を浮かべていた。

「では、街見物にでも行きましょう」

差し出された霄雲の手に手を乗せ、織史は店の立ち並ぶ街中へと

進んで行った。

こうして並んでみると、霄雲は意外と背が高く少年というよりも青年と言った方が合うことに気付く。体格も、細身だがしっかりと筋肉が付き、自分を支えてくれたその腕は確かに安心できるものだった。建ち並ぶ店を案内してくれる表情には幼さを感じるが、それもまた霄雲の良さなのかもしれないと、織史は不意に思うのだった。少し歩くと簷屋かんやしがあり、隣には織物屋があつた。細やかで美しい細工にキラキラと輝く色とりどりの石が嵌め込まれた物から、巧みな彫を施されたシンプルなものまで数多く店先に並べられている。陽光を返す眩しいほどの輝きは、歩く女性の目を引いた。

織史も一度は足を止めたが、店の外にまで溢れかえっている女性客の様子を見ると、店内に進もうという気持ちが見失せてしまう。隣の織物屋も、商品を選んでいくたくさんの客で賑わっている。

興味はあつたが、やはり混み合った中に入ることは出来そうに無かつた。

気を遣つた霄雲が言葉を掛けたが、織史は首を横に振る。店の外から覗くだけでも、十分に楽しかつたのだ。見たことの無い造りの置物や灯籠、食べ物も売られている。人々の活気に満ちた顔も見ているだけで織史を楽しませてくれた。

自分でも現金だと思つたが、本心から“今”を楽しんでいる感じがした。

それからふたりでしばらく歩くと、茶店の通りに出た。手前には甘味処。奥には食事処が暖簾を下げている。

「少し休みましょうか」

霄雲に言われて、織史は頷きを返した。

店を選びながら歩いていると、後ろから人の声に紛れて鳥の鳴き声が耳に入った。振り返ると翠の羽を広げ、一羽の小鳥がこちらに向かつて飛んで来るのが目に入る。思わず両手を広げて織史はその小鳥を受け止めた。

華星？ ごめんなさい、華星

籠に入れ、馬車に置き去りにしてしまっていたのを思い出し、織史は何度も呟く。

霄雲は感心しながら華星に声を掛けたが、当の華星はひどく打ちひしがれたようで、そっぽを向いてしまった。

それからしばらく華星は織史の肩に止まったまま離れなかったのだ、さすがに店内にそのまま入ることは憚られて、食事を諦めて馬車に戻ることにした。

しかし先程よりも人が増え、思うように進めずにいる内に、気付けば織史は霄雲とはぐれてしまった。

声が出ないために名を呼んで探すこともできず、人並みに流されて立ち止まることもできない。仕舞いには、人混みに酔って気分が悪くなり始めた。

仕方なく脇道に逸れて一息ついていると、不意に日が翳り、顔を上げると数人の男に囲まれていた。

「お嬢さん、気分でも悪いのか？」

言葉とは裏腹に、声音は愉しげな笑みを含んでいる。

気丈に振舞おうと唇を固く結び、首を横に振った。そして敢えて突き進もうとしたが、仲間であろう男達に道を塞がれてしまう。

弱さを見せてはいけない

心に言い聞かせて男達を睨みつける。ところが男達は怯むどころかせせら笑うかのように織史を見据えて、一步も引こうとしない。

「あ。あんた、この前の女じゃねえか？ 服が違うんで気付かなかったぜ」

前に立っていた男が一人、口を開いた。

男の言葉に織史は眉を顰め、顔を見返すが記憶には無い。

灰色に近い髪を後ろ手に縛り、耳に三つのピアスをしている。その男がずいっと顔を近付けて来たので、思わず後ずさってしまふ。

なおも近寄ってくる男を避け、織史は男達と距離をとったが、不運にも壁際に追い込まれてしまった。

どうしよう

横目でチラリと人通りの方を見る。いつの間に入り込んでしまったのかと思うほど、通りまでは距離があった。男達のニヤけた顔がにじり寄る度、嫌悪感が全身を走る。

声さえ出れば……っ

男の手が伸び、織史の身体に触れようとしたその時、急に男が顔を覆って呻いた。

「うあっ！」

男の顔の前で、碧い物がバタバタと暴れ回っている。それに気を取られた男達から逃れるように駆け出す。

「追えっ。逃がすな！」

織史に気付いた男が決まり文句を叫んでいる。それを背中で受けながら、必死に足を動かした。

着物の裾が脚に絡まり、思うように動かせず何度も転びそうになる。その上重ね着をしているために袂が重く、直ぐに息が上がってしまった。

どうして人混みの方に行かなかったのよっ！

走りながら自分の向かった道を後悔し、自分を責めていた。

織史は無意識の内に男の立っていない方を、つまり路地裏の奥へと向かってしまったのだ。けれど来てしまったものはどうしようもない。とにかく男達から逃げなければと、織史は進む他なかった。

迷路のように続く家々の壁を伝い、ただひたすらに走り続ける。

足が纏れ、息苦しさに眩暈まで覚え始めた。けれども立ち止まることは厭だった。

「いい加減におとなしくしやがれっ！」

怒声と共に強い力で襟を引っ張られて、織史は地面に叩きつけられた。

痛いと思う間も無く、肩を掴まれ仰向けにされる。結った髪の間から小石が当たり、簷が音を立てながら地に転がる。心臓が早鐘のように脈打つ。胸元に伸ばされる手を必死で払い除けようと腕を動かすが、上から押さえ込まれてしまう。

後から仲間の男達が駆けつけ、脚や腕を押え付けてくる。もがけばもがくほど、目の前の男達の顔にはいやらしい笑みが浮かぶ。突如、織史の脳裏に違和感が生じた。既視感とでもいうのか、今現実起こっているものと重なる影がある。それが妙にリアルで、意識が揺れる。

この光景、どこかで見た

見上げる視界に見下げる男の笑い顔。そしてもっと暗く、騒がしい。否、音は何もなかった気がする。

しかしさらに思い出そうとすると、刺すような痛みが頭の中に走った。

「随分と良家の娘みてえだな。この前の服は特注品か？」

汚い顔を近付けて男が言った。織史は唇を噛み締め、睨み返す。今は頭痛よりもこの状況を脱するのが先だ。

こんな奴らに屈する訳にはいかない！

挑戦的な目に男は気分を害したのか、織史の頬を打ちつける。それでもなお織史は男を睨み続けた。

「ふん。まあいいさ。今日はとことん付き合ってもらうぜ、お嬢サマ」

ニタリと顔を歪ませて、男は襟元に手を掛ける。

そこへ、再び羽音が聞こえて上を向くと、陽光を背に受ける一羽の小鳥が男目掛けて突進してくるのが見えた。

「うわっ！ 何だてめえ。やめろ、この野郎っ！」

バシリと鋭く打つ音がして、鳥が木の壁にぶつかるのが見える。

華星っ！

強い衝撃を受け、その場にポトリと崩れたのは紛れも無く華星の身体であった。翠と碧の鮮やかな羽はすすけた汚れが目立つ。所々抜け落ち、四方に散った羽根が目につく。

織史は何度も華星を呼んだが、丸くなったその身はピクリとも動かない。全身に、震えが走った。

「私の前で、そういう真似はしないで貰いたい」

突然、織史の足元　男達の背後から不機嫌さを露わにした男の
声が聞こえた。

何事かと振り返る男の肩越しに、飴色の髪が揺れる。

「さっさと立ち去れ。その方が身の為だぞ」

「何を仰いますか。もう、手遅れですよ」

もう一人の声は織史の頭上　男達の前方から聞こえる。

見上げると、冷ややかに男達を見ている霄雲の姿。

少年らしさなど消え失せ、怒りをひた隠しにしている冷酷な笑みが
浮かんでいる。

「な、何者だてめえらっ。関係の無い奴らは黙ってるっ」

「関係無い？」

一瞬だけ、霄雲の眉がピクリと震えた。

「そうさ、この女は俺の女だ。てめえらには関係ねえっ！」

上に跨っていた男は言いながら織史の襟首を引き上げ、啖呵を切
る。

締め上げられた織史の顔には苦悶の表情が浮かんだが、それは長
くは続かなかった。

男の重みが言い終えると同時に消えたのだ。

腕を押さえていた両脇の男達の手も離れ、織史は身を起こした。

解けた髪が額や頬にかかり、かろうじて引っ掛かっていた簪も地
面に付いた手元に零れる。

その手の向こうで、男が一人震えているのが目に入る。何か一点
に視線を奪われ、恐怖に顔を歪ませ、小さな童のようにガタガタと
震えている。

視線の先を追うと、宙に浮かぶ別の男の姿があった。

両手両足を力無くぶら下げ、頭を垂れている。それは先刻まで自
分の上で笑っていた男の変わり果てた姿に他ならなかった。

男の異様さに目を奪われた織史の横で、事態に耐え切れなくなっ
た別の男が喉を鳴らし、動けるようになった足で走り出す。

「この僕から、逃げられるとお思いですか？」

笑みを含んだ声で霄雲が呟く。その瞬間、織史の背後から一陣の風が男を捕らえて、目の前の男と同じように宙に浮かべる。違ったのは、縛られたように腕を硬く閉じ、足をばたつかせている部分だけだ。

「済みませんでした、織史殿」

後ろから謝罪の言葉と共に優しく布が掛けられる。青い衣は、ふわりと甘く香った。叶君の屋敷で嗅いだ匂いと少しだけ似ているその香りは、気持ちいを宥めてくれる。

助かったのだと実感する。同時に織史は気付いたように顔を上げて、華星の横たわる壁の下へと急いだ。

土の上に散らばった羽根と青い？。微動だにしないその様に、苦い思いが込み上がる。そっと手に抱き、出ない声でその名を呼ぶ。

華星：

やはり反応はない。

もう一度名を呼ぶが、掌からぬくもりが消えて行くばかりである。病が治ったばかりで、あんなに嬉しそうに歌を聞かせてくれた華星。美しい羽と美しい声で、もっと空を飛ぶ筈だった。その自由を、自分が奪ってしまったのだ。華星の自由 命を。

自分の所為で散らしてしまったその命に、織史の目から哀しみが溢れて華星の？に零れる。

私は、また、罪の無い者を苦しめてしまった

縛れた羽（二）

霄雲に連れられて乗り込んだ帰りの馬車でも、織史は華星をその手で温め続けていた。

何度、霄雲が慰めの言葉を掛けて止めようとしても、織史は決して華星の亡骸を離そうとはしなかった。

涙は枯れたように流れず、ただずっと包み続けているだけ。

？宮しんくうに着いた後もずっと、部屋の片隅で華星を抱き続ける織史の姿に見兼ねた薫衣がその晩、織史を外に連れ出した。

織史は訳もわからぬまま薫衣に続き、裏の森の奥深くまで歩いて行く。日は既に入り、辺り一面は闇と化している。薫衣の持つ手持ち燈籠の明かりだけが、ほんのりとゆらめいていた。

木々と草叢の中を進んで行ったその先に、開けた場所が見えた。

「……この場所は、精霊の眠る場所と云われております」
薫衣くぬえがゆっくりと口を開いた。

「いつまでもそのままでは、華星も安らかにはなれますまい。この地に還し、再び新しい生命を受けることこそ、幸せではございませんか？」

織史は手元の華星に眼を移し、微かに頷く。

一度命を絶った者が、再び息を吹き返すことなどあり得ないと、自分のいた世界で嫌というほど解っている。認めたくないと強く願っても、叶えられない現実。それを頭は残酷なほど理解している。だから、薫衣の言葉に従ったのだ。

月明かりに照らし出されたその場所に、穴を掘った。

素手を通して伝わる土の感触は、どこか懐かしさを含んでいる。

「ごめんなさい。華星

滲む視界の中で、織史は華星に別れを告げる。穴に入れた華星の？に、一滴の涙が零れた。その瞬間

「どうか悲しまないでくださいませ。涙は眼に毒で御座います」

鈴の音に似た愛らしい声と共に童女の姿が現れ、目の前で微笑んでいる。身体の中から光を放つような輝きに包まれたその童女は、碧と翠の衣を身に纏っていた。

「死ぬ運命にあった私を、貴女様は助けて下さいました。私は微力では御座いましたが、貴女様のお力になれて本望で御座います。ですからどうか、お泣きにならないで下さいませ」

童女はそう言って、袖口で織史の頬から目元を拭う。真綿のような、羽毛のような感触だ。

「貴女様の記憶が戻らぬうちに、お側を離れることとなってしまい申し訳御座いません。…お早く、記憶を取り戻されることに重ね、貴女様の道に幸多からんことを願っております。どうかあの御方のもとへお急ぎ下さいませ。…あの御方をお救い…できますのは…貴方様を置いて他にはおりません…。ですから…どうかお早く…」

童女の身体から無数の光が放たれ、その姿を覆っていく。声も薄れ、言葉が聞き取れない。微かに動いたその口は風に掻き消されてしまう。そして童女の身体も、風に舞う星砂のように崩れ、飛び去ってしまった。

織史は言葉を失う。困惑と動揺、そして様々な想いが混ざり合い、眩暈を起こす。

「久し振りに視せてもらったぞ、氣精霊の姿」

倒れかけた織史の体を背後から支える力強い腕が呟いた。その声は、昼間に聞いた声と同じものである。脳髓に響く男の甘い声音。振り向くとやはり、飴色に輝く髪が目に入った。

「？公殿。いつからそちらに？」

穏やかな声で薫衣がその人物の名を呼ぶ。

改めて見ると、今朝方、間近で目にした美しく整った顔がそこにある。切れ長の青く澄んだ瞳の持ち主は、織史を視界の隅に捕らえて眼を細める。

「この娘に用があつてな。しかし、わざわざ出向いた甲斐があつた。万物の魂とも言える氣精霊の姿を眼にすることができたのだからな」

キセイレイ？ 万物の魂？ それじゃあれは、やっぱり華星の姿なの……？

「さて、もう此処での用は済んだのであろう。屋敷に戻っていただこつ」

言いながら？公は織史の体を抱え上げようとしたが、織史は地に足を着き、自ら歩くことを主張した。

織史の態度に、？公は眉を上げて軽く口の端を緩める。その表情が何かを企むようなものに見え、織史は引き上げた衣の裾を握り締めていた。

この人は、油断できない

朝のこともそうだが、心の奥まで見透かすように光る瞳と、薰衣や霄雲、叶君とも違った氣を放つ？公に、織史は警戒心にも似た感情を持っていた。そのため、屋敷への道中でも？公から距離を取って歩いていた。

屋敷に着くとすぐさま織史は奥の部屋へと案内され、通されたその一室には霄雲の姿があった。

「お前、字は書けるか？」

前を歩いていた？公が、霄雲の前に用意されている文机を指しながら言った。

織史は勿論とでも言うように頷き、文机の前に腰を下ろす。用意されていた一本の小筆を手に取り、反物のように巻かれた紙を前にする。書道の経験はある。服装や霄雲に教えてもらった文字からすれば、自分の言葉が通じるとも考えられる。

織史は密やかに息を吐いて？公の言葉を待った。

「昼間、街で会った男達を知っているか？」

てっきり自分のことを聞かれると思っていたため少し驚いたが、織史はゆっくりと首を振る。

「だがあの男達は以前、お前と会ったことがあると言っていた。本当に知らないのか？」

顔を上げて？公の瞳を見返ししながら、織史は頷いた。

宙吊りにされていた男も自分を見たことがあると言っていたが、何度思い返しても記憶には無い顔だった。

「では、お前が此処に来る前……そうだな、八日ほど前まで、お前は何処で暮らしていた。親や家族は？」

ここへ来る前は、日本で暮らしていた。

硬筆に慣れた手ではあまり上手く書けなかったが、質問の答えを記して見せる。

霄雲がそれを取り、読み上げようとする。

しかしその口からは意外と言うべきか、それともやはりと言うべきか、織史の書いた文字が読み上げられることはなかった。

「確かに文字は書けるようですが、我々の識るところの文字とは違うようです」

「仕方ない。筆談は諦めよう」

言葉とは裏腹に、？公声は落ち着き払っている。

やはり、自分がこの世界の者ではないことに気付いているのだろうかと、織史は心内で呟く。

「次の質問だが、これに見覚えはあるな？」

？公は脇に置かれていた箱の一つを紐解き、織史の前に広げて見せる。織史はそれを凝視し、静かに頷いた。

確かに見覚えはある。所々が裂け、黒いシミのようなものが付いてはいるが、それらを除けば見慣れた衣服の形が浮かんでくる。黒のブラウスに濃緑のベストとチェックのプリーツスカート。自分の高校の制服だ。

「これは、叶と薫衣が七日前　つまり、お前を発見した折にお前が身に纏っていたものらしい」

食い入るように見詰めている織史に、？公は笑みを含んだ声で続ける。

「その黒い跡は、血だ」

血……？

言われて、もう一度そのシミを見ると乾いた血の痕に見えなくも

無い。けれど、織史は納得できるものではなかった。否、納得したくないと頭の奥で何かが囁き続けていた。

これが何を意味するのか。？公が何を云わんとしているのか。ソレは解っていたのかもしれない。

「これは間違いなく血の痕だ。薫衣たちがそう証言している」
裏付けるように薫衣の名を出す？公の声は、どこか嬉々としている。

「女官たちの話によれば、お前はおびただしい血に塗れていたそう
だ。それには納得も行く。お前が倒れていた森：カンシと云うのだ
が、その森には多くの獣が棲みついている。昼間であつても常人は
近付かぬほどだ。夜など無防備に近付けば森に引き込まれ、命を失
くす。問題は、そこでお前は助かったことだ」

？公が立ち上がり、織史の横に屈む。

嗅ぎ慣れた甘い香りが鼻先を流れ、冷やかな澄んだ香りに変わった。

「腕や脚、腹部や背中、頬、首筋に至るまで、掻き傷が負われていた。それでもお前は助かった」

袖口から出した蝙蝠扇の先を織史の手先に降ろし、不意に広げる。そしてその手で織史の髪を払い除けるように振り切った。

あまりの勢いに空を切る音が響き、織史は目を閉じて顔をそむけた。

「？公殿っ？！」

突然の出来事に霄雲が声を上げる。

露わになった織史の頬に、朱が一閃、燈籠の明かりに照らし出された。

赫い、玉のような雫が白い頬に浮かび上がり、艶めいた光を放つ。

「？公殿、何をなさるのですかっ！」

「まあ待て霄雲。これくらい傷、この娘には何とも無いようだ」
駆け寄ろうとした霄雲を止め、？公は楽しげに答える。

その言葉に苛立ちを覚えながらも、織史は自分の頬に手を伸ばし

たその瞬間、指先に何やら温かくふわふわとした感触を覚えた。

「見る、もう跡形も無い」

？公の傍らで、雷雲が驚きに表情を固めている。しかし当の本人もまた、その言葉に驚愕の色を見せていた。

手を視界に戻してみれば、薄く血の跡が付いている。けれど頬には痛みも、傷口に感じる熱も何もかもが消えていた。もう一度、傷が付いたであろう辺りに手を伸ばしてみるが、ただ自分の素肌が広がるばかり。血の一滴すらも指に触れることはない。

「もう良いだろう。そろそろ正体を明かせ、妖物よ」

妖物って…。私が妖怪だって言いたいのか！？

？公の物言いに織史は立ち上がり、声の出ないことも忘れて抗議の態度を示す。

私が妖怪ですって？ 失礼にも程があるつ。私から言わせれば、よっぽどアンタ達の方がおかしいわっ！

此の身さきても（一）

「？公様っ」

唐突に襖が開かれ、一人の男が入って来る。

見れば男の手には黒く艶光する一振りの刀剣が握られていた。

その剣…

剣に目を走らせた瞬間、織史の脳裏に幾つもの場面がフラッシュバックのように断続的に現れた。

黄金を基調とした装飾には、瑠璃、玻璃、螺鈿、晶石の類が散りばめられている。それぞれが眩しいほどに光輝く中で、一際目を引くのは漆黒の鞘自身だ。一見単調な黒色に見えるのだが、鋭く、そして妖しく光を放つ。周りを彩る玉石がその異様さを一層引き立て、不思議なほど艶めきを見せる。

様々な角度から、様々な距離で写し出された写真のように、それは浮かんでは消えていく。そして脊髄に電流プラグを差し込まれたかのように、鋭い痛みが全身を駆け抜けた。

“ の剣を…なしては… …決して…放しては…らぬ…”

“ 私は、貴女様に付き従います。必ずお役に立ってみせます…。どうか私を の剣と共にお連れ下さいませ。このルリを…”

ルリ……？ 誰。この声は一体、誰？

視界が激痛に呑み込まれ、意識が朦朧とする中で織史は再びあの“声”を聞いた。

断片的で何を言っているのか解り難かったが、とても重要な何かであった気がする。

そしてもう一つ、少女の声が頭の中に響いた。聞き覚えのある、愛らしい声音。しかし何処で

織史は床に着いた掌を握り締め、消え行こうとする意識を必死に繋ぎ止めようとした。

ここで気を失う訳にはいかないのだと、強く思う。倒れてしまっ

たら、妖として？公たちに始末されてもおかしくないのだ。死ぬことが怖い訳ではないが、死ぬことで、とても大切な何かを失ってしまう想いに駆られた。

「控えよっ！」

突然辺りに鋭い声が響き渡った。

「南帝が妃、朱妃様の御前なるぞ。控えよ！」

再び空を割くように発せられた言葉に、廊下や庭先に居た者達は慌てて跪き、両手を地に着いて叩頭する。

霄雲もそれに続き、膝を折った。けれど唯一人、？公だけはその場に無然として立ち続け、声のした方を睨み据えている。

微かな衣擦れの音と、シャラン、シャランと金属の重なり合う音がゆっくりと近付き、視線を上げると障子戸に数人の人影が映る。戸が開かれると薫衣の姿が見えた。

続いて入って来た人物は、髪を高く結い上げた女性に手を引かれた、波打つように揺れる長い髪の女性だ。

「御久し振りで御座います。セイシンコウ殿」

その女性は？公に向かつて頭を下げながら挨拶した。と言っても、簪や玉飾りを付けているためか、膝を曲げた会釈のような礼である。しかしその動きは何とも優雅で、気高さを感じさせるものであった。

それに対して？公は、不機嫌さに眉根を寄せたままの表情を返す。「お元氣そうで何より。こちらにどのような御用かは存知ないが、見ての通り今は取り込んで居る。挨拶は後にしていただきたいのだが？」

「御心配には及びません。私は貴殿に御用があるのではなく、そちらの娘に用があるのです」

「この娘に？」

「然様ですわ。私は叶君に頼まれて、その娘を診に参ったのです」

より一層眉間に皺を刻む？公を他所に、その女性は織史の前に腰を下ろした。

織史は苦痛に耐えながらその顔を上げて、女性を見た。

近くで見ると、女性の髪は夕焼け空のように赤く、黄金の簪が見事な色合いを放っている。そして自分の顔を覗き込むその瞳は、黄金の光を帯びた夕日のように紅く、優しく揺らめいている。

「確かに、叶君のお話しの通り、この娘は呪をかけられているようですね」

「呪だと？」

「はい。その呪によって、声と記憶を封じられておられますわ」

「だから自分の正体も忘れているのか。とんだ妖物だな」

「正体とは、一体どなたの正体ですか？」

せせら笑うように織史を見下ろす？公の言葉に、目の前の女性は小首を傾げた。

「この娘の正体に決まっておろう。呪によってとはいえ、何ともまぬけなものだ」

「この娘が、妖物？」

「いかにも。先刻、その証をこの目で確かめさせてもらった」

「それはおかしなことで御座いますわね。この娘からは妖気など少しも感じられませんわよ」

「それは織史殿が人間であるということですか、朱妃殿？」

二人の間に霄雲が割って入る。朱妃と呼ばれたその女性は、霄雲を一瞥して再び織史に向き直ると、穏やかな口調で答える。

「人間であるかどうかは断言できませんわ。この部屋には神気が満ちていて、人間の気など薄過ぎて呑み込まれておりますもの」

微かに笑みを浮かべると、朱妃は織史の手を取った。

「あなたの声を取り戻すためには、部屋を移っていただきますわ。

心の底からご自分の声を取り戻したいと願うならば、私についていらして」

朱妃は静かに立ち上がり、織史を見た。

？公と同様に何を考えているのかわからない眼と、柔らかく微笑むその深い表情に、織史は一瞬だけ戸惑う。

本当に自分の声を取り戻せるのだろうか。けれど今はどんな可能性にも縋りたいのだと、頭の中で声がする。現状の打破は、自分が強く願っていたことだろうと、背中を押してくる。

織史は見えない何かに引かれるように、立ち上がった。

朱妃に従い、通された部屋は床一面に墨字で陣が描かれている場所で、中央と壁際にだけ、ぼんやりと蠟燭の明かりが浮かんでいた。室内に一步足を踏み入れると身体中をゾクリと何かが駆け巡った。血流とも違うその感触は、不快以外の何物でもないのだが、初めてのものではない感じがする。

まだ頭痛と気だるさの残る体で、織史は朱妃の言葉に従い円陣の中央に座る。

「少し、苦痛を感じるかもしれませんが、気を楽しんでお待ちくださいませ」

織史が頷きを返すと、朱妃は何やら不思議な音の羅列をその口から紡ぎ出し始めた。

鈴のように感じた声が今は灼熱の気体となって体に染み込んでくる。同時に、身体の内では何かざわつき始めた。それが何なのか織史には判らない。けれどゾワゾワと肉体の内側で駆け回るそれに対し、次第に織史は別の感じを覚えた。初めは自分のものと感じていたモノが分離し、引き剥がされたような、そんな感覚だ。

織史の頬を汗が伝い、滴る。気付けば渴いた喉を鳴らして、全身を打ち震わせている。

そして朱妃が最後の言葉と印を結ぶと、織史の体は跳ねるように起き、腹の中心から黒い塊が飛び出した。

ビチャリと湿った音を立てて、それらは一塊になって床に倒れ着く。そして織史もまた、その場に倒れ込んだ。

「織史殿っ」

霄雲が陣内に入り、織史の身体を抱き起こす。その腕の中で織史

は、消え行く意識の片隅で自分の身から吐き出された黒い獣の塊を、視界の隅に捕らえていた。

私の

「ご加減はいかがでした？」

甘く囁くような朱妃の声で目が覚めた。

見ると、薰衣と霄雲の顔が側にある。そして金の簪を挿した朱妃の姿。天井も御簾も、もう見慣れた物である。

一瞬だけ、全てが夢で目を開けると元居た世界が在るのではないかと思っていた。

「まだご無理はなされず、お休みください」

起き上がりかけた織史に、霄雲が声を掛ける。心配そうに曇らせた顔が、目に入った。

その言葉に織史は再び横になり、辺りを見回す。瞳を巡らせるその様子を見て取り、霄雲が優しく語りかけた。どうやら、織史が自分から生み出されたあの獣を気に掛けているものだと思ったらしい。

「あれは、黒？ 猯の子どもでした」

織史は、体内に三頭の黒？ 猯の仔を宿していたらしい。

何故黒？ 猯が居たのかまだ明らかではないが、その影響を朱妃から聞かされた。

獣の仔が居たために、傷口が塞がり治りが早く、ものの気配に敏感であったりするという妖獣の特性が現れていたらしい。何時ぞやの夜のことを思い出して、織史はそういうものなのかと静かに受け止めた。

しかし、抜け出た今も、織史の声はまだ戻っていない。

朱妃は声に関しては必ず戻ると言ったが、何時とは断言できなかった。

室内に重い空気が漂い始めた頃、数人の侍女と共に？ 公が姿を見

せた。縹色の織物を召し、飴色の髪を煌めかせて相変わらず澄んだ青い瞳で織史を見る。

「気がついたようだ。記憶はどうだ。戻ったのか？」

「まったく…。女子の部屋にずかずかと踏み入り、そして病み上がりの者に掛ける第一声がそれとは…。これがセイシンコウのなさる事かっ」

嘆かわしいと、眉根を寄せて朱妃が声を荒げる。しかし？公は飄々とした体でその場に腰を下ろす。

「これは失礼した。朱妃殿はまだこちらに居られたのであったか。しかし事態は急を要するのだ。で、どうなんだ？」

「声が戻っておりませんので、今は何とも申せませんわ」

「何だと？ 声を戻す為に参ったのではなかったのか？」

？公の強い物言いに、朱妃は眉をピクリと動かし、手にしていた扇を音を立てて閉じる。その様子に薰衣は視線を逸らし、霄雲は慌てて口を開いた。

「ほ、？公殿。先程表が騒がしかったようですが、何かあったのですか？」

「ああ。賊がうろついておつてな」

溜息混じりにそう答えると、？公は侍女に持たせていた剣を取り、織史の前に差し出す。

「娘。この剣に見覚えがあるようだったな。これはお前の剣か？」

厳しく問いたただす視線を向けられ、織史は首を振った。

確かに見たことはあった気がする。その剣を目にした時見えた映像は、きつと自分の記憶だ。今は失っている、誰かと会っていた部分の記憶。ルリと名乗った少女と、大地を響かせるような“声”の存在が自分に話し掛けていた。その時に剣の姿を見た気がする。

剣がどうのって言うていたけど、この剣のこと…？

だが自分のものではないだろう。この剣はおそらくあの“声”の主のもの。織史はそう思った。

「では、この剣をどこで見た。誰が持っていた？」

この問いに関しても、織史には答えることができなかった。

「記憶は…まだ戻っておらぬようだな」

？公は重く息を吐き、短い挨拶を残して部屋を後にした。その後を追うように、薫衣を連れて朱妃も出て行き、室内には織史と霄雲のふたりだけとなる。

織史は獣のことが気になったが、どう表現すればよいのか分からず、かと言って眠る気にもなれずに天井に視線を泳がせていた。すると霄雲が口を開いた。

「織史殿。もしよかったら、また街へ行かれませんか？ 勿論、体調が戻られて、気分が良くなったら……」

街：

先日赴いた街の風景が脳裏に浮かび、同時に華星のことが思い起こされる。

胸が痛んだが、織史は霄雲に微笑みを浮かべて頷いて見せる。その様子に霄雲は心を弾ませ、少年らしい明るい笑顔を見せた。

「五日も眠り続けていましたから、少しは体を動かした方が良いでしょう」

五日……。あれからもう、五日も経っているの

霄雲の言葉に驚きもしたが、自分の身体が鈍く感じるのは疲れだけではなかったのだと少々納得した。しばらく動かさなかったために、感覚に違和感が生じているのだろう。

織史は身体から時の経過を感じると共に、？宮の人達にも、霄雲や朱妃、？公にもどれほどの迷惑を掛けてしまったことかと、詫びる気持ちでいっぱいになった。

自分は何も変わっていない。あの頃から少しも。他人に負ぶさり、縋り、そして自分はこのうのと生きる。まるで寄生虫のようだ。

織史は自嘲し、瞳を閉じる。そして脳裏に響くのは自分を侮蔑する言葉ばかり。

どうしてこれ程までに“自分”を弱く思い、そして蔑むのか。狂気にも似たその念いは、誰にも解らなかった。

だが確かに、織史を蝕み侵食していくものであった。

此の身さきても(二)(前書き)

戦闘シーンが入っております。

残虐性は低めだと思えますが、苦手な方は飛ばして下さい。

次話の前書きにあらすじを載せます。

此の身さきても（二）

その夜、織史は部屋で独り、目を覚ました。

ひどい耳鳴りと頭痛とが眠りから引き起こしたのだ。風邪で熱が出たときも異なり、何か言い知れぬ不安が胸を覆う。嫌な気分がして、織史は身を起こした。

ここに居てはいけないような気になり、息苦しさを感しながら重い身体を立ち上がらせ、障子戸に手を掛ける。

しかし激しい頭痛に眩暈を覚え、同時に右腕を誰かに引かれるようにして、織史は右肩から倒れ込む。

その刹那。数本の矢が室内に飛び入って来た。

鋭い音を立て、寢屋の帳を貫き、畳や寝具に突き刺さる。

織史の背筋に冷たい汗が伝った。

もし、右に倒れていなかったら。

もし、起き上がっていなかったら。

もし、頭痛がしてなかったら

もとより声は出ないが、織史は言葉を失った。

矢に貫かれ無惨な姿となった紗の帳に、そして忍び寄る影と足音に、心臓が早鐘のように高鳴る。自分の息遣いがやけに耳に響き、左手で口を覆う。右手は体重を支えながら、畳と着物の裾を握り締め。

相手に気取られぬよう息を殺すが、心臓の音が聞こえてしまうのではないかと思うほど脈動が頭に響き、全身が震えている。

静かに音も無く障子戸が開かれる。

月明かりを背に受け、その場に立っていたのは見知らぬ一人の男。その男は織史の姿を認めると、ニヤリと顔を歪ませた。

否、そのように見えただけで、実際の男がどのような表情をしていたのかは、逆光で判断が付き難い。加えて、男は織史と目が合っ

た瞬間、手にしていた剣を振り上げて勢いよく下ろしていた。
織史は再び何かに引かれるように身体を反転させ、切っ先を避ける。

剣は空を切つて畳と衣に突き刺さった。

逃げないと…っ

織史は思った。

けれどその後、自分の身体がどのように動いたのか分からない。
まるで見えない糸に絡め取られたかのように、織史の身体は動いていた。

男がもう一度振り上げようと剣を抜いた時、織史はすぐさま横に飛び退け、二撃目も寸でのところかわす。そしてそのまま立ち上がり、開け放たれたままの障子戸から庭に掛け出る。土の感触がひやりと足を伝った。

その背後から、男の殺気が襲い掛かる。何とか避けたものの、織史の髪が数本風に舞う。男の動きが速くなっている気がした。

織史は男に向き直り、眼を見据える。

背中を向けたら斬られる。そう直感した。

周りはやけに静かで、月だけがふたりを照らしている。

肌には張り詰めた殺気と緊張感が走っている。

お互いに一步も動かない。視線は勿論、瞬きさえもすることなくふたりは立っていた。

一体どれくらいそうしていたのだろう。咽が渴き、男の剣を握る手にも汗が滲む。

そして二人の間に木立を抜けた風が駆け抜けた。

まるでそれが合図であったかのように、男が剣を振り上げる。
左肩を引き、下ろされた刃を避ける。

織史の動きに男は出方を変え、今度は突き技を繰り出し始めた。
振り下ろすよりも素早いその動きに、織史は腕を振り上げたその反動を利用して一歩ずつ後ずさる。間合いを詰められてはお終いだ。
しかし石燈籠が差し迫り、いよいよ後がなくなってしまう。

反撃でもできれば良いのだが、織史自信に武術の経験は無く、その上刃物相手に丸腰で立ち会う術など安穩と生活していた者には知る由も無い。

それでもなお織史は男の剣を避け、目線を外さなかった。

瞬きさえも忘れて、切っ先を必死に読む。

だが数回避けたところで足元の小石に躓き、上手く踏み込めず、地面に倒れこんでしまう。

急いで体勢を整えようとするが、気付いた時には遅く、男の剣を振り下ろす姿だけが織史の眼に映った。

っ！

刹那、一迅の突風が吹き込み、二人は顔を腕で覆い、男も体制を崩した。

何が起きたのか、直ぐには理解できなかったが、ふわりと冷ややかな香りが、鼻先を掠める。

薄く瞼を開けると、目の前には蒼の衣と煌めく髪を夜風に靡かせた背があった。

「貴様、昼間の残党か？」

居丈高と問いたただす声音に、剣を抜く音が重なる。

男は何も答えず、地を蹴って踏み込む。

刃のぶつかり合う音が辺りに響くが、剣を容易く跳ね返された男は後ずさった。

空気が張り詰め、先程よりも男の発する殺気が一段と強まる。

風が吹き、葉擦れの音に刀同士の弾く音が混ざり、織史の耳に届く。

斬り合う気は無いのか、目の前の影は腕こそ振るが一向に動こうとはしない。

そこへ、甲高い笛の音が響き渡った。

男の殺気は困惑へと変わり、苦渋の色を浮かべて舌打ちをすると、後方へ跳び退き柵を越えて森の中へと姿を消した。

目の前の人物はその背を見て鼻先で笑い、剣を一振りして鞘に収

める。

そして振り返ると、座ったままでいる織史に向かって口を開いた。「おい。いつまでそうしている気だ。さっさと立ち上がらぬか」聞き覚えのある声だ。

空に浮かぶ月と同じように輝く髪も、冷やかに見下ろす瞳も、見覚えがある。

それがどれ程強く、織史の胸に響いたことか。

呆然とした表情のまま顔を上げると、呆れ顔の？公の姿が眼に映った。

気が付くとポロポロと大粒の涙をその瞳から流れていた。

ぎよっとして目を見張り、困惑したのは？公である。

驚き、慌てて織史の前に屈み込み目線を合わせる。子供に限らず誰の泣き顔であっても、普段の？公ならば嫌気の差した表情を浮かべて重い溜息を吐くような場面だが、まさか織史がこれくらいのもので涙を流すとは思っても寄らなかつたらしい。先日の男達との一件を目にしているだけに、？公はそう思っていた。

それに織史の泣き顔はどこか相手を困惑させる。？公は涙に濡れるその頬に手を伸ばした。

「織史殿はご無事ですかつ！？」

血相を変えた霄雲の声が飛び込み、？公はその手を引いてすぐさま立ち上がる。

織史から離れようとしたところに霄雲がやって来て、ふたりの様子を目にした霄雲は織史の傍に膝を付いた。

「織史殿、お怪我は？」

霄雲の問いに、織史は涙を流したまま首を振る。大した怪我はしていない。それは確かである。

次いで立ち去ろうとした？公の方へ、霄雲は眉を顰める。

「？公殿。また何か心無いことでも仰ったのですか？」

「失礼な奴だな。誰がそのようなことを言うか」

「ですが」

霄雲の袖を引き、織史は再び首を振る。

言葉が出ない代わりに、精一杯霄雲に瞳で話す。？公が悪い訳ではない。助けてくれたのだと。涙は一向に止まってくれず、織史自身も困っていた。

霄雲は織史の瞳から大体の事態を察したのか、？公に向き直ると頭を下げた。

「失礼致しました。？公殿」

「解れば良い」

踵を返して？公は屋敷へ戻って行く。

？公もまた、自分の取ろうとした行動に困惑していた。しかしそれを一時の心の迷いだと鼻先で笑い、自室に戻る。だが、頬に触れた指先が妙に温かかった。

織史の涙はしばらく止まらず、その上腰が抜けてしまったよう立ち上がるが出来ずに居ると、霄雲が上着の羽織を織史の肩に掛け、ふわりと抱き上げた。

驚きに目を見開くものの、霄雲の腕がとても力強く安心させ、涙が再び零れる。次第に眠気が襲い、眠っては駄目だと思いながらも、織史は霄雲の腕の中で眠ってしまった。

張り詰めていた気が、弛むというより切れてしまったように、織史は気を失ったのだ。

そして夢の中で、織史はあの“声”を聞いたように感じた。

翌朝、織史は人の声で目を覚ました。

薫衣が新しく設えた部屋は、前と同じく庭に面していたが、その向こうは森ではなく滝のある崖になっている。その庭で、五人ほどの青年達が話をしていた。

霄雲と同じがそれ以上の年齢と思われる青年達は、織史がここに居ることに気付いていないか、もしくはそのことを知らなかったのだろうか。朝稽古を終えた後に熱気を帯びた様子で、若者らしい会話

に花を咲かせ笑い合う。他愛のない会話ではあるが、それが織史の心を和ませた。内容は勿論、自分の暮らして居た世界のものとは違い、青年達の間で通じた織史には解らないものである。剣術や武術の話。街の様子についてなど様々である。そして昨夜の話題になったとき、霄雲の声が入った。

「そちらで何をしているのですか。むこうで？公殿が招集されておりましたよ」

霄雲の言葉に若者達は慌てて走り出した。口々に「申し訳ありません」やら「失礼致します」と言いながら、足音が遠ざかって行く。そして霄雲が一人障子戸の前に立ち止まった。

「…織史殿、起きていますか？」

少し控えめな調子で霄雲が声を掛ける。急ぎで設えられたこの部屋には、寝台と戸の間に几帳や簾のようなものは無く、戸を開くと直ぐに寝間となっていた。霄雲の態度はそれを配慮したのだろう。

織史は寝具から出ると、障子戸を開けた。

「あ、すみません。もしかして起こしてしまいましたか？」

織史の姿を目にして、霄雲は頭を掻く。夜着のままである自分に気づき、織史は首を振りながら急いで単衣を羽織った。

霄雲は織史の様子に柔らかく目を細め、他愛の無い話から切り出した。

そうしているうちに、桃鈴が朝食の準備が出来たことを伝えに来て、ふたりは一度部屋を出た。食事を終えると霄雲の誘いで今度は池に面した縁側に場を移し、腰を下ろした。

「…ところで織史殿。昨晚のことですが…」

ふと、脳裏に昨夜男に刃を振られた光景が浮かぶ。同時に背筋に震えが走り、織史は袖の中で掌を握り締めた。

「辛いこととは思いますが、今一度思い出していただきたいのです。その…襲ってきた者に見覚えがあるかどうか」

暗くて顔などはつきりとは見えなかった…。もとより刀を向けられて正視することすらできなかった

織史はゆつくりと、確かに首を横に振る。軽く溜息を漏らし、霄雲は織史を顧みた。

「そうですか。実は先日…織史殿が眠っておられた時にも、人が訪ねて来られたのです」

重い表情で霄雲は話し始めた。それは自分が意識を失っていた五日の間に起きたことだ。

「初めは一人の老人とその妻と名乗る女性でした …」

… その老人と女性は、？宮の表門にやって来た。織史が倒れた次の日の昼のことである。応答に出た門番に、二人は自分の娘がここに居ると聞いて来たから、会わせて欲しいと言った。そして数日前に突然姿を消し、行方知れずになっている娘は、黒髪に黒い瞳。口が利けないと述べた。織史のことであろうかと思つた門番が通してやろうとしたところへ、霄雲が通り掛り話を聞いた。どこか違和感を覚えた霄雲が詰問すると、二人の話にちらほらと穴が見えてきて、話しが嘘であることが判明した。次に訪ねて来たのは、夫であると名乗る男であつた。妻を返せと騒ぎ、終いには兵士の出る始末となつた。その男も同様に、搜索人を黒い髪、黒い瞳に口が利けぬ娘だと答えている。その後も数人の女性たちが自分の妹を探していると称して訪ねて来たり、織史らしき人物を捜し求めて？宮に訪ねて来る者が続いたりした。三日目の昼には簪を売りに来た店主と思われる男が、織史の眠る場所に近付き不審な行動をしているところを目撃され立ち去つていた。どうやら出方を変えたようで、今度は織物売りや野菜売りといった商人に成りすまし、織史に近付こうとする者が出てきていた。 …

「… そのため、この人の出入りは厳重な警戒をしていたのですが、昨晩は実力行使でこられたようですね」

霄雲の瞳に鋭い光が宿る。その話を聞いていた織史も、あることに気付いていた。

私の声が出ないことを、相手は知っていたのか…

確かに昨夜の男も自分が騒がない…否、騒がないことを知ってい

るかのようだった。しかし何故。

「言い難いのですが、織史殿はご自分の命が狙われる心当たりはありますか？」

霄雲の言葉に織史は首を振る。

何故命が狙われるのか、こつちが聞きたい

おそらく自分の声が出ないことを知っている人物が手引きをしているのだろうが、誰なのか見当もつかない。

「困りましたね……」

「本当に、困ったことでございます」

霄雲の言葉に同調するように厳しい語調の声が響いた。

振り返ると数枚の布を抱えた一人の女性が、こちらに歩み寄って来るところであった。緋色を基調にした衣を纏ったその女性は、初めの頃に薰衣と共に叶君に付いていた人物である。名を、丁字といった。

「このように何度も屋敷を壊されては、私共も困ります。叶君様も、御自分の屋敷でありながら安心して御戻りになれませぬ」

通り様に丁字は織史をチラリと見た。その視線は鋭く、冷ややかに注がれていた。

織史は唇を噛み締め、自分の行動に嫌気を感じた。

見ず知らずの、しかも身元も判らず口も利けない自分を助けたばかりに、この家の人々は大変な迷惑を被っていたんだ……。自分の所為で……

丁字だけでなく、他の女官たちもそう思っている筈だ。ただ優しさから、表に出さないだけだろう。

織史はやるせなさに胸を痛め、そして苦い想いに駆られる。

いつそのこと、全てを終わらせてしまおうか

沈鬱な面持ちの織史を目にして、霄雲が口を開く。

「織史殿。そうあまり考え込まないでください。今は一刻も早く体を治し、声を取り戻すことに専念しましょう」

その気遣いが、織史の心に凍みる。この優しさに甘えそうになる

自分を叱咤し、織史は瞳を閉じた。

耳に届く木の葉の音。風が吹き抜け、時折聞こえる水飛沫の音。女官たちの歩く衣擦れと話し声。そして

一瞬、空気をぶち抜くような音が耳に響く。

驚きに眼を開くと、大きな衝撃音と共に目の前の木が倒され…否、踏み潰された。鼓膜を震わし、軋んだ音と騒がしい葉擦れの音に紛れて、低く唸る声が聞こえ、織史は全ての時間という動きを握り潰されたように感じた。

一点を見詰めたまま、その眼はそこから離すことができない。

鋭く光りながら自分を見返す瞳。いとも容易く木を薙ぎ倒し、踏みつけている手足。恐怖心を煽る長い爪と、やすりをかけるように伝わる咆哮と共に見せた鋭い牙。

「織史殿っ！」

叫びにも似た霄雲の声が響き、それを聞くと同時に自分の体が横へ飛んだ。

地面に転がり込むように倒れる。その頭上を一迅の風が通り抜ける。まるで突風のようなそれは、目の前に現れた獣が織史目掛けてその爪を走らせたものだった。

霄雲が腕を引き寄せてくれなかったら、自分は… 脳裏に浮かんだ不吉な光景に、織史は息を呑む。

その刹那、衝撃と共に舞い立った土埃の向こうから一本の矢が飛び込んで来る。霄雲の身体を突き放すように身を後ろへ引くと、矢は二人の間を通り織史の袖を射抜いた。

それを目にした霄雲はすぐさま腰に佩いていた剣を抜く。霄雲もまた、このような事態に備えていたのである。

再び矢が放たれ、白刃がそれは撥ね返す。しかし悠長に霄雲の剣を見ているわけにもいかず、織史は背筋に悪寒を感じて振り向くと、次は上から獣の腕と鋭い爪が降りてくるところである。慌てて身を引いた織史の耳に、騒ぎを聞きつけて近付いてくる兵士達の足音が届いた。

女官たちの悲鳴に紛れて薫衣の声が聞こえる。それは確かに、自分を探しているものであった。

「織史殿　っ！」

危機感を帯びたその声が出た方を向くと、髪を振り乱した薫衣と、眉を顰めた表情を見せる？公の姿が在った。

織史は？公の姿を目にした途端、身の中心で何かが脈打つのを感じた。正確には、？公が手にしていたあの黒い剣が目に入った瞬間である。

そして耳に、脳内に、声が響いた。

一体何が聞こえたのか自分にも判らない。ただ聞こえた気がした次の瞬間には、織史は廂に上がり二人の元へ駆けていた。目指すは二人の姿では無く、不思議と艶めいて光る黒き剣、ただ一点。

金糸の飾り紐の下がるその柄に手を伸ばすと、驚きを見せる？公と薫衣を尻目に、織史は振り向き様に剣を鞘から抜く。

まるで背に眼がついていたかのように、その切っ先は襲い来る獣の手を斬り落とした。

自分でも、何が起こったのか直ぐには理解できずにいたが、激痛に悲鳴を上げる咆哮が轟き、暴れ狂うその獣の腕が再び頭上に振り上げられると、織史は両手で剣を握り直し下から上へと腕ごと斬り付けていた。

織史には何故か、その様が自分の手によって起きたもの、起こされたものという気がしなかった。

自身から一步離れた場所にある何か、自分の身体を支配しているような感じがする。

だが同時に剣を握り締めた指先から広がる、肉と骨を斬る感触があまりにも生々しく、眼を覆いたくなる。

しかしそれさえも、自分を縛り付ける力は許さなかった。

そんな織史の心とは裏腹に、その姿を目にした者達は一瞬にして心を奪われていた。

煌めく閃光と共に黒髪が揺れ、鮮血が飛ぶ。凶々しさの中に一際

強く輝きを放つ神聖さがそこにはあった。

織史は獣の首に剣を突き立て、引き抜くと吹き飛び散った血をその頬に受けながら悄然として屍の上に佇む。漆黒の双眸で天を仰ぎ、一つ大きく息を吸い込むと呼吸を整えるように瞳を閉じる。

そこへ、一本の矢が空を切った。

まるで一輪の花が風に靡くかのように、織史は身体を引く。矢はその横を掠めて、まだ柔らかい獣の体に刺さる。その刹那、織史は眼を開き矢の放たれた方向へと飛び出していった。

一体自分の体は何をするつもりなのか、織史には判らない。

それでも握り締めている柄から手が放れないように、全身が黒き剣に導かれ、木の間へ向かって突き進む。目の前から矢が飛んで来ようとも、織史の体は止まることなく駆けて行く。そして着実に、矢を放った人物を追い詰めて行つた。

再び織史の眉間を目掛けて飛んで来た矢を避け、横に跳ぶ。

その足で側に立つ木を足掛かりに、敵の真上へと跳んだ。

剣を振り上げる織史の眼が、確かに弓矢を手にした男の姿を捕らえる。

同時に、自分が何をするつもりであるのかが、織史の脳裏に走る。瞼を強く閉じながら、織史は叫んでいた。

やめてえーっ！

罰を望む逃避（前書き）

遅ればせながら・・・

前回までのあらすじとして、

シングウ内でのある夜のこと、織史の命を狙う者が現れた。

命辛々なんとか逃げ続ける織史であったが、それは彼女の知らない水面下でも行なわれ続けていた。

そして遂にある日、昼間でありながら裏手の森から獣までもが襲来した。

騒ぎの中、織史は？公の手にしていた剣を目にした途端、何か憑かれたように剣を振るい始める。

そして獣の次には、自分を狙う人物の元へ

罰を望む逃避

気が付くと織史は血に濡れた剣を手にして立っていた。

弾かれるように右手から握っていた柄を放し、震える手を胸の前で握り締める。

すると生臭く錆びた臭いが鼻に突き、眉を顰めた。

咽返るほど、身の回りには生々しい血の臭いが充満している。

口許を覆おうと掌を動かしたとき、又メリとした感触が手に広がった。

おそろるおそろる自らの手を目にした時、織史の身体は痙攣するように跳ねた。

!!

何も言葉は浮かばない。頭の中は真っ白になる。

離したくとも視線を外すことが出来ず、文字通り釘付けになり、織史は意識が遠のくのを感じる。

けれども自分の手が何を意味するのか考えると、それを確かめたという衝動に駆られた。

ゆっくりと首を回し、手から離れた視線を地面に移す。

織史は泣きたくなかった。

心のどこかで生じていた期待は裏切られ、そこには血溜まりにうつ伏せになっている男の姿が在った。

涙は出ない。勿論、一言も声は出ない。

しかし織史の頭の中では何かがガンガンと鳴り響き、辺りの音が一切掻き消されている。

一步、また一步と後ずさり、織史は男の身体を凝視しながらもその身を引く。

背中が木に当たり、そのまま織史は木肌を伝って地面にへたり込んだ。

何も考えられなかった。

手に残る、生温かく又メリを帯びた血の感触。
辺りに広がる死臭。

誰の姿も見えないこの場所で、自分一人だけが立っていたその事実。

私が、殺した

織史はもう何も考えたくはなかった。

どう足掻いても、目の前のものが消える筈のない現実であることを確信していたのだ。

後悔にも似た念が心を包み、闇が広がる。だが、異様なほど冷静に全てを見詰めている自分が居ることに気付いた。

薄笑いすら浮かべそうな、もう一人の自分。

その存在もまた、確かなものだった。

そこへ、自分を捜し求める声が響く。

「織史殿：！」

霄雲の声は確実にこの場所へと近付いて来る。

草を掻き分ける音と、自分を呼ぶ声が重なり辺りにこだまする。

再び織史の身体は脈打ち、声とは反対の方向に向かって走り出した。

こんな姿を霄雲に見られたくは無い。人とも獣とも分からぬ血に塗れ、死臭を放つ穢れた自分を。

屈託の無い笑顔を見せ、自分に優しく接してくれた霄雲。そして華星を自分に合わせ、街に連れて行ったりと心遣いも見せてくれた。何よりも、霄雲は自分を最後まで妖獣ではなく“人”として信じてくれていた。その気持ちがとても嬉しかった。だからこそ、霄雲には今の姿を見せたくはなかった。

いつの間にか目尻を濡らし、涙が後ろへ流れていく。

ごめんなさい

織史は震える唇から呟くように、言葉を漏らした。

どれほどの距離を走り続けたのか判らず、どこへ向かっているのかさえも判らない。辺りは木々が茂る同じような景色ばかり。そし

てその木々は自分を見下ろすように聳え立ち、昼間だというのに薄暗い影を落としていた。

織史は一本の木の本に辿り着くと、その場に倒れこんで天を仰いだ。

脚の筋肉に重みと痺れを覚え、体中を駆け巡る血脈の響きを聴く。痛みを微かに伴う胸の苦しみを感じながら、息を吸い込む。瞳を閉じると一滴の涙が伝い、咽喉がヒリヒリと痛み、呼吸さえも上手くできない。また一つ、涙が零れる。頬を通り抜ける風が、ひどく優しかった。

もう、消えたい

その想いだけが、織史の頭に浮かび薄れることなく存在し続ける。霄雲にも、薫衣さんにも、皆に迷惑ばかり掛けてしまった。何も返すことができないのなら、せめて邪魔にならないように消えてしまいたい

織史は心から、あの夜と同じ言葉を紡いだ。

我を殺して浄化し給え

額の一点に熱を感じた。もう一つの眼が開くような感覚。

その眼に映るものは、自分の知らない景色だった。

天に突き立つ岩壁と浮き上がった平地。そこから流れ落ちる幾筋もの滝と水に掛かる虹。緑豊かな大地とどこまでも広がる青い空。

知らないような気がするものの、既視感がある。

この光景を眼にした時、自分の手は草に触れていた。その感覚が甦る。

手だけではない。脚も、膝も、腰から下は地面に付いて丈の短い草に接していた。そして

「織史殿……？」

織史はその声で我に返る。

瞳を開けると傍らには、膝を付いて自分を覗き込む霄雲の顔があ

った。

起き上がろうとしたが腕に力が入らず、寝たままの状態で見合わせる。

本心では、立ち上がって逃げ出したかった。しかし身体が思うように動かず、それならば…と腹を括ったのだ。

どんな蔑みの言葉でも、今は受け止めよう。

叱責され、憎まれようとも構わない。

たとえこの場で殺されようとも。

「織史殿。お怪我はありませんか？」

その瞳があまりにも優しく、その言葉があまりにも当然のことのように囁かれて、織史は涙を零してしまう。

「どこか、痛むのですか？」

織史は首を振り、瞳を閉じる。

おろおろと慌てた様子で霄雲が声を掛けるが、織史は目を開くことができない。

それは、止め処無く溢れ出る涙のせいだけではなかった。

「さあ、こちらへ」

差し伸べられた手に抱き起こされるが、織史はまた首を振り返りその腕から逃れるように身を引く。

すると突然、霄雲の顔色が変わり、困惑を隠せないと言った表情で織史を見た。

そして言葉通り声音も、霄雲とは異なったものが響き始めた。

「…ナ、ゼ…」

次は織史が戸惑う番である。

「…なぜ、私の術に掛からぬ…」

次第に霄雲の身体が歪み、崩れ、そして人影を捻じ曲げるようにしてその姿は別のものへと変化する。

鋭く伸びた緑の爪。針のように真っ直ぐな白い髪。そして耳の辺りかは飛び魚のヒレのようなものが生えており、背には蜻蛉のような双翅が見える。悩ましげに細められた目は、深い青色をして織史

の姿を捕らえた。

「お前、何故我の術にかからぬ。人間ではないのか？」
苦悶に歪められた眉根と額に白い指を這わせながら睨み付けてくる。

何故、この人物 “人” であるとは思えないその姿が霄雲に見えたのか織史には判らなかつたが、どうやら “術” で姿を変えていたようだということは解った。そして自分にその術が完全には掛からなかつたということも。

「…まあ良い。せめて最期の夢は望むものと思ったが、どちらにせよ死ぬことは変わらぬ。さあ娘。その甘美な肉体を我に捧げよ！」
その鋭い爪が自分に伸びてきても、何故か織史は眼を閉じることができなかつた。

恐怖からでも、一瞬のことに対応できなかつたからでもない。ただその切っ先を見詰め続ける。それが、自分の望みを叶えてくれるものであるように。

呼吸は、驚くほど穏やかだ。音も無い。あまりの静寂に、思い出したくないものまで見えてくる。それを打ち消すかのように、目の前の一点を見詰める。

鋭く、眼にも鮮やかな緑色。
それだけを見詰める。

「悪いが、この方は返していただく」

突然、織史の眼前に影が過ぎる。

白に近い灰色の髪に紺青の結び紐を巻き、一つに結び上げてた後姿からでは、性別の判断をしかねたが、その背の向こうに視線を向ける前に、織史の身体は横から抱えられてその場から離れた。

遠ざかる景色の隅に対峙する人影が見えたが、すぐに緑に覆われてしまい、気が付くと織史は池の畔に連れてこられていた。

「お怪我はございませんか？」

声の主にふわりと草むらに下ろされ、織史は顔を上げた。見ると赤茶色の長い髪をした人物がそこに立っている。

「…ああ、失礼致しました。お声が出ないのでしたね…」

戸惑いを浮かべる声は甘い低音。思案するように小首を傾げる姿は少女のようだ。

「私共はセイシンコウ様と霄雲様の部下でございます。ご安心ください」

柔らかく微笑みながら挨拶をし、少女は背に担いでいた荷を解き始める。

セイシンコウとは確か、？公のことだ。朱妃がそう呼んでいたのを思い出す。

そして織史の心臓はドクリと脈打った。

今度こそ、自分はある人に殺される。人を殺めた罪で、処刑という形で

「……申し訳ございませんが、少しの間この場を離れますゆえ、どうかその身の血糊を洗い流してもらえませんか？」

おずおずと織史の前に包みを置くと、少女は言った。中身は水色と藍染の衣だ。

織史が頷きを返すと少女はその場を離れ、葉が揺れる音だけが残った。

身に着けていたものの帯を解き、池の淵に屈む。

季節はまだ水浴びを平気でできるほど暑くは無く、急に飛び込めるほど織史自身にも気力がない。

足を浸すとヒンヤリとした冷気を感じたが、すぐにそれは和らぎ、温みさえ感じる。不思議に思ったが、今はその水温がありがたい。

とにかく急ぎ脚や腕、顔に付着した獣の血を洗わなければならない。水面に映った自分の顔を見て、織史は嫌悪の色を隠せなかった。

何よりも、血や泥に塗れてもなおキラリと光る眼が、自分こそ異形の獣だとも言っているかのようで、見るに耐えなかった。

そして、最後に用意されていた衣の袖に腕を通すと、織史は深く

息を吐いた。

こつちの世界では、死に装束はあるのだろうか…

ふと、そんな考えが脳裏を過ぎり、思わず笑いが込み上がる。

先刻は獣に殺されるのを恐れて剣を振り、自分を狙った人間を殺めた。その行為に恐れを抱いて逃げ出したが、結局は死に切れず助けられた。今の自分に感じるものは、呆れと侮蔑ばかりだ。

風に揺れる水面を眺めながら、織史はあることを思い出した。

そういえばさっきの人が“最期の夢は望むもの”とか言っていた。どうしてあんなこと…

織史が思索していると、葉擦れの音と共に一人の人物が草むらに飛んできた。

文字通りその人物は枝から跳び下りた様子で、衣服に付いた木の葉を払いながら立ち上がった。

一瞬驚きはしたが、見ると先程割り入った灰色の髪を持つ人物である。一見男性のように思われたが、面立ちとしなやかに伸びた手足や体付きは女性のようなのだ。

それにしても、この人物の髪は溜息が漏れるほど美しく、風に靡く様に見惚れてしまう。絹糸が幾筋にも連なり、高貴な織物のようだ。

「まだセイシンコウ様方は御着きでないようですね。失礼ながら、私も血を流させて頂いて宜しいですか？」

池の側まで歩み寄り、座している織史に言葉を掛ける。抑えている右腕には、掻き傷のような爪痕と血が滲んでいた。織史が頷いて場所を空けると、軽く頭を下げて腕を水に浸す。その後姿を見て、織史は女性の腰に巻き糸が下がっていることに気付く。童話に出てくるような、糸紡ぎの山のように幾重にも巻かれた糸山が、五束。その腰には下がっている。その他には剣や槍、弓といった武器は一つも無く、ただ紡ぎ糸があるだけだ。一体どのようにしてあの場所から逃れてきたのだろうか。

「どうかされましたか？」

織史の視線に気付き、静かに振り返る。

慌てて首を振り、織史は再び森の方に視線を戻す。どうせ自分はいから死ぬのに、人のことなど気にすることもないだろう。そして何よりも、頭の中で鳴り響いている“何か”の方が気になることも確かだ。

あの剣を握ってからずっと頭の中でこだましている“声”。初めはただの音。そう、耳鳴りであるような気がしていた。

次第にそれが大きくなり、何を呟くような、囁くようなものになった。

しかしその“声”は織史があ現場から走り去る時には、消えていたように思われる。

否、ただ織史自身がその“声”を聞き取れないほどに混乱していたに過ぎないのかもしれない。

そしてつい先程、例の人物に助けられて池の水に触れた瞬間から、再びその声が織史の中に響いたのである。

だが“声”や“言葉”というようにはっきりとはせず、何を囁いているのかはさっぱり判らなかつた。

断片的で、一音一音が微かにしか聴き取れない。不思議な“声”。けれどその音にはなぜか懐かしさに似た想いが感じられ、耳に残る。困惑に近い思いで目を閉じると、木々のざわめきと共に霄雲と？公達がやって来た。

「ご無事でしたか」

霄雲の言葉を聞くと、織史の心は揺れた。唇を噛み締め、込み上げる想いを抑える。

瞳を合わせることが辛くなり、俯き加減に視線を逸らすと不安げな表情で霄雲は織史の顔を覗いた。

「どこかお怪我でも…？」

正座した織史の前に霄雲が膝を付き、爪の間に残る血糊を一瞥する。織史は静かに首を振り、方頬を緩ませる。

ぎこちないその微笑みに、霄雲もまた哀しげな笑みを返した。もう、顔を上げることはできなかつた。

「娘。あの剣はどうした？」

二人の間に上から声が掛けられた。そこには枝の合間から差し込む陽を受けて立つ？公の姿がある。

織史が首を振ると、訝しげに眉を寄せ、少し声音が下がる。

「…無くしたのか…？仕方ない。皆に剣を捜す旨を伝えよ」

？公は傍らに控えていた従者に命令を出すと馬に似た獣に跨り、座つたままで居る織史を見下ろす。

「今一度、？宮へ戻るぞ。処遇はその後に決める」

馬首を返して走り出した？公を追うようにして、霄雲と共に織史は再び薰衣達の居る？宮へと向かつた。

無心で必死に駆けつけた道のりは意外と長く、屋敷まで半刻ほどの時間を費やした。

そしてその道中、獣の背には黙り込んだ織史と霄雲の姿があつた。

もう逃げる気はないのだけど……。私に信用なんてないか

重い空気の中で、織史はそう思った。

チラリと霄雲の顔を見上げると、あの時のように強い眼差しが在り、自嘲気味に息を吐く。

獣の足が土を駆る音が、ひどく耳に響いた。

記憶の欠片（前書き）

幕間的な部分です。

これまで、シングウでお世話になっていたところから移動します。

記憶の欠片

「ああ。ご無事でございましたか」

屋敷に着くと、薫衣が入り口の所で織史の姿を認めて駆け寄って来た。その姿が我が子の帰りを待つ母親のようで、織史の胸が痛む。強い優しさは、今はひどく沁みる。

「お仕度はこちらに整えてございます」

薫衣の後ろから、丁字が一つの箱を示しながら言った。その箱を門の脇に控えさせていた馬車に積み、霄雲は織史の手を引く。どうやらその荷は自分のものであったらしい。

去り際に織史は薫衣に向き直り、深く頭を下げる。声にはならなかったが、唇は感謝を述べる形に動いた。

「お元気で」

連行されて行く者に向ける言葉としては不似合いだが、薫衣の心の籠もったその言葉は、ひどく温かい。

目頭が熱くなり、隠すように俯くと一粒の雫が足元に滴る。乾いた土に吸い込まれてそれは、直ぐに消えた。

織史は顔を上げられずに、そのまま馬車に乗り込む。すると微かに、風に紛れて鈴の音が聴こえた。

地を駆ける車輪の音と振動の中で、織史は布の掛けられた小窓から垣間見える空を見詰めていた。

流れる雲と、どこまでも同じ空の青。鳥の姿も無く、眼にも鮮やかな色だけが広がっている。

それを見続けていると織史の気持ちは、先刻、脳裏に浮かんだ異世界のような光景に飛んで行く。

自分の作り出した幻想か、それとも失っているらしい記憶の一部

か。

こんなどうでも良いことを考えてしまうのは、きつと単調な時間が長いせいだ。

いつそあの場で、処断してくれたなら良かったのに。

そうすれば、こんな不毛な時間を過ごすこともなかっただろう。

力なく床に置かれた指先は微かに冷え、瞬きを忘れてしまった瞼は常に薄く開いている。時折訪れる大きな揺れにも動じることなくまるで人形のように座り続け、そして意識のあることさえ不確かな様相で、織史は眼を空に向けていた。

「眼を閉じてはいけない」

不意に、脳内に直接響くかのような声が、こだました。

……

「眼を閉じてはいけない。汝の眼は我と繋がる唯一の扉。心を強く、眼を開け」

誰…

「夢で繋がれたるは雨夜の花だけ。我と汝はその眼で繋がった。その眼を閉じてはいけない」

……ごめんなさい……。私…

「水気は私の力を呼ぶ。汝の願いを言え」

願い……。私の願い…

「強く願え。私の力は必ず汝に届く」

…私の願いは…。あなたとの約束を守りたい

織史の眦から一滴の涙が頬に流れた刹那、額に一閃の光が走る。

熱と共に貫くような一筋の光が、額で碎けて流れ星のように織史の身に降り注ぐ。そして次の瞬間、大きな衝撃が馬車を襲った。

「何事かっ!？」

「敵襲でございます!」

慌しい音が周囲から沸き立ち、仕切りを挟んだ向こう側から兵士の声がある。辺りに馬の嘶きが響いて揺れがひどくなり、壁板に矢の立つ音がする。小窓からも矢が飛び込み、内一本が織史の左手を

貫いた。

激痛に織史は正気を取り戻し、左手から伝わる熱に顔を顰める。運良く、刺さったのはその一本だけだ。

「 霄雲様！」

「こちらに構うな、先に行け！ 失礼します、織史殿」

厳しい声を上げて、霄雲が仕切り戸を開けて織史の側に来る。

その手元に突き立つ矢を目にして霄雲は一瞬だけ眉根を寄せたが、直ぐに織史の身体を抱え上げ、仕切り戸の向こうに戻る。

開けた視界に飛び込んで来たのは、自分を運んでいた馬車の馬と、両脇を馬で駆けている見知らぬ矢を携えた男達。見ている先からその手に握られた矢が放たれ、空を切る。辺りを囲んでいた兵士達がそれぞれの剣で矢を弾き返しているが、その数に払いきれなかった矢が織史の頬を掠めた。

霄雲は馬に飛び移るとその手綱を握り、駆けられていた荷車を引く縄を剣で切る。

「しばらくご辛抱を」

小さく言って、霄雲は強く織史を抱えて馬を駆る。兵達を置いて走り抜けて行く速さに、賊も追って来られずに居る。そんな流れる景色の中で、織史は木々の間に人影を見た。

黒い布を頭から被り、闇に紛れるように佇む姿。そして見えない瞳から放たれる鋭い視線と一瞬だけ眼が合う。その感覚を、織史は初めてでは無いように感じていた。

射抜くというよりも、激しい感情に研がれた視線。憎しみや嫌悪の色さえ見えない、純粹なまでの殺意。排除するためだけに向けられた、ひどく印象的な眼。呼吸さえも奪われてしまうような強さが、そこには在った。

思わず走った震えに、織史は左手の痛みさえ忘れて両腕を握り締める。貫いた矢の切っ先を伝い、滲む鮮血が袖に滴ると同時に、掌から広がる熱と疼きが意識を違う方向へ引き込む。

一度だけ瞼を閉じると、織史は矢の柄に手を掛けて一気に引き抜

いた。紅玉のような血が飛び散り、手首にも赤い血が流れる。役目を終えた矢は乾いた音を立てて、土埃の向こうに消えて行く。その眼には、これまで失われていた光が、宿っていた。

移ろいの中で

「この部屋の物は自由に使ってください。それから、何か用のある時はこの紐を……」

霄雲は言いながら壁際に下げられている青い紐を引いた。すると扉に下がっている薬玉のように集められた鈴が鳴った。

「そうしたら、人が来るようになっておりますから。さて、そろそろ医師が来る頃かな……。僕、少し外を見て来ますね」

言って、霄雲は柔らかに微笑み、部屋を後にした。

織史は所在無く、窓辺に置かれた卓まで歩いて椅子に座る。そして疵付いた左手に巻かれた布を見詰めた。

目的地と思われる場所に着き、その門内に駆け込んだ後、霄雲が巻いてくれた物だ。自分の衣を裂いて、応急処置として止血をしてくれた。その水色の衣には血が滲み、今では赤紫色に染まっている。疼くような感覚と熱が傷口から広がり、痺れが左腕を襲っている。織史は目を閉じて、ゆっくりと深呼吸を繰り返す。

瞼を閉じると鮮明に思い出す。先刻眼にした光景が、まるでスロモーションのように、一枚一枚呼び起こされて浮かんでくる。

じわりと傷口から血が滲み、衣を濡らす痛みは無い。

熱を感じるものの、まだ痛覚は鈍いのだろうか。傷を負っているという違和感だけが掌にある。それを不思議に思いながら、織史は息を吐く。

サイ……

ふと口を突いた言の葉は、部屋の隅でたかれている香りに溶け込む。

血の臭いを忘れさせてくれるその香りは、霄雲の香とも？公の香とも異なったものだ。勿論、？宮の甘い花の香とも違う香りであったが、織史はこの香りを嗅いだ覚えがあった。

ゆっくりと呼吸をすると、全身に香りが巡り、力が抜けていく。眠気とも違うその感覚に、織史は身を委ねるようにして椅子に深く腰掛ける。そして窓から空を見上げた。

そう言えば、あの日も抜けるような青空だったっけ…

青天の奥に、記憶の断片が浮かんで見えた。

高い高い青空に、揺れる黒髪。はためく白い布。雑踏と人混みを掻き分けて、走り続ける。

その向こうで、小さな白い手が振られている。

自分と呼ぶ声が聞こえて、こちらから返事をしようと口を開く

…

その瞬間だった。目の前が一変したのは。

紺色の物体が視界を遮り、喧騒が耳を覆う。騒音、騒音、騒音。

それが、誰かが口にした絶叫であると知ったのはしばらく経って後だった。

爪先に触れる何かを感じて視線を向けると、先刻まで自分に振られていた小さな白い手が、紅い液体に濡れながら其処に在るのが目に入る。

もう二度と、振られることの無い白い手が。

「… 織史殿？」

不意に声を掛けられて、織史は意識を戻す。

今はその現場ではない。自分は椅子に座って、窓の外を眺めている。それだけだ。

「傷が痛みますか…？」

心配そうに顔を覗き込んでくる霄雲の目を見たとき、織史は自分の身体を巡る血の流れを改めて感じた。

ぞっとするほど青白く、虚ろな双眸を持った顔。微かに震える指先と、緊張した全身。そんな自分の姿が、霄雲の目の中に浮かんで見えた。

織史は首を左右に振り、小さく口角を上げる。

本当に、痛みは無かった。

矢に貫かれた初めは、電流を流されたかのように、無数の針が血管を刺しているかのように、激痛と呼ぶに相応しい痛みが全身を駆けた。

しかし痛みを感じたのはその瞬間だけで、痛覚がどうにかなってしまったかのように、左手の掌から痛みを感じることはなかった。ただその感じは、先日？公の扇から頬に受けた感覚に似ていた。

だからなのか、その後医師に手を診てもらっているとき、側で立っている女官が痛ましさに眉を顰めていても、傷口に医師が触れても、織史の表情が動くことはなかった。

医師も、診察はし易かった様だが僅かに顔を曇らせ、部屋を出るときに霄雲の耳元で何か伝えて行った。

その言葉が織史の耳に届くことは当然無かったが、霄雲の沈んだ表情でその内容は察することができた。

「織史殿、これから貴女の世話をする者を紹介しますね。クラ、リシヤ。入りなさい」

座っている織史の側に来た霄雲は、微笑みを作りながら話すと扉に向かって声を掛けた。すると二人の人物が一礼して入ってくる。

一人は白に近い灰色の真っ直ぐな髪で、紺色の衣服を纏っている。もう一人は赤茶色の髪を後ろでまとめ、人懐こそうな目を織史に向け、同じように紺色の衣服を纏っている。

どこかで見たことがある。そう思ったとき、先刻森の中で会った二人であることを思い出した。

「駒羅と申します」

「僕は彬矢と申します。先刻は挨拶もせず、失礼致しました」

そう挨拶されて初めて、赤茶色の髪の人物 彬矢が少年であることを知った。

外見は少女だと言われてもおかしくない程で、逆に少年だと言われる方が疑わしく思える。

「セイシンコウ様から、剣を扱えると伺いました。そしてこちらを渡すようにと、仰せ遣いました。必要など無いように努めますが、

万一の時にはこちらをお使い下さいませ」

織史の驚きを他所に、駒羅が手にしていた一振りの剣を差し出した。

「？公殿がそのようなことを…？」

「はい。先的一件をお聞きになられたのことかと存じます」

霄雲が訊ねると、駒羅の横に立っていた彬矢が少し声音を低めて答えた。

思案気に眉を寄せている霄雲を一瞥して、織史はその剣を受け取った。

手にズシリと重圧が掛かり、手首が下がる。それでも指先に力を入れて握り締めると、胸の奥で何かがざわめくのを感じた。

震える。

この感覚をそういふのだとしたら、自分は同じ“震え”を以前に感じたことがある。

それは身体の中心から、自分では無い何か引き上げられるようにして沸き起こる感覚。それが全身を満たすことで、自分は“自分”を見失いそうになる。

そんな“震え”に似ている。

そう、あの白い手を眼にしたときに広がった感覚に。

「織史殿？」

下から顔を覗きこむ霄雲の視線に気付き、織史は正気に返った。

返事をするように目を向けると、少し心配そうに微笑みながら霄雲は言った。

「後で、お茶を飲みませんか？ 彬矢は腕の良い楽士でもあるんです」

「え、僕ですか…？ いや、そんな、お恥ずかしい」

「お前のための言葉じゃないだろ」

霄雲の口に入った言葉に彬矢が照れた様子で後頭部を搔くと、その横で駒羅がポツリと呟いた。

彬矢は「違うの？」と聞き返すように丸い目を動かすが、霄雲は

ふたりの言葉を流して織史の手を引く。

以前は少年らしい細い手だと思ったものが、今は温かく心強いもののように感じられる。

武骨とは決して言えない手だが、剣や弓を扱う手であると知っているからかも知れない。

それでも、血生臭い感じを受けないのは霄雲の柔らかい微笑みや、屈託の無い話し方がそれを包んでいるからだろうと思う。

それに、霄雲の手からは何故か温かさを感じる。気持ちだけでなく、実際にも。

織史は繋いだ手に、そつと力を籠めた。

霄雲に手を引かれて通された場所は、中庭の池に面した東屋であった。

単に東屋と呼ぶには相応しからぬ様相をした場所ではあったが、「狭い所で済みません……」と言い難そうにした霄雲の様子から見る限り、この屋敷に暮らす人にとっては大した場所ではないらしい。

白木の欄干と柱に、浅葱色をした毛氈の敷かれた台座は、ともすれば能舞台のような趣を見せている。それというのも、池を正面とする壁に描かれた龍の姿があまりにも荘厳で、眼を奪うほどの色彩美を放っているからだ。石造りの橋で繋がる、同じように白木を基調として造られた東屋を客席と見立て、一指しても舞えば雨でも降りそうな雰囲気がある。当然ながら、続く東屋とて柱に施された彫刻や、四方の柱を繋ぐように設えられた木製の座所の背凭れ部分に描かれた蓮の花も、慎ましやかな美しさを放っていた。

織史は勧められるままに腰を下ろし、目の前に座る彬矢の演奏に耳を傾けた。

水面を渡る風が心地良く、響く楽の音もまた、織史の心を和ませる。

初めて目にする楽器から紡がれる旋律は、弦楽器特有の音色を紡ぐが、耳にしたことのない曲目で、涼やかな風を思い起こさせた。

目を閉じると水面に浮かんでいるかのように錯覚する。

そしてそのまま身体から力が抜けて、柔らかい何かに包み込まれていく気分だ。

まるで、笹舟に乗っているような気分

気分が良くなつて、口許の笑みがやがて歌を口ずさむように綻んでくる。

そして鼻先を、湿った空気が流れた。

…ポツリ。

頬に冷たいものが当たり、織史は目を開ける。

首を傾げて屋根の向こうに広がる空を見上げれば、雲の姿は見当たらない。

気のせいかとも思ったが、気にし始めるとその匂いに意識が向く。

雨の、匂い？

もう一度顔を空に向けると、織史の考えを肯定するかのようになり、空が曇り始めた。

風が立ち始め、水面が揺れる。

「…お帰りか…？」

席から立ち、欄干から身を乗り出す雷雲の口から呟かれた言葉に、織史は小首を傾げる。

帰る？

「こちらに」

同じように欄干に寄りかかっていた織史の腕を、駒羅が引いた。

何かと戸惑う様子の織史を奥に連れ、外から身を守るように駒羅が肩を抱く。

耳に入るのは空を切るように強さを増す風の音。暗雲に包まれていく池の景色。

彬矢も手を止めて織史の側に居る。

勢いを増す嵐の様に、手を加えるように空が光る。雷が走り、石のような雨粒が辺りに降り注いだ。

ただ、三人の表情に陰しい色が浮かんでいないことだけが、織史

の心を静かにさせている。

そして一際強く、稲光が空に走り、耳を劈くような轟音がこだました次の瞬間、周囲の気がざわめいた。

「出迎えとは、ご苦労だな」

覚えのある声が聞こえた。

一瞬にして静寂に戻った中で、その声はとても澄んで耳に入る。

水滴を煌かせる飴色の髪。風に揺れる青色の衣。水晶のように輝いて深海のように揺らめき、そして金色を湛えた瞳。凜とした居住まいの中に、確かに存在する優雅。高貴さを顕わにしながら精悍さを見せる佇まい。

畏怖さえも覚える神々しさを放つその人物を、織史は他に知らない。

あの嵐の夜、自分を包んだ腕の持ち主であり、自分を妖かしとして対処した相手。

？公…

その名を口にしたとき、もとより声になど出ていないのに、当人が振り返った。

紺碧色に見える瞳がこちらを向いて、織史の黒い双眸とぶつかる。はっとして口許に手を伸ばしたが、織史は視線を外さなかった。

「まだ声は出ないのか？」

「そう、直ぐには…」

「仮にも治癒術の名士と云われるというのに、まだ時間を掛けるのか…」

？公が眉を顰めながら織史を見る。

その視線が自分を通り越して別の人物に向けられているのを、織史は知っていた。そして険を含んだ声音の原因が自分にあることもまた、知っていた。

「そう言えば、襲われたそうだな」

天気の話でもするかのように何気なく振られるには妙な内容であったが、？公は東屋の一角に腰掛けながら切り出した。

「腕利きを付けた筈だが、傷を負わせるとは…なかなか侮れんな」
「ご存知でしたか」

「途中で報告を受けた。質素にさせたのが仇となったな、霄雲」
「そうですね。豪奢にして表立った行動を避けたのが、逆に相手の付け入る隙を与えてしまいました」

「だが、これほどの早急な対応をしてくるとなると、大分、的が絞れてくる」

「確かに。？宮の側に密偵を放っていたとしても、あの街道で襲ってくるというのは早すぎます。辺りに網を張っていたのか、もしくはこちらの出方を予め知っていたか…」

「知っていた・とするならば、次の問題はその方法だな。占術だとすると手下に術者がいるということだ。本人かもしれないがな」

「でしたら、術者に対しても警戒した方が良さそうですね」

「しかし此処も、時間の問題だろうな…」

「そうですね。此処に居ることは知れている訳ですし」

「？公の言葉に霄雲は沈んだ面持ちで返事をした。

「仕方ない。奴の所に場所を変えよう」

「場所を変えるって…簡単に申されますが、どなたの所ですか？」

「ガーデンだ」

「え、正気ですか?!」

「あそこなら、いくらなんでも直ぐには見つかるまい。それに、例え賊が来ようと奴なら追い返せるだろ。何せそれがお役目なんだからな」

「し、しかし…。あの方が許して下さいさるかどうか…」

「なに。人助けと言えば断る筈は無いだろっ」

「確かに優しい方ではありますが…」

「そんな後ろ向きでどうする。お前があの娘を守ると言ったんだぞ。あれは嘘か？」

「いいえ！…解りました。僕からもお願いに上がります」

「そうそう、その意気を忘れるなよ」

霄雲の言葉に軽く笑いを含んだ表情を見せながら、？公はちらりと織史を見る。

「こちらの話を聞けば、奴から引取りを申し出てきてもおかしくないのだから、そう気張ることでもないがな」

「何か仰いましたか？」

「いや、こちらの話だ。それよりも霄雲、？宮から運ばれた例の物はどうした？」

「それならば？公殿の御言い付け通り、奥へ運んであります。御覧になられますか？」

「後で見せてもらおう。…私は室に戻るが、何かあったら呼べ。叶からも頼まれているからな、その娘のことは」

「心得ました」

去り際にもう一度織史を見て、？公はその場を後にした。

最後の言葉が胸に引つ掛かったが、織史は黙って？公の背を見送る。

何やら不思議な感覚で？公に引き付けられているような気がしている織史には、？公の存在が違和感を覚えさせる以外の何者でもなく、むしろ離れられることに安堵していた。

苦痛ではないが、身体の奥でざわめくものが不安を掻き立てている。

そんな感じを織史は覚えていた。

「さて、彬矢の音楽が途中でしたね。今度はお茶も用意して、再開しましょうか」

「それでは、私が」

「いや、室内に移動しましょう。織史殿もその方が良いでしょう？」意見を求められるように顔を覗かれ、織史は初めて自分が？公の歩いて行った細殿を見詰めていたことに気付いた。

そして遅れながらも霄雲の言葉を呑み込んで、その提案をふと考える。

室内に戻ってお茶を飲む。確かに湿度のある場所より楽器に適し

た場所の方が音色は良いだろう。それに、先刻の雨滴は自分たちの衣服にも掛かっていた。

けれども織史は直ぐに頷くことはできないでいた。

何が・という訳ではないのだが、織史はこの場所から離れ難いものを感じていたのである。

蓮の音（一）（前書き）

随分と時間が空いてしまいましたが、再び織史が闘います。

蓮の音（一）

東宮庭。とうきゅうてい

この辺り一帯を指す名称で、ここはその一角にある離宮のひとつだという。

湖のように広大な池を中心に、睡蓮の浮かぶ大小の池と東屋のある庭園。

織史はこの空気がとても心地良かった。

楽に呼吸ができる。

これだけ水の気が溢れているのに、流れる風が湿気を払い、清々しく感じられる場所。

時折降る雨も、空を洗うような軽いものだ。

狐の嫁入りみたい

差し込む陽光との逢瀬。

雨粒は虹を描いて、天空を渡って行く。

それを東屋から見上げているのが、目下の楽しみだった。

さらにこの庭には、奥まった場所に小さな滝があり、滝壺の手前には岩舞台もあった。

初めてその場所を案内された時には、感激のあまり幼子のように舞台上があっても良いかとせがんでしまうほどだった。

跳ね上がる水滴と、降り頻る水の気。

それらに触れていると、穢れを祓われるような心地がした。

戯れている、といっても過言ではないつもりだったが、その姿が駒羅や彬矢、霄雲の目にどのように映っていたかを、織史自身は知る由もなかった。

それは単に、ここでの暮らしが長くなかったからだ。

三日目の夜のじと。

その日の昼に、？公が連れて来たのは三頭の獣だった。

まだ子どもだという話であったが、檻の中の獣は色こそ漆黒であるものの、ふさふさとした鬣たてがみと毛並みを持った獅子のように見えた。三頭は並んで寄り添うように伏せながら、織史を見詰めている。

初めて目にした気がしなくて、どこか温かさを感じさせるその眼差しに、織史は恐怖ではなく懐かしさを感じ、檻に歩み寄った。

それを目にした獣が、のっそりと立ち上がる。

「待て」

引きとめようと駒羅が進み出たのを、？公が制した。

いつでも引けるように糸車に手を掛けたものの、駒羅は次に目にした出来事で、その手を離した。

織史と三頭の獣は互いにじっと見詰め合い、そのまま動かなかった。

瞳の奥から心の内を晒すように、織史は獣の前に佇み、穏やかに呼吸をしている。

それは決して安全とは言えない状態であるのに、何故か彼らならば、自分に牙を向かない気がしたからだ。

「あの時の、子どもですか？」

「そうだ」

「随分と懐いていますね……正直、驚きました」

「ふっ。母親か何かとと思っているのではないか？ 体内にいたのだからな」

「それはいくら何でも……」

霄雲はそう口にしたが、？公の言葉があながち嘘ではないとも思っていた。

事実、この獣 黒？猯という種族で、百獣の王たる獅子の如き鬣と体躯を持つ獣は、織史の腹から出てきたものである。それは比喩などではなく、朱妃の術によって内側から取り出されたのだ。

それに、織史自身の態度からも裏付けられている。

一般的に言っても、女子供が獣の檻に手を差し入れる様など、考

えられないことだ。侍女などは当然悲鳴を上げて近付こうともしないし、兵士の者でさえ、中には恐怖感を抱く者がいる。

そうした怯えを彼ら獣は敏感に感じ取るし、ともすれば歯牙にも掛けぬ態度で軽くあしらわれてしまうというのに、霄雲の目の前に居る少女の姿はどうだろう。

白百合のように細く小さな手を、真っ直ぐに檻の中に差し入れている。そしてそれを、一頭の黒？ 猯が鼻先を近付けて自ら擦り寄るように触れているではないか。

毛並みを撫でるようにしながら、彼らとじやれているその姿は、少女と大きな猫のようにも見える。

「……ほう」

思わず嘆息すると、その横から耳を疑う言葉が掛けられた。

「名前を付けてやったらどうだ。お前のことを気に入っているようだし、上手く躡ければ護衛代わりにもなるやもしれんぞ」

「な、何を　!？」

驚いた霄雲の声とは裏腹に、織史は思案気な表情を浮かべて三頭の獣を見る。

本当につける気かと目を見張ったのは、発言した当人も同じ様だ。

男の子…… よね？　名前を教えてもらえると助かるんだけど。

ふたりの考えをよそに、織史自身は黒？ 猯と言葉を交わそうとしていた。

勿論、自分にそのような能力があると思つての行動ではなく、ただ何となく、彼らの“声”が聞こえるような気がして、訊ねてみたのだ。

三頭はチラリと互いの顔を見合った後、織史の側に喉の横を摺り寄せてその場に伏せた。

まるで任せると言われた気がして、織史は嬉しくなる。それは初めて友人ができたときの高揚感に似て、頬を薄紅色に染めた。

「　ま、暫くは奥庭の檻に居てもらうから、それまでに名を呼べるようになるが良い」

？公は立ち上がり兵士に指示すると、衣を翻して部屋を後にした。それに続くように黒？猊の檻も運ばれていき、織史は少し寂しくなる。

後で場所を聞いてみようと思うが、声が出ない今はやはり意思疎通が難しく、一方通行な状態であるから、？公の言う通り、まずは声に戻るよう意識しようと思心に決めた。

それに……

先日の一件で思い出した【約束】のこともある。

断片的ではあるが、何か大事な内容だった気がして、何度も思い出そうと試みているものの霧がかかったように見えずにいる。それがもどかしくて、頭痛に悩まされながらも織史は糸口を探し続けていた。

せめて、顔を思い出せたなら……。

ぼんやりとしか思い出せない“声”の主の姿。

光が天から降り注ぐ岩窟の一角に佇む黒い影。宵闇よりも深い夜の海のような色の流れる髪。全てを呑み込む深淵を思わせる瞳と……

そこまで思い浮かべると、また脳髄に走る痛みに邪魔をされる。

だが、一瞬だけその場に他の人物の姿を見た気がして、織史はそちらにも意識を向けた。

と、そこに遠くから響く悲鳴が届く。

「何事か？」

静かだが張りのある声で、駒羅が廊下に向かう。織史も霄雲と彬矢に脇を固められながら、廊下を見遣る。するとその向こうから、兵士の走る音と獣の咆哮が聞こえた。

「あ、織史殿？！」

彬矢の声を背中に受けて、織史は駆け出していた。

あの声は、さっきの……っ。

「織史殿、お待ちください！」

霄雲に腕を掴まれたが、織史は衣を脱ぎ捨てるようにするりとそ

の手を抜けて、走り続けた。

途中で数名の兵士とすれ違い、さらにこの先は危険だからと止められ掛かったが、織史は廊下の欄干を越えて庭に降り、その足で騒ぎの中心に向かった。

蓮の音(二)(前書き)

闘いの場面になります。

流血描写はあまりありませんが、突飛的な部分かもしれません。。。

蓮の音（二）

声のする方へ駆けて行くと、そこは織史が初めて東宮庭で案内された池のある中庭である。その東屋で、彬矢の演奏を聞いたのは記憶に新しい。

白木を基調とした舞台の少し手前、東屋とは逆の位置に繋がる石造りの橋の上に、彼らは居た。

五人の黒衣の者たちと、あの黒？ 猯が対峙している。

さらに進むと、三人の術者らしき者の手からは青白い光が伸び、それぞれ黒？ 猯の体に巻きついて見えた。それを囲むように、数名の兵士が一緒に居たが、彼らは宙に浮いた中心者たちの出方を窺っているのか、なかなか近付けずにいるようだ。

事実、ここに至るまでに暴れていたのだろう。辺りには血が点々としていて、白木の欄干にもその痕が跳ねていた。

そして今も、目の前で黒？ 猯の体からは、赤い花卉のように鮮血が散っている。これでは容易に近付くことはできそうになかった。

しかし、三頭の姿を目にした瞬間、織史の体がざわついた。気付けば傍らの兵士から剣を奪い、織史は血が騒ぐままに大地を蹴って、彼らの前に躍り出た。

「おおっと。本命のご登場か」

一人の黒衣の者が言った。声音からすると、年配の男のようだ。
すりかね摺鉦でおろしたようなざらついた声が、小さく笑っている。

金属が空気を走る音がしたが、織史の目的はこの男ではなかった。黒？ 猯に術を掛けている黒衣の者。彼らこそが最優先対象だ。

故に、男の剣は空を切り、織史は術者の両手に剣を振り下ろす。それを寸でのところで避けた術者だったが、手から放たれていた光は織史の剣によって断ち切られた。

光の鎖から逃れた黒？ 猯は、その場で身を翻し、織史の身体を受け止めると、直ぐに二人目の術者へと向かう。まるで心が通じ合っ

ているかのように、ふたつの動きは呼応していた。

相手の黒衣の者たちも、二人目、三人目の援護に向かい動き始めるが、それを視界の端で捉えた織史は、彼らに隙を与える前に、織史は剣を構えて二人目の眼前に跳び下り、黒？ 猊は三人目に黒曜石の如き爪で襲い掛かるといふ同時攻撃を仕掛けた。

それが功を奏したのか、織史は二頭目の黒？ 猊に受け止められながら、解放した三頭とともに五人と向き合う形となった。

奇しくも、東屋側の空には黒衣の五人。舞台側の石橋に黒？ 猊を連れた織史が立っている。龍を背負った織史の姿には、居合わせた兵士達も思わず感嘆する程の気迫があった。

「ふむ。人も増え、これでは少々部が悪いか……」

中心に立つ男が、辺りを一瞥して、顎に右手を添えながら言った。「なれば早急に片付けさせていたたくとしよう。遊んでやれず、済まないな。お嬢さん」

男は言うなり両手で印を組むと、短く息を吐いて前方に手刀を放つように両手で空を切った。

途端、突風が吹きつけ、辺りを風の輪が取り囲んだ。

まるで竜巻の中心にいるかのように、風の壁一枚を挟んだ向こう側で、兵士が跳ね飛ばされて行く。

その向こうから雷雲が織史に駆け寄ろうとしたが、兵士達に抑えられているのが見えた。

他の人間を隔ててくれたのは、こちらとしても都合だ。織史は真っ直ぐに彼らを見据え、剣を構え直す。側に立つ黒？ 猊も、唸り声を上げて彼らを威嚇した。

「おお、おお。まさか黒？ 猊^{けもの}まで従えるようになったとは……。なれば、こちらの猊は如何かな？」

男は怯む事無く口許に笑みすら浮かべて、親指を噛むと、その血で手の甲に印を結んだ。そこに術者が呪文を口にすると、光とともに大きな猊が現れた。

褐色の毛並みに虎のような顔と闘牛のような体躯。それに太くて

鋭い牙が二本、鼻先から突き出ている。

その獣が咆哮を上げるのと同時に、織史の横から黒い影が走った。自分よりも大きな体の獣に、彼らは猛然と立ち向かったのだ。

鋭い爪が空を切る音。肉に触れ、血飛沫の上がる音。怒りに震える獣の嘶き。それらに混じりながら、織史は欄干に足を掛けた。

狙いは、術者の男、ただ一人だ。

辺りに立ち込め始めた血の匂いは、三頭の黒？ 猯のものが多く、ならば、一刻も早く彼らの手当てをする必要があると踏んだ織史は、早急に決着をつけようと踏み出したのだ。

しかし、男の前に剣を振りかざした瞬間、術者の一人が割って入る。その体を薙ぎ払うように剣を振り抜けば、術者の体は影のように揺らめいて霧散してしまう。

思わず目を見開く織史の前で、男はにやりと笑った。

しまった……っ！

身を返して剣を盾にしたものの、織史の左腕を獣の爪が掠める。二頭目を、召喚されていたのだ。

跳ね飛ばされ、水に落ちる直前で、黒？ 猯が織史の衣を引いた。

お蔭で石橋の上に足を付くことができたが、その目の前で黒？ 猯の体が獣の凶牙に掛かる。

織史はすぐさま切っ先を獣に向け、その牙を突き放しに掛かるが、鋼のように硬い牙がそれを阻んだ。

金属とぶつかりあう硬い音が響き、腕に痺れるような重圧がかかる。

指先に力をこめて抑えるが、徐々にその腕も押されてしまう。

獣の口から零れた生ぬるい涎がボタボタと衣服に滴り、鼻を突く臭いが嫌悪感を誘う。

放せっ！！

織史は叫ぶように口を開き、腹の底から発するよう言葉を出す。その刹那、織史を中心に風が湧き起こり、突風となって術者にぶつかった。

辺りに木の葉が舞い、それを切り付ける風の音が細かに響く。見れば男の作り出した竜巻の壁も、その風に押さえ込まれて、術者に反動が襲っている。

欄干に立っていた兵士達は腕で顔を覆い、線上の傷をその籠手に受けていく。

目も開けられない程に、無数の刃が飛び交っているようだ。それは霄雲や彬矢、駒羅も同じであった。

「織史殿っ」

髪や衣の裾を巻き上げながら風の中を進む織史を視線の端で捉え、霄雲は側へ寄ろうとする。しかしその腕を？公が抑えた。

「何を！？」

「少し様子を見る。…感じないか、あの娘から妙な気を…」

言われて、霄雲も感覚を走らせた。確かに不思議な気が織史から感じられる。

このような突風を生んでいる膨大な気。織史から感じるものなのに、どこか覚えのある気の間覚。

「霄雲は微かに眉を顰めた。

目の前に立つ彼女は、確かに織史のままであるのに、内側から沸き起こる怒りと哀しみに覆われたその空気は、全くの別人のようだ。つい先日、？宮が強襲された折に剣を取った彼女よりも、一層鬼気迫った雰囲気を感じている。

さらに織史は、霄雲の予想を超えた行動に出た。

右手を静かに持ち上げ、指先を払うように前へ向ける。するとその流れに従うかのように、池の水面から水飛沫が上がった。それは波というよりも、水でできた一本の刃となって、術者に襲い掛かったのだ。

それに驚いたのは霄雲だけではない。敵方の術者も、まさか織史がここまでの力を擁していたとは知らなかったのだらう。慌てて防壁の陣を組もうとするが、既に遅い。

一気に術者二人を呑み込んだ水柱は、さらに黒？猊を抑えた獣に

向かう。

最初はその表皮に阻まれた水流も、次第に威力を上げ、まるで一閃の槍のように獣の身体を貫いた。

そこからは、ほぼ一方的になるかと思われたが、中心の男は急に身を翻し、後ろに控えていた人物が陣を描くと、ふたりともその陣に吸い込まれるようにして消えてしまう。

追うように水流を飛ばしたが、収束する光に跳ね返され、雨となつて辺りに散つた。

術者が居なくなつて、織史は気が抜けたのか、その場に崩れるように膝を付いた。

額には玉の汗を浮かべて、顔色も血の気が失せている。それでも、彼女は身を奮い起こして、倒れた黒？ 猯のもとにじり寄つた。

「さて、これは急がなければならぬようだな……」

風の止んだ周囲の様子を見回しながら、？ 公は溜息混じりに言った。

織史はそんな？ 公の言葉も知らず、黒？ 猯たちに寄り添い、血の流れ出る傷口に手を当てている。指の間から滲み出るその血と温もりに震えながらも、織史は声の出ない口で彼らを呼び続けた。

しっかりと！

この光景は、嫌な記憶を甦らせる。

錆びた鼻を突く臭いと、指先に触れる生温かい液体。掌を介して伝わってくる鼓動と体温が、自分の感覚までも凌駕する。視界が揺らいで、目の前の姿が変わり行くのを許したくない。

涙を流しながらも、織史は必死に彼らの魂を繋ぎとめようと、衣を裂いて止血しようとしていた。

その様に周囲の兵士達は驚いていたが、霄雲や駒羅、彬矢たちの指示を受け、黒？ 猯の手当てを優先的に行ない始める。

いくら戦闘や騎獣として能力の高い黒？ 猯と云えど、所詮は獣だ。今は出血量が多く、気を失っているようだが、これほどの怪我を負つてしまうと、本能的に気が立って人など近付けなくなる。手当て

は困難を極める。

しかも黒？ 猊は誇り高く、弱みを晒すような種族ではない。少しでも気を抜けばこちらが跳ね飛ばされて痛手を受けるだろう。このような場合には、暴れる前に安楽死をさせる薬を打つのが常套手段である。

それでも、主からの命に従い、兵士達は治癒術師を呼び、麻酔針を打ちながら懸命に処置を施していった。

中には織史の姿に感化された者も、少なくはない。

声は聞こえずとも、彼女が黒？ 猊に寄り添い止血を行なう姿は、確かに胸を打つものがあつた。

自らも、腕や頬に傷を負っているというのに、その瞳は目の前に倒れる獣に向けられている。献身的な姿は、光さえも纏っているようであつた。

蓮の音(二)(後書き)

次回で、別の場所に移ります。

華の色（前書き）

ようやくこの方の登場回に辿り着きました。

新地にお世話になりますが、ここで織史は自分を見詰めていきます。

華の色

中庭での騒動があつた翌日、織史は追い立てられるように馬車に乗せられ、霄雲と？公とともに東宮庭から別の場所へと向かつた。

道中、霄雲から簡単な説明を受けたが、？公が「会えば分かる」などと言つて、話しを切つてしまったので、詳しくは聞くことができなかつたのだが、今度の場所は以前にも話題に上つていた、「ガデン」という場所らしい。

そこには、「カギヨ」と呼ばれる人物がおり、その人物の力を借りるというのだ。

ガデンには衛士が常駐しているから、駒羅と彬矢ともここで別れることになる。馬車に乗る直前、彼らが静かに一礼したことで、織史は何となく悟り彼らに深く頭を下げた。

織史は短い間だったが、お世話になつたふたりに何かお礼をしたと考へたが、既に馬車に揺られている状態ではできることなどないので、次に会うまでに考へておこうと心に決めた。

華殿^{がでん}

その名の通り、そこは大きな花園が広がる場所だつた。色とりどりの花々が咲き乱れ、木々も風に葉を揺らしている。どの花かは分からなかつたが、風に乗つて甘い香りが鼻を掠めた。

大きな門は瀟洒な曲線を象つた、欧州調の彫刻を思い出させ、織史は一気に別の世界に来てしまつたのかと錯覚をするほどだつた。その門を潜り、通された屋敷内もやはり？宮とも東宮庭とも趣が異なり、廊下は板張りではなく全て石造りである。室内にあつては、黒檀の窓枠や猫足の椅子、装飾の施された卓子^{テーブル}などは、思わず見入つてしまうほどに芸術的で美しかった。それでも、金や銀などの煌びやかなものが少なく、色味も控えられた調度品が整然と並べられた様は、品の良い和洋折衷の客間、といったところだろうか。

織史は霄雲に促されて席に着いた後も、このような場所の主にお世話になるなんて、とても申し訳ない気持ちになり、心苦しきでいっぱいだった。

しかし？公も霄雲も、何か別に考えるところがあるようで、「心配はいらない」と告げた後は、小声で何やら意見を言い合っていた。そこへ、小気味良い足音が廊下を歩いて来た。

「突然、何の用だ」

背後の扉が開かれ、不機嫌極まりないと言った顔で一人の人物が入って来た。

足音からも苛立ちを響かせて、織史たちの横を通り奥の上席に向かう。

顰めているがその容貌はくっきりとした大きな瞳が印象的で、日本人形のように静かな美しさを持っている。それに反して服装は男物の型を身に纏い、大股でズンズンと進む姿は男性のようにも見える。小柄ではあるが、飾り気も少なく声色も女性としては低い。前もって女性であると聞いていても、目を疑いたくなる程だ。

「先日の礼と詫びなら喜んでお聞きしよう。勿論、申し開きがあるというのなら一緒にな」

怒気を抑え、嘲笑うように言いながら席に着くと、その人物は？公を見据える。

？公は微かに溜息を漏らして視線を外した。その様子を見て取った霄雲は、代わりに口を開く。

「華園殿。此の度はお忙しいところ」

「ああ、堅苦しい挨拶はいい。今は煩い奴も居ないしな」

霄雲の口上に割って入り、華園は視線を逸らしている？公に冷めた眼を向ける。

「…でしたらお言葉に甘えて…。早速ですが、今回はお願いしたいことがあって参りました」

「またか」

露骨に顔を顰めて頬杖をつく華園に、もう一度霄雲は言葉を馳せ

る。

「お断りされることを承知でお願い申し上げます。どうかお聞き入れ下さいませんか」

「私が断ると思うのなら、他を当たれば良いだろう」

「お前にしか頼めぬと思つたからこうして出向いたのだ。話ぐらい黙つて聞けぬのか」

「随分と横柄な態度で、よく人に頼み事ができるものだな。呆れて物も言えん」

「ふん。お前こそ、よくその了見の狭さで子守が務まつたな」

「宮様を愚弄する言葉は許さんつ！」

「お待ち下さい！」

？公の言葉に憤慨し、立ち上がった華園を霄雲が間に入って引き止める。

「非礼は謹んでお詫び申し上げます。今はどうか、お怒りをお鎮め下さい。何卒、何卒お話しだけでもお聞き頂きたい」

霄雲の必死の想いが通じたのか、華園は固く握り締めた拳を膝に置いて腰を下ろした。

「良いだろう。話ぐらいは聞いてやる」

「ありがとうございます。お心遣いに感謝致します」

安堵の溜息を吐き、霄雲は頭を下げる。それに倣い、織史もまた頭を下げる。

この人物が一体どんな人物なのかは知らないが、今はその力を得られなければならぬ。それも自分の所為で。

未だ声の出ないまま、その上足手まといで災いばかりを呼んでしまふ自分でも、頭を下げることにだけはできる。ましてや自分のことで霄雲が礼を尽くしているのに、当人がしないわけにはいかない。以前ならば、自分一人で何とかできると高を括り、人に頼むことを嫌い頭を下げるなどという行動には抵抗があつた。しかし今は、この場を乗り切るためなら頭の二つや二つ、下げることさえ苦にもならない。

織史は心の中で呟いた。

どうか、力を貸して下さい

「頭を下げるのは後にしたらどうだ。私はまだ、了解した訳ではないのだからな。それで、一体用件は何だ？」

「お願いしたいというのは、この方を匿って頂きたいのです」

「匿う？」

怪訝に眉を顰めて、華園は織史をチラリと見る。

「この娘をか？」

「そうです。元は叶君の屋敷に居りましたが、先日、賊と思われる輩に襲われまして……」

「叶殿の屋敷に？」

「はい。それでその者達の話に抛りますと、どうやらこの方を連れてくるように頼まれたと申しまして……。幸い、大した被害は出なかつたのですが、その後も頻繁に騒動が続きまして、終いには妖獣までもがやって来るようになりまして、流石に叶君の元では暮らすことが困難になってしまったのです」

「東宮庭は駄目なのか？」

「一度は僕の宮でお預かり致しましたが、相手に場所が知れてしまい、力が及びませんでした」

机の上で握り締められた霄雲の手が、小刻みに震えている。

「……どれほどの期間が必要だ？」

重い沈黙を、華園の声が破った。

織史と霄雲が顔を上げると、華園は窓の外に視線を注いで居る。

「私の一存でことを決めるのには限りがある。ましてや、今の私は知つての通り仕事を多く抱えているのでな」

華園の言葉に、霄雲は戸惑い気味に顔を伏せる。

「十日ほどあれば……」

「十日の間に、犯人を捕らえてこの娘を必ず迎えに来るのだな？」

「はい。十日の間に必ず、糸口を見付けます」

鋭く、厳しく睨み据えてくる華園の眼に、霄雲ははっきりと言い

放ち、真摯の眼差しで答える。

すると口許を微かに緩めて華園は手元にあつた呼び鈴を鳴らした。その音が鳴り止まぬ内に、扉が開き一人の女性が姿を見せる。

「セイヨウ。部屋を用意してくれ」

「かしこまりました」

「それと、宮様にリヨギとセンブをお返し頂くよう、お伝えしてくれ」

「お急ぎですか？」

「なるべく早く頼む」

「かしこまりました。では直ちに」

セイヨウが一礼して下がろうとすると、その後ろから慌しい足音が急速に近付いて来た。

「華園殿。賊が現れました！」

「早速来たか」

華園はポツリと呟きながら立ち上がり、来た時と同様に悠然とした態度のまま大股で廊下に歩み出る。

「私が出る。門士達に手を出さぬよう伝える」

明瞭な、良く徹った声で華園は応える。どこか愉しげで昂る気持ちを抑えているような、そんな声音だった。

「此処をどこか知つての狼藉か。騎乗したままの者を通す訳には行かぬ。直ちに叩頭礼を尽くし、許印を示すならよし。さもなければ早急にご退去願おう」

居丈高に門前に立ち並ぶ男達に向かい、華園は臆することなく言い放った。

言葉は儀礼に則つたものではあるが、男達に通じるとは思っていない雰囲気が声に滲み出ている。現に、華園の手には既に薙刀が握られている。

「此処で匿おうとしている娘を出しさえすれば、俺たちは直ぐにで

も立ち去つてやるさ。そつちこそさつさと娘を出しな」

「娘？ 言葉を返すようだが、此処に勤める娘の中でお前達に差し出してやれるような者は一人も居ない」

「けつ。俺達が探しているのは女官じゃねえ。黒髪の、先頃まで東に居た女だ」

「では聞くが。仮に居たとして、その娘はお前達の何だ？ 差し出せと言う理由を言え」

「娘は俺達のものじゃねえ。然る御方の婢だ。仕事を放り投げて逃げ出した娘を、俺達が連れ戻すように言われているんだ。これ以上の理由はねえだろ」

「ほう……。つまりお前達は飽くまで正当な理由がある・そう言いたいのだな？」

「話しが判るじゃねえか。ならさつさと娘を出しな」

「しかし、そのような身の上の娘は、残念ながらまだ来ておらん」

「なんだと!？」

「第一、この地に娘一人が逃げて来る筈が無いだろう。東の地は隈なく探したのか？ でなければ南に逃げたと考えるのが上策。それとも、この地に来ているといふ確固たる証拠でもあるのだろうか？」

華園は悪辣に笑つて、男達を見返す。言葉に詰まつた男達は顔を見合わせて何やら相談し始めるが、それも時間の問題だった。

「納得の行く答えが出ないとなれば、門より先に踏み込むことは許せぬ。即刻立ち去れ」

最後通告とも言える華園の言葉が響いた時、一人の男が声を上げた。

「おい、娘だつ」

門内に居た、織史の姿に気付いた男達が一斉に視線を走らせる。

その様子に、小さく華園は舌打ちを漏らす。

自分の所為で花の庭を荒らされてはいけないと、織史は華園の後を追つて庭に出ていたのである。しかしそう考えたが故の行動は、

どうやら裏目に出てしまったようだ。

「娘を捕らえろっ!」

男達は直ぐ様武器を手に取り、門内に向かって走り出す。しかし

「門内への侵入は許さぬと言った筈だ」

静かな声はその行動を制止させた。

すつと細められた鋭い視線が走り、細腕に見合わぬ強力で馬の脚を払われて、乗っていた男の体は宙を舞う。その様子を目にした他の者達が足を止めたのだ。

「あの娘は我が客人。お前達の探している娘とは別人だ」

「な、なんだと…?!」

「何度も言わせるな。お前達の探す娘は此処には居ない。さっさと去れ」

「目の前に娘が居るといふのに、そう簡単に引き下がれるかっ!

おい、一斉に掛かるぞ!」

「…警告はした。それでも禁を犯すといふのなら、実力を持って排除させて頂く」

華園は薙刀を握り替え、向かって来る男達に刃を向けた。

多勢に無勢。辺りの門士達は援護に入るところか、一步引いて門脇で槍を構えているだけだ。いくら華園でもこの人数を相手に立ち向かうのは不利だ。

織史は居ても立ってもいられず、華園の元へ向かおうとした。助けにならないとしても、男達の目を引くことさえできれば、門外に男達を引き止めておくことはできる。そうすれば、少なくとも花の庭を傷付ける事だけは防げる筈だ。

「お待ち下さい」

静かな制止の声と共に腕が織史の前に差し出される。

「あの程度の賊に、助けなど必要ありません」

見上げると先刻セイヨウと呼ばれていた女性と同じ顔がそこにあった。

しかし服装はこちらの方が戦闘的だ。左腕には手袋で隠されているが籠手をしているし、右腿には折棍棒を装備している。袴姿であったセイヨウとはどこか違って見える。

「圍土の名を甘く見るなよ」

華園は口許に笑みを浮かべながら、掛かってくる男達の剣や槍を払い返していく。その様は花卉が風に舞うように、次から次へと武器が宙に飛び上がり、そして地面に突き刺さった。

武器を失い、素手で飛び掛ろうとする者も居たが、薙刀の峰で打ち払われて呻き声を上げた。遂には、華園の鮮やかな手並みに戦意を喪失し、一人、二人と逃げ帰り始める始末。辺りには転がる武器と動けなくなつた男達だけが残された。

一方的に終わってしまった闘いに、華園は退屈そうに溜息を一つ吐いた。

「不甲斐ない奴らだ…。レイヨウ、後は任せる」

「かしこまりました」

華園に答えたのは織史の横に立っていた女性だった。

長い髪を揺らし、倒れている男達に向かうレイヨウと入れ替えに、霄雲が織史の元に駆け寄る。

「ご無事ですか、織史殿。お怪我はありませんか？」

織史がコクリと頷くと、霄雲は胸を撫で下ろして安堵の息を吐く。その後ろから華園が歩み寄り、口を開いた。

「ったく…。そんなに心配なら手でも繋いで、部屋で大人しくして居て欲しかったな」

「す、すみません。ですが、華園殿を思つての行動ですから、どうぞそつお怒りにならないで下さい」

「それはどうも。しかし、あまり無謀な行動は控えて頂くぞ、姫君」
織史は自分の行動の浅はかさに恥ずかしくなつて、頭を下げる。

確かに、自ら姿を見せたのは無謀だった。自分が見つからなければ、男達はあのまま立ち去っていたかもしれないのだから。

「おい霄雲。我々は直ぐに宮へ帰るぞ」

「どうしたのですか、？公殿。突然…」

「調べたいことがある」

「それは賢明だな」

「…娘のことは頼んだぞ」

「謹んでお受けしよう。十日後を楽しみにして居る」

衣服の乱れを整えて、後から数人の衛士に囲まれてやって来た？
公に華園は嫣然と微笑んで言った。

華の色（後書き）

ようやく華園を登場させることができ何よりです……。

彼女の話は別章で構成されつつあるので、機会がございましたら記載したいと思います。

それまでお付き合い頂ければ幸いです。

銀色の枝葉

「こちらが、貴女様のお部屋でございます」

惺永せいように案内され、織史は大きな扉の前に立った。

花のような紋様が彫られたその扉は、左右に立てられた松明によつて上部が影に覆われ、ただでさえ荘厳な様相が迫力を際立たせている。

「惺永殿。先日の文書のことでお話しがあるのですが、宜しいですか」

「わかりました。今参ります」

突然掛けられた声に、惺永は手にしていた燈籠を声のした方向に向けてそう応えた。

備え付けられた照明の仄明かりに照らし出されていたその人物は、
「公を“セイシンコウ”と呼んだ男性で、自分達を最初に案内してくれた人物でもあった。

三十代前半と言った面立ちだが、毅然とした態度と歳に似合わぬ威厳と気迫を放っていて、少々近寄り難さを与えている。

「お部屋の中はご自由にされて結構ですが、外に出られる時やご用のある際には枕元の鉦かねを三回鳴らして下さい。それでは、私はこれで失礼致します」

惺永は礼を済ますと足早に廊下を戻り、男性と共に何やら難しげな話をしながら奥へと消えて行った。

織史は燈籠の明かりが見えなくなると再び目の前の背の高い扉を仰ぎ、気を取り直すようにして取っ手に手を掛けた。

重い扉を押し開けると、中は廊下と対するように明るく、穏やかな光に包まれていた。

「おや、客人か？」

突然誰も居ない筈の室内から声がして、織史はビクリと身を震わせた。

氷のように澄んだ声音は女性のようだったが、聞き覚えは無い。織史は辺りを見回した。

声の主は意外と早く目に付き、寝台から少し離れた長椅子に、その人物は寝そべって居た。

青灰色の長い髪は流れる水のように肩や椅子に掛かり、絹糸のような輝きを放っている。濃紺の衣から伸びた白い手には朱色の杯が乗っていた。

「そんなところに突っ立って居ないで、こちらに来てお前も飲め」その人物はそう言って織史を手招きし、重ね置かれていた杯を用意すると徳利から酒を注いだ。

私、お酒は飲めないんだけど…

そう思いながらも、織史は足を進めて手前の一人用の椅子に腰を下ろした。

「その服装からすると、東の者か？」

差し出された杯を受け取りながら、織史は首を横に振る。それを見て目の前の人物は眉を顰めた。

「東から来たのではないのか？」

これにもまた、首を振り返す。東の出身ではないが東の国から来たのは確かなのだ。

どう答えようかと戸惑っていると、その人物は椅子に座り直して織史を見る。

「まあ、そんなことはどうでも良いがな。さあ、飲め」

織史に微笑みながら、自分の杯を呷る。それに倣って杯に唇を寄せると、口の中に酒の味が広がった。続いてほんのりと甘い果実の味が舌の上で踊る。けれどやはり酒の香りに再び口を付けることは気が引けた。

そこへ突然、背後の扉をノックする音が響いた。

「失礼するぞ」

声と共に部屋に入って来たのは、華園だ。華園は室内を見て直ぐに眉を顰めた。

「どうして此処にキツネが居るんだ」

後ろ手に扉を閉めると、相変わらずの大腿で側まで歩み寄り、長椅子の上の人物にそう訊ねた。そして、問いただすような強い視線を注ぐ。

「入って来て早々にそのような顔をするな、タクミ」

「何故ココに居るのかと訊いているんだ」

「こやつのは気にせず、さあもう一杯飲め」

華圀の怒りを他所に、織史のまだ酒の残っている杯に徳利を寄せ
る。

「未成年に酒を勧めるな」

言つて織史の杯を卓に置き、華圀はキツネを睨め付ける。そして聞き慣れた言葉に、織史は顔を上げた。

自分は、華圀に歳を話しただろうか。それよりも、この世界でも成年という概念があるのだろうか。

「そなたも律儀に酒を受けんで良い」

「まったく…。酒の席を濁すことほど無粋なものはないぞ。一体何の用だ、タクミ」

溜息混じりでそう訊ねると、華圀は思い出したように織史を見返し、手にしていた布袋を開いた。

「霄雲から話を聞いた。文字は書けるだろうか？」

確かめるように聞かれ、織史は俯くように頷いた。

それを見てから、華圀は織史の前に書き物の道具を並べていく。

細い竹製の小筆から半紙のような紙まで一通り揃え終わると、墨壺の蓋を外す。

「名は、何と申すのだ？」

言われて、織史は筆を取った。

織史。

「オリフミという字はこう書くのか。叶殿に名付けられたと聞いたから、てっきり香りの字かと思っていたが…。まさか薫物姫を引用するとはな。流石だ」

「タキモノヒメとは何だ？」

「“薫物姫”と書き、織姫星の方が分かり易いな。以前話しただろう、七夕の主役だ」

一瞬、織史は耳を疑った。今、華園は七夕と言った。自分の居た世界の行事を、華園は知っているのか。それとも同じ風習がこちらにもあるのだろうか。

織史は華園の顔をまじまじと見入ってしまう。そんな織史の視線に気付き、華園は喉の奥で笑う。

「そんなに驚かなくとも良い。私も色々あつて……。ああ、私の名はリヨウドウ、タクミと言うのだが、職業柄皆からはカギヨと呼ばれている」

凌藤 薫水 華園。

珍しい名だと思う。こちらの世界ではあまり聞かなかった名だとそれに、凌藤というのは姓だろう。こうして挨拶されたのはこちらにきてから初めてだ。霄雲に名の字は教えてもらったが、姓を名乗られたことは無い。

「それから、そなたの警護をする者を紹介しよう」

華園 薫水はそう言つと、扉まで歩いて行き引き開けた。するとその向こうで男性の驚き、慌てた声上がる。それに動じることなく、薫水は「お勤めご苦労」と述べた。

まるでタイミングを見計らつたような薫水の動きに、織史も首を傾げる。

なぜ、人が来ると判つたんだろう

そんな織史の心内をよそに、薫水は二人の下に戻り入り口に向かって声を掛ける。

「二人とも、こちらへ来なさい」

薫水の言葉を受けて扉の前に佇んでいた女性と男性が、織史たちの方へ歩いて来る。

髪に牡丹の花を飾つた女性は、まるで天女のように優雅で、舞うように軽やかな仕草で歩く。紅玉のような丸い瞳は愛らしく、しな

やかに伸びた手足は白く妖艶な印象を与えた。

舞姫のような女性に対し、男性はギリリと光る瞳が獐猛な獣のよう
うで、遅しい腕と共に見る者を圧倒させる。装飾物を幾つか身に付
けているものの、華美というよりも屈強さを後押しするものだ。

二人は薫水の横に立ち並ぶと、慣れた様子で膝を折る。

女性は織史と目が合うと、花が開くよりも艶やかに微笑みを返し
た。

「突然呼び立ててすまなかった。二人に、こちらの姫君の護衛を頼
みたいのだ」

「御意」

応えたのは男性の声だ。薫水はそれに軽く微笑む。

「名は織史殿だ。今は口が利けないが、言葉は解る」

「ご病気で？」

「いや、何者かに呪をかけられているらしい。そして今も、命を狙
われているそうだ」

「それは大層お気の毒でございますこと…」

「だからこそ、二人に頼みたい」

女性は話を聞き、顔を曇らせた。そして静かに織史の前へ進み、
その手を取る。

「貴女様のことは、私たちがお守りいたします。どうぞご安心下さ
いませ」

近くで微笑まれると、それは本当に天女の笑顔のようで眩しく感
じられ、織史はその表情にドギマギとしながら頷き返した。同性だ
けれど、思わず見惚れてしまう。

「こちらがセンプ。そして」

「某はリヨギと申します。この身に代えましても貴殿をお守り致し
ます。ご安心召されよ」

呂伎は蝉舞と同じ様に織史の手を取り、額に当てた。

繋がる花（一）

窓際の椅子に腰掛けて、織史は目の前に広がる花の咲き乱れる様子を眺めていた。

華殿にはその名に相応しい花々に飾られた庭園が幾つもあり、この一室はその内のひとつである奥の庭園に向かって、半円形に突き出す構造のテラスのような場所だった。天井から足元まである大きな硝子窓らしい透明な壁面が、突き出した半円を描いているため、太陽の光と花の香りが踊る室内でありながら、屋外の空間をも併せ持つ不思議な部屋である。

惺永に案内された場所の中でも、心を和ませるこの空間が一番気に入っている。

ここに来てから三日目。

昨日も昼過ぎには、僅かな時間であったものの、薫水たちこの場でお茶を飲んで過ごした。

ぼんやりと時の流れて行く様を感じる孤独感にも似た感覚に、織史は思わず溜め息を零してしまう。

叶君の世話になっていた？宮、霄雲の庇護下にあった東宮庭、どちらでも自分にできることは少なく、無気力であったがゆえに、時間を持て余すようなことがなかった。

何よりも、霄雲を筆頭に薫衣、桃鈴、彬矢、駒羅といった面々が、織史の側に常に控えていたので、これほどの孤独感を味わうことがなかった、というのが正直なところだ。

甘えて、いたんだ……。

改めて、彼らの存在を感じて、織史は己の身を省みた。

どうして、自分は……

深く眉間に皺を刻んで、何度目かの溜め息が口を突く。

「相変わらず沈んだ顔をしているな。花が萎おしれてしまうぞ」「不意に背後から声を掛けられて振り返ると、青灰色の髪を滝のよ

うに流す佳人が佇んでいた。

最初こそ「氷のよう」に感じた声も、聞き慣れてくると澄んだ中に親しみを覚えて、織史は小さく微笑みを返す。白く冷笑を浮かべたようにすました顔は、微かな心配の色も浮かべてこちらを見返した。

「こんな天気にも、外に出ぬからそのような顔になる。行くぞ」

薫水から「キツネ」と呼ばれているその人物は、いつもふと現れずにはこうして織史をどこかに連れ出そうとする。

片手には白磁の酒瓶を持っており、歩く度に微かな音が立つので、懐に杯が入っていることも明らかだ。けれど、決して織史を酒の友にさせるために連れ出しているわけではないことを、織史は知っていた。

「：そんな、何もかもを察しては、酒にも酔えなくなるぞ」

少し笑った口許が、織史に向けられた。

顔を上げると、キツネの手が頭を撫でて、そのまま腕を引かれて庭に続く硝子戸を一緒にくぐる。

辿り着いたのは噴水を囲む庭の石階段だ。段差の小さな階かたが五段続き、その下には芝桜が広がっている。

キツネはそこに座るよう織史を促して、自分も腰を降ろした。

風を受けて青灰色の髪を風に遊ばせ、噴水を眺めたのも束の間、早速酒瓶を傾けている。

「なんだか、不思議な人……。」

正直な感想だった。

出逢ってから、そう時間が経っている訳ではないのに、キツネはそういう壁を作らせない人物だ。

まるで風。すっと入って来て、嫌な気持ちさせない力を持っている。

それに……

「こちらの世界も、そう変わらぬであろう？」

キツネは一口飲んで、吐息に紛れて訊ねた。

織史は、素直にこくりと頷く。だが、キツネから視線を外すことはしない。

「食事も人も、根本的な部分が似通っておれば、慣れるのも早いものだ」

織史を安心させるようにやさしい声音であったが、内容よりも、キツネにそう言わせしめることの方が、気になる。

どうやらキツネも華園も、織史が別の世界から来たことを知っているようなのである。

それでいながら、？公のように危険視することもなく、むしろそれが当然であるかのように接してくるから、織史は不思議でたまらなかつた。せめて、少しくらい疑うような、驚く素振りを見せてくれた方が、安心できるといふものだ。

「驚いておらぬのがそんなに不思議か？ 薫水アマツを拾った時は、少しは驚いたがな」

こちらの心を読んだように、キツネは薄く笑って織史を一瞥すると、また杯を口に寄せた。

「語弊のある言い方をするな、キツネ」

呆れを含んだ声が聞こえて、織史はキツネの肩越しに声の主を見た。

石畳を進んで来る薫水の顔には微かな汗が浮かんでいる。服装もいつもより軽装で、左腕には上着らしき衣を掛けているから、鍛錬の後だろうか。

「私が、お前の室に宛がわれたただけだろ」

「その言い方も妙だと思うが……お前がそれで良いと言うのなら、構わぬよ」

キツネの考えには織史も同感だった。おそらく、薫水の言葉に深い意味はないだろうが、まるで自分からキツネの部屋へ訪れたような……艶めいた邪推を起こしそうな言い回しだからだ。

しかし、ふたりの間にそのような空気がないことを知っている織史は、どのように薫水がこちらで過ごしてきたのかが気になった。

その視線に気付いた薫水は、織史の横に腰を降ろすと目を細めて口を開いた。

「大した話ではないよ。同室になったキツネと話しをして、意気投合したからここまで同行してもらった。私の目的が何なのか、私自身も分からん状態であったのを、キツネが知恵を貸してくれたんだ」「子どものくせに態度が大きくて……度胸が据わっていて、女だと言われた時には目を疑ったがな」

「お蔭で怪しまれることも少なかっただろ」

「そうそう。南からの道中も、楽をできたよ」

南？

「ああ。私たちは最初、南の地で出会ったんだ。だから、朱姫殿も存じているよ」

「今は朱妃となったのだろ、あのはねっ返り姫は」

「そうだったな。御姿が変わられないから、どうも妙な気がする」

「お前には名で呼ばせているからな。あの姫も御縁のあることだよ」「それには私も驚く。こんな短時間にふたつの縁とは、やはり希代の巫女と呼ばれるだけのことはある」

織史は「朱妃」という言葉に聞き覚えがあった。

自分の声が出ないことを、呪が掛けられていると見抜いた叶君が呼んだ、赤い髪と紅い瞳を持った女性がそう呼ばれていた。

そして彼女は、織史の体内に潜められていた三頭の黒？ 猯を取り出した人物でもある。

薫水は初めて会った時にも叶君のことを知っている風であったから、もしかすると三人は旧知の間柄なのだろうか。

しかし、そこまで考えて行き当たるのは薫水の言った「色々あって」の内容だ。

察するに、薫水も織史と同様に向こうの世界を知っている様子で、むしろ同郷の人間のように思える。

となると、彼女はどのようにしてこちらに来たのだろうか。

自分は覚えていないが、薫水はそれらを知って、こちらに居るよ

うな、そんな気がした。

「ん？ ああ、そなたにはまだ話したことがなかったか……。丁度好い。今日はこの後に時間がある。お茶でも飲みながら、そなたの疑問を解いてやろう」

思案に眉を潜めていた織史に、薫水はにっこりと笑いその眉間を人差し指で突くと、立ち上がり手を差し出した。

繋がる花（二）

「さて。そなたはまだ声が戻らぬから、気になることがあったらこの紙に書いて、私に示してくれ」

薫水は織史を椅子に座らせると、卓に白い紙と筆を置いた。

庭園に臨むテラスに戻ってきた織史は、聞きたいことなら幾つかあると、指先をうずうずさせながらその言葉に頷き返す。

途中で惺永と会い、お茶を用意するよう言付けた薫水は、卓を挟んだ向かい側に腰掛け、何から話そうかと目を天上に向ける。

「順に話してやれば良いだろう。お前が知っていることはそれくらいだからな」

薫水の後ろから、長椅子の上で寛いだ格好のキツネが言った。

「確かに。じゃあ先ず、私が最初に降り立ったのは、朱妃殿の水盤の上だった」

「……もう少し前の事から方が、良いと思うぞ」

「え、そうか？ その前は、体育の授業で、バスケットをしていた」

その言葉を聞いて、織史は早速筆を走らせた。

『やっぱり、華園殿は日本にいたんですね？』

「そうだ。それで、外に出そうになったボールを追いかけて、跳び付いたところまでは良かったんだが、自分まで窓から飛び出してしまった。うちの高校は体育館が二階建ての上だったから、これはヤバイかもって流石に思ったよ」

薫水はその時のことを思い出したように、神妙な面持ちで言った。しかし微かに口許は緩んでいて、事態を重く受け止めていないように見える。

「ああ。勘違いしないでくれ。私は別に、死ぬのが恐くなかったのではなく、むしろ死にたくななくて、どうしたら生きられるか、脳細胞総動員で考えたよ。時間にすればほんの僅かな間だろうに、やたらとスローだった。それに、私はたった数秒で生死を分けられ

ることが無性に許せなくて、もがいた。そしたらその時、目の前に手が差し出されたのさ。勿論、直ぐに？んだ。何も考えず、まさに薫にも縋る思いだったよ。今でもその感触は忘れていない」

にっこりと微笑んだ薫水の頬に、うつすらと朱が走る。

それが本当に嬉しかったのだと織史にも分かったが、その喜びを解ることはできそうにない。

まだ倦怠感が拭えない自分では、解った気になるのが精々だった。

「まあ、それで。気付いたら朱姫殿の水盤の上に転がった」

『シユキ殿？』

「朱妃殿は、当時まだ姫君だったから、そう呼ばれていたのだ。ご婚約はされていたらしいが、妃の位を与えられたのは最近で、朱妃殿と呼ばれるようになったんだよ」

「同一人物ということだ。現在、“朱姫”はいないからな」

「紙を見ている訳でもないのに、よく織史の疑問が分かるな、キツネ」

「お前の話から察しているだけだ」

「その察しの良さは、出会った頃から変わらないな……。すまない、話を戻そう。それで私は、朱姫殿と叶君に話を聞いて、ここが日本ではないこと、自分の世界とは異なることを知った」

「なんだ、あの事は話さぬのか？」

「今は必要ないだろう。えっと…それで、一先ず部屋に入れられたんだが、そこでキツネと出会った。しかもキツネは、一目見て私を異なる世界の者だと見破ったんだ」

「纏う気が尋常ではなかったからな。それで、水盤に降った娘の話を聞いたのさ」

『まとう、気？』

「それに関しては、私もあまり詳しくないので、霄雲あたり聞いてみるといい。喜んで教えてくれると思うぞ」

含みのある笑いを向けて、薫水は話を続けた。

「まあそれで、キツネと会った私はその後、自分を助けた“手”の

持ち主を探すために南を出ることにした。勿論、私はこの世界に来たばかりだし、右も左も分からなかったのだが、その点はキツネが教えてくれた。私は気になることを口にし続けて、道を辿ったんだ。『気になること?』

「私は、夢で何度かその手の持ち主に会っていたんだ。こちらに来てからはその回数が減ってしまったけど、導き手は無責任ではないのだよ。そなたにも、その“導き手”がいると思うのだが、心当たりはあるか?」

織史は静かに頷いた。

おそらく、自分の導き手は“声”の主だろう。

いつだったか、自分がこちらの世界に呼んだようなことを話していたことがあった。

それをすんなりと認めていたのは、どうでもいいと思っていたからではなく、織史が一度聞いた気がしたからだ、今なら思う。

おそらく自分は、一度その“導き手”に会っている気がするのだ。「思うところがあるのであれば、それを大切にしろ。必ず、辿り着くためには持ち続けることが肝要だ」

「そうだな。薫水が途中でどうでも良いと投げ出していたならば、宮様は今も何処かで泣いておっただろうからな」

『宮様?』

「ああ。私の“導き手”は宮様だったんだ。宮様は、この華殿を所有されておられる方で、機会があれば紹介してやりたいところだが、今はお忙しい身でな。どこぞの馬鹿公が手当たり次第に雷雲を遣ったものだから、その後処理をされておられるのだ」

「そう言っただけでやるな。奴はあれで北との国境問題を黙らせたのだ。一悶着起きる前に小さく済んで良かったと、叶君や朱妃からも宮様に嘆願書が上がったのだから?」

「だがお蔭でこちらばかりが矢面に立っているのだぞ。それでよくのうのうと顔を出せたものだ」

「はは。しかしその流れで此処にお前がいたからこそ、この娘とも

面会が叶ったのだろ？」

「それは結果論だ。第一、私が此処にいるのは常のことだ」

「しかし謹慎中であるがために、こうして時間もある訳だが？」

「……その点は認めようじゃないか。しかし……」

「失礼致します。薫水殿」

突然扉の向こうから声が掛けられて、薫水は話を止めると扉に向かって行く。

声を掛けたのは怜永で、ふたりは扉の向こうで二言三言、言葉を交わすと薫水は蝉舞を伴って戻ってきた。

「すまない、少し席を外す。お茶は蝉舞と過ごしてくれ」

「ご希望頂ければ、歌も歌いますわ」

髪に飾った牡丹の花を揺らし、ルビーの輝きを放つ紅い目を笑みの形に細めて蝉舞がお辞儀をした。

その向こうで、キツネが長椅子から立ち上がり薫水の側に寄る。

「呂伎はどうした？」

「今は外に居る。キツネ、お前にも話がある」

「……分かった」

溜め息混じりにキツネは返して、一足先に廊下に向かい始めた。

それを横目に、薫水は織史に向き直ると真っ直ぐな視線を注いだ。

「また話をしよう。私に答えられることは、是非聞いて欲しいからな」

『ありがとうございます。華園殿』

「そうそう。私のことは薫水で良いよ。私も、織史と今は呼ぶ」

小さく笑って、薫水は部屋を後にした。

織史はその背を見送って、今度は蝉舞から茶の淹れ方を教わりながら時間を過ごした。

夢

「薫水殿」

庭に突き出る形で造らせた濡れ縁に腰掛けて、傍らの卓に並べられた花簪を手に取り眺めていた薫水のもとに、花が開くように語ると云われた蝉舞の聲が、やや沈んだ様子で響いた。

「どうした、織史に付いて部屋に向かったのではなかったのか？
それとも先客が居たか？」

「…ご推測の通りではございましたが。それよりも、お話ししたいことがあるのです。姫君のことで」

「織史のこと？」

「はい…。やはり、薫水殿には伝えておくべきかと思ひまして」

「解った。まあ、お前も座れ。蝉舞」

薫水は持っていた花簪を置くと、椅子に座り直し蝉舞に席を勧めた。

「失礼致します」

「で、話しとは何だ？ 長くかかるようならお茶でも用意するが？」

「いえ、それは…私の話を聞いてから、お考えいただけますか…」

薫水はやけに沈んだ様子の蝉舞を訝しげに見る。その視線を受けながら、蝉舞はきつとお茶を用意されても、自分の話を聞いたら無駄になつてしまう気がしていた。

「薫水殿。私が香りの調合で催眠をもたらすことができることは、以前お話し致しましたわね」

「ああ、知っている。だから織史の護衛をそなたにも頼んだんだ」

「では薫水殿も、姫君の眠れぬ理由をご存知でしたのですね」

「理由？ いや、私は霄雲殿たちから聞いた程度だから、詳しくは

…」

「ならば、皆様はご存知ではなかったのですか…」

「蝉舞。そなた、何か見たのか？」

「…このようなこと、お話しても良いのか…」

「蝉舞。私の世界では、催眠療法と言つて、眠りに誘つことで深層心理　普段は心の奥底で眠っているものを呼び覚まし、精神面での治療に用いることがある。それは、自分を守るために封印されたかつての記憶であつたり、本人の預かり知らない別の人格であつたりするらしい。詳しいことは知らないが、そなたの芳香香を利用すればそれが可能であるだろう、と話を聞いたときに私は思った。だから、その香を用いたときに偶然にも織史の深層心理に触れたのだと言われても、私は信じる」

薫水は真つ直ぐな視線で蝉舞を見詰める。その奥から覗く光に、蝉舞はぞくりと身震いした。

おそらく、薫水は始めからそのつもりで織史に自分を付けたのだ。“偶然”にも織史の心の内に触れる為に。

我が主ながら恐ろしいと思ひながら、その眼に、蝉舞は紅を引いた唇を話すために動かした。

「どうやら、姫君は身近な者を眼の前で亡くされておいでです」

「身近な者…？　家族か？」

「いえ、それとも少し違った様子でございます……。 “サイ” と呼んでおられたようで。唇の動きだけですから、音の確かは分かりませんが…自分のせいで亡くなったとも…。そしてその者と、こちらで再会されている様子なのです」

「ちよつと待て。それはつまり、向こうで亡くなった“サイ”がこちらで生きていた、と…？」

「そのようでございます。『また失いたくはない』と唇を動かされて、涙を流しておいででした…」

有り得ない話だと薫水は思う。

この世界は　確かに自分達の暮らしていた世界ではないのだが死者の世界というわけではない筈だ。

たとえ自分が向こうで死してこちらに来たのだとしたら、自分のように生前の記憶が有る者が無に等しいというのはおかしい。それ

に世界の在り方が全く違う。それを、薫水はこれまでの生活で実感している。

「眼の前で」と蝉舞が口にしていたから、それなりの様子を織史が見せたということだ。ならば自分たちのようにこちらへ来たとも考え難い。第一、そうならば何故、今一緒に居ないのか。会っているのならなお更だ。

では、似た者と会ったのだろうか。

けれど霄雲たちから聞いた話によれば、織史を見付けたのは叶君であり、この世界に戸惑つてもいたらしい。とするとこちらへ来た時に 叶君に見付けられる前にその人物と会っていたということだ。

そう言えば、と薫水は霄雲の話思い出す。

「確か織史は、呪術を掛けられていたと聞いた。声を奪われ、その身に獣を埋め込まれていたらしい。もしかすると、その“サイ”とやらがその件に関わっていそうだな」

薫水が蝉舞から報告を受けている頃、織史は夢の中に佇んでいた。青い空。白いワンピースと風に揺れる黒髪。振られる白い掌。側に行きたいと思いつながら、陽光が眩しくて、立ち止まり目を細める。

その瞬間に、目の前が真っ赤に染まる。

悲しくて哀しくて逃れたくて許されたくて、名を呼んでいた。

返されることのない問い掛け。

謝ることさえ、傲慢な気がする。それでも手を伸ばしてしまう自分が、愚かしくて涙が出る。

ふと、名前を呼ばれて後ろを向くと、人影が見えた。

何故かその人影が自分を呼んでいるように思えて、織史は一步踏み出す。

途端に黒い衣が目の前を覆って、身体を拘束される。

もがこうとするが、身体は動かず、泥に纏わり付かれていくようだ。

息苦しくて、口を開けると、何かを押し込まれる。

身の内を逆流するそれが、酷く恐ろしいものだという感覚が走って、織史は必死に振り払おうとした。

…っ！

目を開けると、白い薄布の向こうに天井が見えた。

何度かゆつくりと瞬きをして、呼吸を整える。

ここが華殿で、自分に宛がわれた一室で、その寝台の中に自分がいることを、思い出してくる。

じつとりと汗ばんだ首筋に手を伸ばし、指先で咽元を撫でる。

声はまだ出ない。

でも、食道に流し込まれた“何か”の感触が残っていて、ぞわりと肌が粟立つ。

そして思い出す。

流し込まれたのは、あの黒？ 猯の仔どもだったことを。

しかしあの人影を思い出そうとすると、頭痛とともに身体から力が抜けていく。

再び襲う眩暈に似た睡魔に飲み込まれながら、織史は小さく唇を動かした。

サイ……。

閉じた瞼の上を、涼やかな花の香りが掠めて行った。

花嫁の物語（前書き）

世界観とかその他諸々・・・。

説明的部分で、ダラダラっとしてしまいましたが、
少々お付き合いください。

花嫁の物語

翌朝、織史は微熱を含んだ面持ちで、心配した蝉舞は自室で休むように勧めた。

しかしあまり大事にしなくなかった織史は、いつものテラスでゆつくりと過ごすことにした。

蝉舞は仕方ないと言うように溜め息を吐いていたが、滋養のあるお茶を用意すると言って微笑み、部屋を後にした。

一人になった織史は、ぼんやりと外を眺めながら昨夜の夢を思い出す。

もう臆にしか思い出せないけれど、確かな記憶にある部分もある。それはつまり、自分が経験した事柄と重なるということだ。

自分に、“忘れている事”があるのだと自覚して、眉根が寄る。そこへ

「気分が優れないと聞いたが、調子はどうだ？」

窓の向こうから顔を出したのは、この華殿の主・薫水であった。

驚きに目を丸くしていると、薫水は庭に続く硝子戸の入り口から室内に入り、織史の前に腰を降ろした。

「まあ、薫水殿。ご婦人の元を訪ねるのに窓からだなんて、はしたないですわ」

声を上げたのは蝉舞だ。茶器を片手に部屋に入ってきたところ、突如現れた薫水の姿に、その経緯を推察したのだろう。

窘める言葉は微かな呆れと愉しげな空気を含んで、主に向けられた。

「秘密めいていて、面白そうだろうか？」

「それは逢瀬の場合です。薫水殿の場合は、単に面倒だったから、ではありませんこと？」

「バレていたか……」

「そのような甘い情緒溢れる行動は、その時と場に応じなくては、

ただの無作法です。よろしくて？」

「では、連れ出すときはバルコニーからにしよう」

するりと織史の手を取って、薫水は騎士を思わせる素振りですすめ膝を折った。

蝉舞はその様に紅い唇を微笑ませ、満足そうに薫水に席を勧めた。

そして薫水の手元に気付いて、目を丸くする。

「あら、珍しい物をお持ちでいらつしやいますのね」

「今日は、面白い本を持って来たんだ」

薫水は言いながら一冊の本を卓に置いた。

緑色の布表紙に、題名らしきものが金糸で刺繍されているその本は、背を糸綴じされた代物だ。

「文字はまだ難しいかもしれないが、これは絵本だから、何となく内容も分かるだろう」

言いながら、薫水は卓に物書きよりの紙と筆を置き、織史の前にその本を開いて置いた。

そこには淡い彩で描かれた絵と、物語の内容だろう文章が記されている。

流線型の筆文字は、象形文字のように記されており、織史はまだ読むことはできない。

それでも、描かれている絵を見ると、何が記されているのか分かる気がした。

これは、竹取物語のような女性の求婚譚だ。

「昔、老夫婦のもとに一人の少女が現れる。彼女は愛らしく、美しく成長して、四人の男性に求婚される。彼らは東西南北の領主で、彼女に贈り物をする。南は朱甄シユケンという鏡。西は白路ハクロという白い衣。

東は青化粧セイケウライという化粧道具。そして北は黒星コクシヨウという剣を贈った。しかし彼女は誰の想いも受け取れぬと、自害しようとする。そこへ現れたのが中央の神の遣いだ。その御遣いが言うには、彼女は中央の地が産んだ巫女。ゆえに道は決まっている。その報せを受けた四人の求婚者は、涙ながら彼女を中央に送るため舟を造らせた。彼らの

温情とその心に感じ入った彼女は、中央に向かう前に、彼らからの贈り物に神氣を込めた。そして彼らは、彼女から贈られた宝物を大切にし、暮らしていきましたとさ」

話の筋を薫水が語って聞かせてくれた。

やさしげな絵柄が随所に収められていて、主人公の女性と四人の男性との遣り取り、そして贈り物と彼女が巫女姿となって中央に帰る場面などは、正に『かくや姫』のそれと似通っている。

「あら薫水殿、彼らに贈られたのは、彼女の巫女装束ですよ」「ん？」

「物語らしいと言ってしまつとそれまでですけど、彼らが贈った四つの装身具は、そのまま姫巫女が身に着けて御帰りになられたのです」

「つまり、神氣が込められていたのは、そのまま中央からの宝物だったという訳か？」

「はい。ですから、花嫁が肖あやかっているのですわ。己を愛する者からの贈り物であり、神の氣を宿す祝福の装身具として。愛に包まれるというものですわ」

蝉舞はほんのりと頬を桃色に染めて、うっとり目を閉じた。

夢見る少女そのものの姿に、薫水は小さく笑って湯飲みを手にする。

それは幼い妹を可愛がる、姉のように温かな眼差しで、織史の口許にも自然と笑みが浮かんだ。

「今ので分かつたと思うが、ここに描かれている巫女装束は、そのままこの世界の花嫁衣裳になっているんだ。理由は蝉舞が言ったように、花嫁の幸福を祈るもので、サムシング・フォーのようなものだと思ってくれ。まあ、これを持ってきたのは花嫁衣裳を紹介するつもりだけでなく、そなたの暇潰し代わりと、この世界を簡単に象徴しているからでもある」

『世界を？』

「そう。この世界には、物語に登場したように四つの領土…厳密に

言うとな人が住む大陸と、神が坐す中央の神聖な地が存在する。四つの大陸は、中央からの位置で東西南北、それぞれを冠して大土タイトと呼ばれているんだ。そなたが発見された地であり、叶君や霄雲がいるのは東大土トウタイト。東の地だ」

織史の書いた紙に、薫水はその地名を記してみせた。

「隣接するのは北大土ホクタイト。大河を挟んで南大土ナンタイト。中央の聖地の向こうに西大土セイタイト。そして……地球の概念を持つ我々には想像し難いんだが、東の果てを行くと、中央聖地の一点、天空域へと繋がる。そうだな……球体の表面ではなく、内側に陸地があると考えてくれ。だから、中央聖地の向かい側、大土を間にすると反対側には、天空域という地があるんだ。ただ、天空域はその名の通り天上に位置するため、ある場所から下を覗くと、大土の一部が見えるというファンタジーが待っている」

「見える空は、天空域という地だということですか？」

「土地の概念というより、雲の上なのかな。太陽も雲も月も星もある空が、どのように存在しているのか、それを考え出すとこの世界の構造は不思議としか言い様が無い。まあ、この辺はメビウスの輪を思い浮かべると大体は理解できる、と私は踏んでいる。何より、私はここに世界調査に来た訳ではないから、“こういうものだ”と受け入れるほうが得策だと行き着いた」

「薫水さんは、初めは南に来たのですよね？」

「そうだ。南は朱妃殿の居られる地で……」

「南大土？」

「その通り。で、ここからがこの本が活躍するんだが、この絵本はただの絵本ではない」

薫水はもう一度卓の上の本を広げて、絵の上に指を走らせた。

丁度、主人公の女性に四人の男性が一堂に会して求婚している場面だ。

「最初に言っておくが、決して動いたりする訳ではない。ただ、現実には忠実なのだ」

薫水が初めに示したのは、金髪に青い衣を纏った男性だ。

「彼は衣も青いものを着ているから分かりやすいと思うが、どこの領主だと思う？」

「東？」

「正解だ。瞳も碧く描かれているし、どこか霄雲の外見と似ているだろ？ ではこちらの男性はどうだ？」

次に示されたのは赤い髪の男性だ。こちらは、どこか朱妃の姿を思わせる。

「南」

織史の解答に、薫水は満足そうに頷いた。

そんなふたりの姿を側で見ていた蝉舞が、微笑ましいと感想を口にする。

「まるで学士館の先生と生徒のようですね」

「ガクシカン？」

「学士館は、書いて字の如く、学を志す者の集まる場所のことだ。いわば学校のようなもので、そこから役人などが輩出されている。いずれ機会があれば、各地にあるから見学してみるといい。さて、話を戻すが、こちらの白い髪の男が西、そして黒髪の者が北を象徴している。彼らの衣服や姿、それから言動などは正にお国柄を表しているから、絵を見ているだけでもこの世界観が見えてくる。ただ約束の期日まで時間があるから、是非読んでみてくれ」

織史は、嬉しさに顔を綻ばせながら首肯する。

そして本に手を伸ばすと、じつくりと中身を読み始めた。

勿論、何と書いてあるのか文章はまだ読めないけれど、薫水が説明してくれた内容を思い出しながら、絵柄に照らし合わせて意味を考えることも楽しかった。

ここに来て初めて、己の前に広げられた包みの中身を、見ようとしている自分がいる。

それがとても懐かしい気分を起こさせて、織史は夢中でその本を読み進めていった。

再会（一）

「織史は居るか？」

扉の向こうから突然？公の声が届いた。

それはいつものように、庭に面した茶室で一息ついていた時のことだった。

華殿に来て六日目の昼下がりで、蝉舞の給仕で織史と薫水、そしてキツネの三人が茶卓を取り囲んでいた。

そこへ響いた、廊下から自分を呼ぶ？公の声。

昨日の内に、霄雲から訪問の手紙が届いていたので、その件だと直ぐに察しが付いた。

織史は立ち上がり、扉に近付こうとしたが、その腕をキツネが掴み、薫水の腕が行く手に差し出された。そして蝉舞が代わりに進み出て、静かに扉を開く。

織史は室内の緊張した空気に触れ、自分の愚かさに気付いた。

つい先日、自分が？公と霄雲の声音に騙されて傷を負ったことを、すっかり忘れてしまっていたのだ。呂妓のお蔭で大事には至らなかったが、自分の甘さが招いた失態である。

なんて馬鹿なんだろう、私は

肩を落として気を沈める自分を叱責し、織史は扉の方に眼を向ける。

「なんだ。居るのならさっさと開けぬか」

少し苛立ちを含んだ声で姿を見せたのは、金髪碧眼の？公である。

部屋の様子を訝しげに見詰め、何やら口を開きかけたその時、織史の横を通り？公の目の前に一陣の風が走る。

「……。貴様、喧嘩を売っているのか？」

眉間に深く皺を刻み、顔の前に広げた扇の内から覇気と共に怒りに満ちた声が響く。その足元に力チリと音を立てて、一本の鉄長針が転がった。

「悪いな。これもそちらの姫君を護るためなのだ。仕方あるまい」
答えたのは薫水だ。そして織史の前からその腕を下げ、再び茶卓に着く。

「何かあったのですか？」

「公の後ろから、心配そうに揺れる霄雲の声が聞こえる。それに答えたのはキツネだ。」

「先日、そなたらの声音を真似た奴らが来おつてな。声や姿だけでは信用がおけぬ」

「それは……。そ、それで、織史殿にお怪我は？」

「痛手を受けた。このことは我らの失態ゆえ、気が張って居つたのだ。そなたらを確かめるまではな」

キツネはわざとらしいほどに大袈裟な物言いでそう述べると、織史を引き寄せて卓に着く。

「そなたらから預かつた大切な姫君だ。ご理解頂きたい」

言いながらその腕に織史を抱え、キツネは霄雲を顧みる。織史はキツネの行動に大分慣れてきたのか、気にも留めずに蝉舞が出してくれた椅子に腰掛けた。

その様子から伏せるように視線を逸らし、霄雲は黙り込んでしまふ。

キツネは微かに咽を鳴らし、織史の肩に手を置いたまま、茶を口に運んだ。愉しげに茶を啜っているキツネを一瞥し、薫水は勧められた卓に着いた？公に訊ねた。

「で、一体何用か。問題が解決したようには見受けられぬ様相だが？ それに、そちらは……」

薫水は思わず言葉を詰まらせてしまった。

何故なら、？公たちに続いて入って来た緋色の眼をした童子が、唐突に織史に抱き付いたのである。

続く二人の童子も織史に駆け寄り、抱き付く。そして瞬時に、織史の周りが光に包まれ、童子の姿は黒色の毛並みに覆われた獣へと変化した。

腰の剣に手を掛けた薫水も、思わず呆気に取られてしまっている。織史は三頭の黒？ 猯に見覚えがあった。

艶のある漆黒の毛並みに手を伸ばすと、柔らかく、そして心地良い温もりが掌に広がる。紅玉の如き瞳はどこか潤んでいるが、喜色の眼差しを向けてくる。織史はその首に腕を回し、抱き締めた。

回した腕に応えるように、三頭も織史に鼻を摺り寄せた。

懐かしい朋友のようにも、そして我が子のようにも思われる。

「驚いた……。良くぞここまで、珍しい黒？ 猯を捕らえ、手懐けたものだ」

織史らの抱擁を目にして、薫水が感嘆の声を漏らした。

薫水の言うとおり、黒？ 猯は実に珍しい存在だ。以前に霄雲が話したように、黒色の？ 猯と言うだけで貴重であり、それも緋色の眼となれば希少度が増す。

しかしながら、その珍重な黒？ 猯を薫水も抱えているのだが、それはまた別のようである。

「一つ聞きたいのだが、何故に人型であったのだ？ 此処には特に人型でなくてはならない規定は無かった筈だぞ。それともこの仔らが人型をとれることを、見せ付けたかったのか？」

怪訝に眉を寄せてキツネが訊ねると、霄雲は？ 公に視線を向けて軽く溜息を吐いた。そして？ 公はというと、愉しげに口許を綻ばせて蝉舞の淹れた茶を口にした。

「そのようなことはせぬ。黒？ 猯の童子姿など、お前達の方が見慣れておるうが」

「では何故、わざわざ人型など取らせていたのだ。見ればまだ傷も癒えておらぬようではないか」

キツネの言うように、黒？ 猯たちはまだ腕や背中に裂傷が残っている。体調も本調子のようではなく、どこか苦しそうに見受けられた。

この傷は、あの時の

織史は七日前の事を思い出した。まだ自分が霄雲の宮に居た時の

事だ。

刺客に襲われた折、応戦する中で彼らが身を挺して守ってくれたものだった。通常の？ 猊であれば、傷はもう塞がっている筈だが、彼らは傷の回復よりも他に能力を遣っていたようだ。彼らに対する呪の効力も、まだ残っているのかもしれない。自分の声が戻らないように。

織史は彼の背をそっと撫でる。

迷惑を掛けて、ごめんなさい

織史は胸が締め付けられるような痛みを、感じていた。

そんな織史を他所に、？ 公が再び口を開く。

「条件を出したんだ。主に会いたければ、五日間人型を取り、おとなしくして居よ・とな」

「悪趣味な奴だ」

？ 公の言葉に薫水が吐き捨てる。

「どうやらそれは、当人の耳には届かなかったようで、？ 公は話を続けた。

「私も、始めは冗談のつもりであったのだ。人型をとれるとは思ってもしなかったしな。しかし、言った翌朝から人型で居るのには流石に驚いたぞ。それまでは鋼石をも砕くというその爪で、檻の壁を掻いていたのものたちが、言つとおりにおとなしく座っていたのだからな」

「それで仕方なく連れて来たというのか……」

「まあ、それが無くとも霄雲が連れて行くことを考えていたようだが」

「当然です。この仔たちは織史殿に危害を加えることなど無いのですから。何よりも、織史殿も気に掛けていらっしやいましたので……」

…

「と言う訳だ」

霄雲は少し戸惑ったように言葉を口にして、織史の方に視線を向ける。しかしそこで織史と目が合うと、気恥ずかしそうに眼を逸ら

してしまった。

織史は霄雲の心遣いに感謝の思いを込めて、言葉を紡ぐ。

ありがとう

いつも霄雲には助けてもらい、そして元気付けられている。織史はいつか必ず、霄雲への恩に報い、そして力になろうと思った。

「さて、もう一人その娘に会わせる者が居る。霄雲」
言うと？公は霄雲を庭の外に向かわせた。

再会（二）

少しして、霄雲に連れられて一人の少年が姿を見せた。

少年は織史の姿を眼にすると、直ぐに織史の前に跪いて頭を下げた。

「お捜し申し上げました」

良く通る、芯のある声音は織史の耳に聞き覚えがあった。

薫水は立ち上がり、織史は驚きと困惑に眩暈を感じ、そしてキツネは茶碗をその手から滑らせた。

「どういふ事だ、これは」

「どうもこうも無い。見ての通り、この者はその娘を捜していたのだそうだ」

「そんなことを聞いているのではない。第一、捜しているのは賊の奴らとて同じだろう！」

「だが、この者は奴らとは違う。確かな筋で、この娘を捜して居た」
「なんだと？ 大体、織史はこちらの世界の者ではないのだぞ。なのに何故、確かだと言い切れるっ！」

「左様でございます。この御方は黒の統頭様が御呼び寄せになられた、我が主にございます」

「黒の、トウズ…？」

「アルジだと…？！」

少年の言葉にキツネは何か気付いたように呟いたが、その声は薫水の戸惑う声に埋められる。

薫水は眉根を寄せて少年を見た。

黒衣に白銀の帯を巻き、至って簡素な服装ではあるが、結い上げた艶やかな黒髪や左袖から覗く黄金細工の甲飾りを着けた白い手などからは気品が漂い、ただの少年には見受けられない。そして深淵を思わせるような双眸と、感情の無い顔は少年というよりも童子に近い幼さがあった。

あなたは…

「そなたは何者だ？」

織史の言葉とキツネの疑問が重なった。

しかしそれは？公によって打ち払われる。

「再会の感傷に浸る前に、こちらの話を聞いていただけぬか」

苛立たしげなその声音に織史は視線を上げ、キツネと薫水は心中で「これのどこが感傷に浸っているように見えるのか」と毒づきながら、渋々とも言える表情を？公に向けた。

？公は多少の気まずさを感じながらも、咳払いを一つして椅子に背を預ける。

けれども織史の関心はその少年に向けられ、視線も側に在る少年に注がれていた。

見目形にそぐわない品格と、あまり動じない落ち着き様は不思議な感がある。何よりも、表情を崩さずに居て、織史を捜し求めて会うことができたというのに、まだ一度も笑顔を見せていない。その姿がかえって織史の脳裏に波紋を生む。

無表情で無愛想だけど、この感じと声はどこかで聞いた気がする。でも、そこがどこであったのか…。それに、この少年ともう一人他に誰かが居た気がする

一人頭を悩ませる織史を一瞥し、？公は話し始めた。

「まず、この娘を狙っているという人物だが、大方の見当は付いた。此処まで刺客を送り込めるほどの者だ、直ぐに目星は付いた。だが、狙う理由が判らぬ。判らぬ以上、我々も手が出せぬ。よって、不本意ながらお前の言うとおり問題は解決できておらん」

「敵が判っていないながら、刺客の証言もあるというのに何故できぬのか。私には解せん。それとも何か、敵方はこちらが簡単には手が出せないほど、高貴な御方か？」

？公の言葉に納得できぬ様子で薫水が口を挟む。その問いに顔を顰めながらも、？公は答えた。

「こういうことに関しては勘が良いな…。だがそのことよりも、我

々が今日此処にわざわざ出向いたのには、他の理由がある」

「そちらの童子殿のことだな」

「そうだ」

確かめるように口を開いたのはキツネである。そして視線を織史の横で座っている少年に向けると、キツネはいつもより少し低めの、威圧的な声音で訊ねた。

「そなた、名は何と申すのだ？」

「我が名はまだございません」

「それは…、どういう意味だ？」

「名は、主によって授けられますれば、我はまだ名を受けておりませぬゆえ、名はございません」

「先刻、織史を主と呼んでいたな。それならば、織史から名を授けられるということか？」

「はい。我が名は、真の主にのみ許された名でございます」

織史は目を丸くして少年を見たが、このことを前にも一度、聞いたことのあるような気がした。

自分が、名を告げる。

そう、元々その者にある名が頭に浮かぶのだということ教えられた。しかし誰に……。

「だが、その娘はそなたのことを覚えておらぬようだな」

？公は織史と少年を見ながら、口端を上げた。

「それに。名を授けるということは、その娘に養われるということだろう？」

「いいえ。そのような意味ではございません」

少年は？公に向き直り、明瞭な声で応える。

「我が名を口にできる方が主であり、主を御守りすることが我が使命にございます」

「では名を口にしたというのか？」

「確かに、黒の統領様の御前にて、我が名を口にされました」

「ならばそなたには、名があるのではないか」

「いいえ。口にはされましたが、宣告はされておいではないのです。しかし、我が主に代わりはございません」

？公は眉を顰め、少年を見返す。薫水も霄雲も、思案顔で二人の会話を反芻する。その中でキツネが、思い付いたように呟く。

「ならば、カンジユを使えば良かろう」

皆、キツネの一言に視線を一齐に向けた。そして織史は聞き慣れない言葉に目を丸くする。

「織史の記憶が戻れば、童子殿の名も告げられるし、自分がどのようにしてこちらに来たのか、そして何故狙われていうのかも判るだろう」

当然のことのようにキツネは言い放ち、？公を見た。何故今までそのことに気が付かなかったのかとも言うように、薫水もまた？公に視線を向ける。

「だ、だがアレは…」

「今使わずいつ使うというのだ。それとも何か、やはり高貴な者にしか使えぬとも言うのか？」

渋るように言いよどむ？公に、キツネは不敵に言い放つ。その視線に？公は顔を顰め、溜息混じりに答えた。

「解った…。こちらへ寄越すよう文を出そう」

「そなたらが出向かずとも良いのか？」

「いちいち御車を出させるのも面倒だ。それに、今夜はこちらに朱妃が来られるのだろう。話があるのでな」

？公は立ち上がり、霄雲を呼ぶ。そして何やら耳打ちをして薫水と共に部屋を後にした。

「キツネっ」

「公らと一緒に部屋を出た薫水が再び織史とキツネの所へ姿を見せたのは、蝉舞が改めて淹れたお茶に手を付け始めて直ぐのことだった。

てつきりまだ話しているとばかり思い、気を抜いていたキツネは、突然響いた声に眉を顰めた。

「何故もつと早くカンジユのことを思い出さなかった!？」

「……本気でそれを言っているのか？」

「当然だ」

呆れた視線を投げるキツネに、薫水は即答する。

足を踏み鳴らしてこちらに歩み寄る姿は、怒っているというよりは、悔しがっているようだ。

席に着いた薫水の態度に長く息を吐き、キツネはこめかみの辺りを指先で押さえながら、静かに言った。

「……ならば言わせて貰うが、記憶が抜けているなど、どうして私が判るのだ？　むしろお前こそ、どうして気付かなかった？」

「それは勿論、織史が叶君の屋敷に来たのが“最初”だと思ったからだ。思い込んでいた、と言って良いな」

「私とて同じだ。お前の登場を目の当たりにした訳ではないが、お前は朱妃の水盤に降り立ったのは知っている。だからこそ、叶君の領域ならば有り得る、そう考えていたのが我らの失念を生んだ。そうは思わぬか？」

「もつともだ」

そう口にしながら、薫水の態度は変わらず尊大な様子で、今度は側に佇んでいた少年に目を向けた。

「という訳であるから、我々も彼女の話を聞いている状態ではない。それ故、これから少し話をしようと思う。そなたには部屋を用意さ

せたので、暫らくそちらでお待ちいただけませんか？」

「……同席は、許されないと仰いますか？」

「彼女の戸惑いを拭うのに、その原因があつては簡単には行くまい。そのための協力、とお考えいただきたい」

「……承知致しました」

「では蝉舞。彼を案内してやってくれ。室は怜永に伝えてある」

「かしこまりました。ご案内させていただきますので、こちらへどうぞ」

蝉舞はゆつたりと微笑んで、少年を扉の向こうに促した。

それは決して強いものではなかったが、少年は織史を一瞥して頷くように瞼を閉じると、黙つて蝉舞に従つた。

何か、とても言いたげな何かを感じさせる視線。少年の瞳は、それを織史の胸に残して行つた。

同時に広がる、言い表せない胸の疼きに、織史はもやもやとした気持ちを抱く。

どうして、そんな視線を向けられたのだろうか。

どうして、自分はその眼に応えなくてはならないと、思ったのか。

そんな織史の胸中を払拭するように、薫水の声が響く。

「さて、これで取り敢えずは奴らの言葉を押さえ込めるな」

「……そのための問答だったのか、あれは。それにしては、随分私にばかり責任を押し付けておつたようだが？」

「私も似たようなことを言われたのだ、少しは分かち合え」

「だからと言つて、最後のはごり押しだろうに……」

「童子殿はあまり反発しそうになかったのな。それに、どうせなら連れて来た奴らと一緒にいるべきだと思つたのだ。奴め、あのまま織史の側に置いておこうとしたのだぞ？ 身元も明かさずに、図々しいだろ」

「それは、既に判つているからではないのか？ 捜していた件に関しても、“確かな筋”と申しておつたらう」

「その“筋”とやらを私に明かそうとせんとせんとところがムカつく」

「……気に食わぬからと、八つ当たりはよせ、薫水」

「良いじゃないか。織史とて、知らぬ……もとい、覚えておらぬ人間が、ぼーっと立っていて美味しくお茶が飲めるとは思えないからな」

「……もっともらしく言いおって……」

薫水の言い分に、キツネは呆れながら溜め息を零した。

けれどその口許は微かに笑っているようで、何だかんだと言いついながら、その意図を汲み取って話を合わせていたのだと、織史は思う。

流石に喧嘩腰で現れた薫水には驚いたけれど、どうやらあれは演技だったらしい。キツネの言葉から織史が察するに、ではあるが。

何より、目の前でお茶を口に行っている薫水の表情が、入ってきた時とは一転して綻んでいるのだから、そうなのだろう。……ほくそ笑んでいる、とも言えるところが、少しだけ気に掛かるが。

ともあれ、三人は蝉舞のお茶を各々口にしながら一息ついた。

「まあ、一先ずカンジユの到着を待つばかりだな」

長椅子に深く腰掛けたキツネを見て、織史は思い出したように薫水の袖を引いた。

先刻から皆の口の上っている、聞き慣れない名称が気になって仕方がない。

しかもそれが自分に関わりあるようであるから、なおさらだ。

カンジユとは、何ですか？

唇だけを動かしたが、薫水は織史の聞きたい事を分かった様子で、軽く眉を上げて答える。

「カンジユは、こちらの世界での特殊な道具のことだ。神器の一つらしい」

「ああ。紺珠と言って、東の宝物だ」

薫水の言葉に目を見開くと、付け足すように横からキツネが声を掛ける。

それが思いの外平然としていて、ふたりとも気に掛ける素振りがないことに驚いてしまう。

「東の地に伝わる宝物の一つで、記憶を呼覚ます力が秘められていると言われている。今のお主には丁度良かるう」

「宝物だからと言ってそう畏まることもない。有り難くその恩恵を授かる方が、霄雲たちも喜ぶ」

「主神が許可を出したのだ、それが有意義というものだな」

主神、て神様？

「そうだ。この話は聞いているだろう？」

薫水の問いに、織史はぶんぶんと首を振る。

まさか神と呼ばれる存在がいるなど、初耳だ。

そもそも、世界の在り方を知ったのも薫水との絵本で、だ。

「おいおい、根本の話であろう」

「まあ、言葉が伝わらなかつたのだから、詳しいことは話してないと思っていたが……それにしても、奴らは何も織史に伝えていなかったのか……？」

織史は、彼らと会った経緯を含め、彼らが自分をどのように捉えていたのか思い出した。

それを踏まえると、そのような話題が上らなかつたのはむしろ自然だ。この世界の生き物だと、彼らは考えていたのだから。

記憶を失くしている、もしくは戸惑っている、というよりも、惚とぼけていると考えていたに違いない。

特に？公などは、そう決め付けて正体を暴こうとした。あの日の一件は記憶に新しい。

ただ、剣呑に眉根を寄せた薫水に、織史は自分が妖物と間違われていたことは、伏せておこうと心に決めた。

そのような話をした途端、それぞれの関係に亀裂が走るような気がしたからだ。

「この世界が東西南北の大陸と中央の地、それから天空域からできているのは以前に話したな。人が住むのは主に、東西南北の大陸で暮らしている。大陸：大土タイトには、それぞれの“主神”と“皇帝”が存在するんだ。いわば、人々の生活を統治する者と、大土そのもの

に影響を与える存在がいるということだ。皇帝は民から選ばれ、主神と心を通わせることで大土を治めている。まあ、主神によって皇帝が定められると言っても過言じゃない。対して主神は、聖地より任命される尊い存在で、その名の通り“神”に等しい」

「自然神であるから、人の願いを叶えたり、逆に罰したりするような存在ではなく、その力を持って大土の状態を保つ要の存在だ」

「まあ、日本の土着神に近いと私は思っているよ。自然の力をその身に宿すが故に、尊く偉大だが、決して人を振り回す存在ではないからな。密着してはいるが、実際の統治は“人間”である皇帝が行うのだから」

「そうは言っても、皇帝とて戴冠すれば普通の人間とは異なってくるぞ。外見や……」

「その話はまた今度な。取り敢えず、この世界の人々は己の暮らす大土の主神を信仰するものが殆どだ。中には主神の持つ気質で信じる神を決める者もいるが、恩恵や慈悲のために信じているのではないところが、少しややこしい。彼らにとって主神とは、信じる対象というだけでなく従うべき指標なんだ」

指標……？

「それと言つのも、私達のいた国の“神”とは異なり……そうだな、生き神に近いかな。主神とは、神氣を宿している尊い存在だが、決して掛け離れた存在ではないのだ。何せ、現在の生活をしていられるのはその主神の存在があつてこそだと、彼らは知っている。つまり、主神が居なくなると、大土の平穩が揺らぎ、生活に困難が来たす事実を彼らは理解しているんだ」

俄かには信じられない内容を、聞いているのだと思った。

無神論者とは言わないまでも、神様という存在を身近に感じない生活を送っていたために、突然「神様が実在して、生活圏を支えてくれている」と言われても、直ぐには実感できない。

そう、思っていた。

けれど織史の心は、薫水の言葉をするりと呑み込んだ。

それは濁いた砂に水が染み込むのと同じくらい、当然のことにように織史の意識に浸透した。

「まあ、既にその一柱神と出逢っているから、否定のしようがないと思うが……」

既に会っている？ 神様と？

「なんだ、それも聞いていないのか……本当に奴ら、何も伝えていなかったのだな……」

「だが、東宮庭におったのだろうか？」

キツネの問い掛けに、聞いた事のある地名が上がり、織史はこくりと頷いた。

まさか、あの地にも特別な何かがあるのだろうか。

知らずに過ごしていただけに、聞くのも少し恐い気がして、思わず両手を握り締めてしまう。

「東宮庭は東の宮。東は？公の管轄だ。その時に説明されていると思っておった……が、それもなかった様子だな」

「ああ見えても奴は、東大土の主神だ。性格に難があるが、権威と神の能力は確かにある」

薫水の言葉に、織史は愕然とした。

「確か、朱妃殿とは面識があるのдар？ 叶君や霄雲殿からその辺りの話を受けずとも、彼女と会った折に説明は……受けなかったのだな、その様子じゃ」

瞬きも忘れて自分を見詰めている織史に、薫水は窺うように言葉を掛けたが、自分の予想がその姿から否定されて気の毒そうに溜め息を吐いた。

さすがのキツネも失笑気味で、何も口にしていない。

だがそれは当の織史だって同じだ。むしろ眩暈がしそうだ。

確かに、朱妃が叶君の依頼で自分と対面した時に、「南帝が妃」とかいう言葉を耳にした気がする。その時の？公らの態度があまりすぎて記憶の奥底においやられていたけれど。

その朱妃に対して鷹揚な態度を取っていた？公の姿を思えば、それなりの地位にある人物だと察しはつく。だがまさか、“神”の位などとは微塵も考えていなかった。確かに、思い返せば言われてみればその手の要素はたくさんあるが、それでもまさか“神”とは予想外で、言葉が出なかった。

薫水は「仕方ない」と僅かに眉根を寄せてお茶を一口飲むと、織史の肩に手を置いた。

「まあ……あの二人や叶君はともかく、朱妃殿に関しては知っておいた方が良さだろうから、簡単に説明しよう。彼女はその名の通り、朱帝 南帝と呼ばれる南大土の皇帝妃だ。元々は、以前に少し触れたと思うが、朱姫シユキと呼ばれて皇帝の娘御だった。私たちが出会ったのはその頃だから、今でも朱姫殿とお呼びしてしまうことがあるが、これは一種の号らしい。皇帝はその名の前に治める大土、もしくは色を付けて称され、妃も同様に称される。在任中の子どもは、娘の場合は“姫”で息子は“皇子ミシ”と呼ばれるのが通例らしい。ただ、皇太子という存在がないため、皇子は幼名で呼ばれることが殆

どらしい。そうだったな、キツネ？」

「ああ。皇帝はその大土に坐す主神が任命するものだからな、世襲制ではないためにその血縁者も他の民と同様という訳だ。だが、娘御に関しては政治的な利用を避けるために、親が任期中は名を隠されているのが普通だ。かくいう朱妃殿も、我らが出会った折には仮の名を名乗っておった」

「勿論、例外はある。敢えて名を明かし、皇帝からの庇護を否定する者もいるし、またその逆も然り」

「皇子にしても、幼名ではなく別名を付けて皇族位とは別に自身の職務を持つ者もいるしな。兄弟姉妹などは特にそのような体裁を取っている場合が多い」

「まあ、簡単に言ってしまうえば親の七光りを利用する人間は少なく、単純に実力主義の地位らしい。人物相関に関してはまた追々話してやる。朱妃殿にしたって、その身分をひけらかすような方ではないし、此処へ来られるのもお忍びだから、そう畏まる必要はない」

「確かにな。今夜は特に、東の者がいるから堅苦しさを嫌がるであらう」

キツネが付け足すと、薫水も頷きながら「安心しろ」と続けた。

どうして東の者がいると気にしないのかは気に掛かったけれど、織史は既に顔色を変えていた。

？公の正体だけでも恐れ多いというのに、朱妃ほどの大それた人物にまで会っていたなんて、考えただけでも卒倒しそうになる。あれだけ気さくに接していたから、確かに気品や威厳のようなものを感じはしていたが、これほどまでとは思ってもよらなかったのだ。

「…おい、織史。大丈夫か？」

一気に話を聞いた所為か、頭がぼうつとし始める。それを認めた薫水が声を掛けるが、勿論返答はない。

織史は頭から湯気でも出そうな状態で、何とか頷こうとは思っていたが、結局そのまま前のめりに卓の上に倒れこんだ。

自室に運ばれた織史は、その後暫く寝台の上で苦しそくに眉間に縦皺を刻んでいた。

同じ頃、突然倒れた織史を心配して霄雲と例の少年が部屋の前に訪れた際、同じく通り掛っていた？公が「貴殿の職務怠慢がゆえだ」と薫水に冷めた視線を向けられて、さらにそこから白熱した口論に発展したことは、言うまでもない。

そして日が入る頃、南帝の妃である朱妃が華殿に到着し、織史は蝉舞によって仕上げられた正装で、朱妃と対面した。

「お久しぶりでございますわね。ご加減はいかがでした？」

「ヨシトキ殿。まだ声は戻っておりません」

返答に戸惑っている、横から薫水が声を掛けた。

「まあ。ですが、私が診たところでは、もう治る筈ですわ。それに、以前よりもお顔の色も優れていらっしやるようですし、安心してましたわ」

朱妃は艶やかに微笑み、薫水たちと共に宮殿の奥へと入って行く。その背を見送っていると、不意に背後から溜息が聞こえた。

驚きながら振り返ると、同じく朱妃の向かった先に視線を流しているキツネの姿が在る。

「あれは当分、薫水のことを放さぬな……」

ポツリと呟かれた言葉に首を傾げていると、目の前の織史に気付いたキツネは苦笑いを浮かべた。

「さて、庭園にでも行かぬか。池の東屋で月見酒も良いだろう」

良いながらキツネは織史の腕を掴み、薫水たちとは逆の道へと向かい始めた。

庭に着くと、早速酒の用意を持ってこさせてキツネは直ぐに一杯目の杯を空ける。

ぼんやりと漂う月と水面に浮かぶ月影。二つの月に照らされて、溜息が漏れるほどの姿を見せる月桂樹の木々。紺青の空には踊るような旋律を奏でる星々が煌き、全てが絵画的で動画的な美しさだ。

そして何よりも、杯を片手に月光を受けるキツネの姿は魅惑的で

幻想的である。

横目に何度もその様子を窺ってしまふのは、キツネの妖術にでもかかってしまったのだろう。どんなに止めようと思っても、キツネに向いてしまふ自分の視線は、そうとしか思えない。

やがて織史の眼に気付いたのか、キツネがその白銀の瞳を織史に向けた。

まるで夜空を支配する満月がそのまま見る者を射抜くように、キツネの瞳は織史の姿をその内に捕らえている。そして艶やかに微笑まれると、心を奪われてしまったかのように、身動きが取れなくなつた。

頬が紅潮していくのがわかる。

先程手渡された杯を持つ手がどこか危うく、震えているように感じる。

こんなにも美しい人であつただろうか。

織史は微かな眩暈を覚えていた。

「どうしたのだ。さあ、もっと飲め。お主のは果実酒だ。薫水にも気兼ねはいらぬだろう」

言いながら、まだ半分以上も残っている杯に、織史用にと用意させた橙色の徳利から林檎酒を注ぐ。

なみなみと注がれた杯に唇を寄せて、言われるままに飲むとやはりアルコール特有の香りと苦味が広がり、少し気が引けた。しかし林檎のさわやかな酸味と甘さがそれを抑えてくれるお蔭で、飲むこと自身は苦に感じることは無かつた。

話をすると普段通りのキツネのだが、月を見上げる姿は別人だ。不思議な魅力を放っているとは思っていたが見れば見るほど、考えれば考えるほど、その奥深い美しさに心を奪われていく。

叶君や朱妃が持つ美しさとも、宮中の女性たちのそれとも、勿論？公の放つ絢爛たる美しさとも異なり、強いて挙げれば妖艶という言葉が合うのだろうが、何かが違うようにおもえる。

そう思案していると、次第に自分がここに居て良いのだろうか

不安に思えてきた。

目に入る景色も、夜風に流れる花の香りも、傍らに座す麗人も、自分では不似合いな気がして息苦しささえ覚える。どうにかして、この場を離れようかと思ひ始めると、唐突にキツネが立ち上がった。「酒が切れた。少し行ってこよう」

ほろ酔い状態でキツネは短くそう告げると、一人建物の中へと入って行く。

その背中を見送り、織史は再び景色に視線を投げる。

先刻までと変わらぬ月と樹林の姿。ただキツネが居なくなっただけで、こつも見方が変わるのかと思うほど、その景色は違って見えた。

織史は静かに喉を潤す。少し、苦味を感じた。

もう、慣れたと思っていたのに

ある一点に意識が向けられ、織史の表情に影が掛かる。

……

ポツリと口先から零れたのはある人を想う言の葉。呼んでも、届くことなど無いと知っているのに、何も変わらないと解っているのに。

あの頃は、家族を始め人が居ることが当たり前前すぎていた。そして一歩踏み出した、全てから離れた世界は新鮮で、明るくて、自由に見えた。けれど知ったのは汚さと嫌悪の塊だった。そして略奪という名の喪失。それが自分に突き刺さり、悲しくて、どうにかして逃れたかった。これ以上の苦痛は無いというくらい、全てが辛く思えた。

しかし存在するかしないかという次元での“離れ”はある感情に気付かせた。

全てを失ってから、人を失ってから気付いた感情は、鋭利に心を攻め立てる。

膝を抱えて、織史は顔を埋めていく。

「織史殿？」

不意に声を掛けられ、織史はビクリと肩を震わせた。振り返るとそこには霄雲の姿。手には金細工の鳥籠を持ち、織史の反応に少し戸惑っている。

「どうかしましたか…?」

ただ驚いたただけなのだと言われ、首を振ると、霄雲は安堵しながら隣に腰を下ろした。

霄雲も朱妃に会うためなのだろう。昼間見たときよりも、正装と呼ぶに相応しい服装を身に纏っている。

格好に拘らず、いつも気品を持ち得ているために、どんな衣服であつても霄雲への見方は変わらないのだが、やはりそれなりの格好をしようとどこか違った印象を受ける。勿論、それは全く悪いものではなく、とても気持ちの好いものだった。

きつとそれは、立ち居振る舞いにその意識が感じられるからだろう。現に今も、何気なく帯や裾を払いしなやかに座すその姿が、慣れたものに見られた。

その視線を受けた霄雲は、織史の関心が鳥籠にあると思い、口を開いた。

「この鳥籠のことですか？ 先程、東宮庭に伝書を飛ばしたものですから。流石、華殿の物ですよね」

きつと、伝書用の鳥のことであろう。同時に先刻霄雲と？公が何かをしたためていたのを思い出す。

見ると伝書鳥の鳥籠というよりも、ただそれだけで鑑賞に堪えるような見事な細工の施された鳥籠である。針金のように細い筋が花や葉、蔓を象り美しい曲線を描いている。そして取手部分には蝶を模した銀細工が、まるで鳥籠という花に止まっているかのように飾られている。以前に見た、霄雲の宮にある鳥籠も煌びやかで豪華な代物であつたが、これもまた意匠を凝らした物だ。

織史は霄雲の言葉に頷きを返し、目を細めた。

「織史殿は、こちらで何を？」

問われて、手元にある杯を軽く上げて見せる。

「お月見…ですか？ 確かに、今宵の月も綺麗ですね」

夜空を見上げて霄雲は息を吐くように言葉を口にした。

たなびく雲が月影を時折覆う様もまた風情があつて、織史も霄雲も自然と口許が緩む。ほんの微かに流れる甘い花の香りが一層二人の間を近くするようで、言葉を交わす必要などなくなる。

織史は先程まで抱えていた心の靄が薄れていくのを感じ、素直に夜空を見上げる。

「あの、織史殿。あまりご自分を追い詰める必要はないですよ」

少しして、霄雲が申し難そうに口を開いた。

「声が戻らないことも、記憶が曖昧であることも……。あまり気にしすぎると、かえって良くないと思いますし」

霄雲が何を言いたいのかは雰囲気で解することができた。

織史は慌てて霄雲の顔を見て、首を振る。

確かに、それらのことが織史自身を自責の念に引きずり込むこともあるが、今はそのことを考えていた訳ではない。むしろ忘れてしまっていたくらいだ。

霄雲の心遣いは嬉しいが、それ以上に自分の不甲斐なさを感じてしまう。

しかし霄雲はそんな織史の態度を、謙虚さの表れと思い、一層心を砕く。

「良いですよ、隠さなくても。？宮の頃も、宮へお呼びした頃も、貴女は変わりませんでした。どこかずっと、ご自分を責め続けているように見えました。つい先程の貴女のように……」

向けられた視線に、織史は戸惑う。その眼が自分の内なるものに注がれているようで、胸が高鳴った。

霄雲の眼が、強く優しく自分を温めていくような感じがあった。

同情ではなく、霄雲自身の静かな心が真実に見えて、織史は目頭が熱くなる。泣いてなどしまつたら、また霄雲は困ってしまうだろう。そんなことでは不甲斐なさ過ぎる。

いつまでも守ってもらえると、勘違いしてしまう自分を抑えるよ

うに、織史は涙を耐える。

しかしこんな時にどんな表情を見せれば良いのか分からず、結局俯いてしまう。

ふわりと優しく、織史の肩が温かくなった。

「大丈夫ですよ」

「ありがとう」

織史は心の内で何度も呟いた。

「貴女には、素敵な部分があります。現にあの三獣も、童子殿も、貴女を慕っている。あの者たちも貴女の良さを解っているですよ。だからこそ、側に居る。その…僕もその一人なのですが…それでは足りませんか？」

霄雲の言葉に顔を上げて織史は、赤くなって頭の後ろを掻く霄雲の眼と視線を合わせた。

自然と頬が緩み、首を振りながら笑んでみせる。そして

「ありがとう」

掠れた、少し低めの声が辺りに響いた。

霄雲にとっては初めての、織史にとっては聞き慣れた、声。

「あ…私…、声が、戻った…！」

言い様の無い感情が湧き上がってくる。喜びなのか、懐かしさなのか、織史は涙を流していた。

驚きに眼を見開き、次いで顔を綻ばせて霄雲は急に織史を抱き締める。

「やっと…貴女の声を聴くことができた。貴女と、話すことができるっ」

腕に力を籠めて霄雲は織史を抱え上げる。瞳を輝かせて、もう一度強く抱き締める。

「うおっほん！」

咳払いが一つ、二人を現実に戻した。

「声に戻ったのなら、まずすることがあるだろう」

無然として階の壁に凭れ、腕組みをしながらこちらを見ているの

は？公である。その言葉に霄雲は慌てて腕を解いた。

織史はまだ覚めぬ感動から、頬を赤らめて高揚した面持ちで建物の中に向かう。

「それでは私、朱妃様にお礼を申し上げてきます」

足早に階段を駆け上がり、童女のような笑顔を振り撒きながら？公に一礼する。

「？公様、色々ありがとうございます」

そのまま奥へと消えて行く織史の背中に、霄雲が制止の声を掛けたが既に織史の耳には届かなかったようだ。

「今行かれても、朱妃殿は部屋に居られるかどうか……。おや、どうしたんですか？公殿？」

呆れたように呟き、階に足を掛けた霄雲の目に、？公の姿が止まった。

端正な顔立ちが固まり、？公らしからぬ表情である。そしてそれが正気を取り戻すと同時に、霄雲の肩を掴む。

「決めたぞ」

「な、何をですか？」

「私は決めたぞ。良いな、霄雲」

「だから何を決めたのですか？」

「あの娘を嫁にする！」

「はいっ！？」

「私はあの娘を嫁に迎える。これで我が大土も安泰だな」

一人で言つて一人で納得し、？公は霄雲を放した。

次に表情を固めたのは霄雲である。面を喰らったと言うよりも、理解できずに周りの時間まで止めてしまったかのように、霄雲は動けないで居た。

「な、何を仰るのですか、？公殿！」

再び動けるようになった霄雲は、？公の後を追って階を上がり、石廊下を駆けて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0099v/>

黒鶴鴿

2011年12月11日23時28分発行